

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要

2003



2004年12月
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(本絵) 銀山法加那「次櫻舟」(仮縁)

二三の本題

(刀) 菊村代継第一水

(表裏絵) 銀山法加那「次櫻舟」

(刀) 研磨美守桂

(刀) 研磨美守桂

(鎌倉時代末～室町時代)

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2003

2004年12月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2003（平成15）年度には、鹿田地区において医学部附属病院病棟新営工事にともなう発掘調査等を実施するとともに、室内整理作業を進めて創立五十周年記念館およびサテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリーの新営にともなっておこなった発掘調査の成果を報告書として刊行することができました。

今回の鹿田地区附属病院病棟新営にかかる発掘調査は1998（平成10）年・1999（平成11）年の第9次・第11次調査に続くもので、西側から3回に分けて実施した発掘により本学構内の遺跡発掘としてはかなり大きい5400平方メートルの調査を終えることとなりました。病棟建設地全域においては、まず弥生時代後期から古墳時代にかけての水田遺構が造成され、その上層では本遺跡の主体をなす中世・近世の遺構群がひろがっていました。調査区南端の大規模な東西溝を中心として、これに交差する南北溝やため池状遺構、あるいは調査区北寄りに集中する建物柱穴群や井戸・土坑等が見られました。広い面積の調査で鹿田地区南西部の遺跡内容が明らかとなったので、今後は、病棟建設地のすぐ南側で実施したエネルギーセンター建設地の発掘結果もあわせ、できるだけ早い機会に調査成果を報告書としてまとめたいと思っています。

なお、今回の病棟建設地の発掘調査期間中には、前2回の調査地に建設された建物の1階ロビーにおいて鹿田遺跡発掘20周年特別展示会を7日間にわたって開催しました。患者さんや病院職員・一般市民の方々多數が、通りすがりに、あるいはじっくりとパネル写真や出土遺物を観察して下さり、毎年津島地区でおこなっているキャンパス発掘成果展とはいくらか異なった雰囲気がありました。とりわけ入院患者の皆さんのがんばりは、説明にあたった職員一同への励ましとなりました。

こうした発掘調査の実施や展示会・成果展等の開催等にあたっては、本学内外の多くの方々からご協力をいただきました。関係部局・各位に厚くお礼申しあげます。

最後になりましたが、本学が2004（平成16）年4月1日から国立大学法人岡山大学へ移行したにともない、本センターも法人理事がセンター長を兼務し、副センター長職を設けて新たな体制で運営にあたることとなりました。構内遺跡の保護・調査・研究・調査成果の公開・普及等の事業のいっそうの発展に努めたいと思いますので、今後ともご支援をお願いする次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長） 阿 部 健

副センター長（文化科学研究所教授） 稲 田 孝 司

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003

目 次

第1章 津島岡人遺跡の調査研究

第1節 立会調査の概要	1
1. 調査の実施状況	(光本順) 1
2. 公共下水桿接続工事に伴う立会調査	(野崎貴博・光本) 1
3. 総合研究棟新當雨水排水敷設工事に伴う立会調査	(野崎) 6
4. その他の立会調査	(光本) 8
第2節 津島岡大遺跡の研究	13
1. 神文時代後期の集落構造とその推移	(山本悦世) 13

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要	21
1. 鹿田遺跡第14次調査（医学部附属病院病棟）	(岩崎志保) 21
2. 鹿田遺跡第15次調査（総合教育研究棟間連工事）	(野崎) 25
第2節 立会調査の概要	28
1. 総合教育研究棟新當屋外排水敷設工事に伴う調査	28
2. 総合教育研究棟外構工事に伴う調査	29
第3節 鹿田遺跡の研究	33
1. 鹿田遺跡第14次調査出土木簡について	(岩崎) 33

第3章 その他地区の調査研究

第1節 東山地区の調査概要	(岩崎) 36
---------------	---------

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理・研究	37
1. 調査資料の整理	(山本) 37
2. 調査資料の分析	(岩崎) 37
3. 調査資料の保存処理	(岩崎) 46
第2節 調査成果の公開・活用	46
1. 公開・展示	46
2. 資料・施設等の利活用	50
第3節 2003年度調査研究員の個別研究活動	52
1. 科学研究費採択状況	52
2. 論文・資料報告	52
3. 研究発表等	53
4. 資料収集・実態調査	53

第5章 2003年度における調査・研究のまとめ

付 編	51
岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項	55
1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程	
2. 2003年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織	
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項	
4. 2004年度の新規課題およびセンター組織に関する事項	
付表・付図	63

挿 図 目 次

第1章

図1	調査区と土層柱状図位置	2
図2	土層柱状図	2
図3	A地区 土層断面位置	2
図4	A地区 土層断面	2
図5	B地区 遺構断面位置	3
図6	B地区 遺構平・断面	3
図7	No.4区间 調査位置・土層断面位置	4
図8	No.4区间 舞東壁土層断面	5
図9	No.6区间 調査区・土層断面位置	5
図10	No.6区间 土層断面	5
図11	調査区位置	6
図12	土層断面柱状図	6
図13	A地点 溝群土層断面	7
図14	B地点 遺構群土層断面	7
図15	津島地区における立会調査地点 土層柱状図	8
図16	2003年度の調査地点【1】 津島地区	11~12
図17	津島岡大遺跡の位置と周辺環境	13
図18	津島岡大遺跡における地形復元と調査地点	14
図19	各調査地点の類型化と空間利用1 —縄文時代後期—	17
図20	各調査地点の類型化と空間利用2 —弥生時代早期—	18

第2章

図21	第14次調査地点位置	22
図22	土層断面柱状図	22
図23	検山遺構全体図	24
図24	第15次調査地点位置	25

図25	調査区南壁土層断面	26
図26	検山遺構平面図	27
図27	井戸 半・断面図	27
図28	調査位置	29
図29	十層柱状図の位置と上層断面	29
図30	調査位置・土層柱状図位置	30
図31	上層柱状図	30
図32	5~7区間 上層断面	30
図33	2003年度の調査地点【2】—鹿田地区—	32
図34	鹿田遺跡第9・11・14次調査 木簡出土地点	33
図35	木簡出土状況	33
図36	鹿田遺跡出土木簡	34
図37	木簡の船例	35

第3章

図38	2003年度の調査地点【3】—東山地区—	36
-----	----------------------	----

第4章

図39	出土鐵滓外觀写真	42
図40	出土鐵滓類の全金量と二酸化チタン量の分布図	42
図41	製鍊滓と鍛冶滓の分類	42
図42	砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製鍊滓の分類	42
図43	粘土遺物の化学成分と耐火度との関係	42
図44	ミクロ組織写真	43
図45	鹿田遺跡第14次調査現地説明会風景	46
図46	鹿田キャンパス特別展示会風景	47
図47	展示会日別入場者数	48
図48	展示会見学風景	48
図49	津島キャンパス展示風景	49

表 目 次

表1	2003年度津島地区調査一覧	9
表2	津島岡大遺跡調査概要一覧	15
表3	遺構分布状況からの類型基準	15
表4	遺構(土器)出土状況からの類型基準	15
表5	各調査地点の類型表	15
表6	a. 類型の相関関係—縄文時代後期—	16
	b. 類型の相関関係—弥生時代早期—	16
表7	低湿地型貯藏穴一覧(岡山埋)	20
表8	2003年度施田地区調査一覧	31
表9	2003年度東山地区調査一覧	36

表10	調査資料と調査項目 (津島岡大遺跡出土資料)	44
表11	津島岡大遺跡出土鐵滓の 化学成分分析結果	44
表12	胎土の化学成分分析結果と 耐火度測定結果	44
表13	鐵滓資料のX線回析試料。 顕微鏡組織と製造工程の分類	44
表14	土壤サンプリング分析値	45
表15	保存処理工程表	46

付表・付図

付表 1	1982年度以前の構内上要調査（1980～1982年度）	63
付表 2	2002年度以前の構内主要調査（1983～2002年度）	63
付表 3	埋蔵文化財調査研究センター収集物概要	69
付表 4	埋蔵文化財調査実刊行物	71
付表 5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	71
付図 1	津島地区全体図	72
付図 2	2002年度までの調査地点【1】一津島地区一	73～74
付図 3	2002年度までの調査地点【2】一鹿田地区一	75
付図 4	2002年度までの調査地点【3】一三朝地区一	76
付図 5	2002年度までの調査地点【4】一東山地区一	76
付図 6	2002年度までの調査地点【5】一倉敷地区一	76

例　　言

1. 本紀要是、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2008年4月1日から2004年3月31までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果及びセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本紀要において登場している津島大字大浦路は岡山市津島中二丁目1～1、鹿田道路は岡山市鹿田町二丁目5～1にそれぞれ所在する。
3. 資料分類にあたっては、岡山大学理学部地域科学科松田敏哉助教授ならびに岡山理科大学自然科学院所の白石純氏にご協力・ご助言を頂いた。記して感謝申し上げる。
4. 本文は、岩崎信保・野崎貴博・光本耕・田本悦臣が分担執筆し、執筆者名は首次および文末に記した。
5. 編集は阿部健一センター長、積田平司副センター長の指揮の元に山本が担当した。

凡　　例

1. 大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、平成14年度（2002年）4月1日より施行された「測量法及び水路乗務法」の一部を改正する法律にに基づき、世界遺産登録を基準に表記する。
2. 津島地区では、国土座標系V座標系（X=-144,156,4617m, Y=-37,246,796m）を起点とし、真北を基準とした構内座標を設定する。範囲50mの方形区域である。また、岡池地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と、津島地区に分ける（付図1）。
3. 鹿田地区では、岡上座標系V座標系（X=-149,456,3718m, Y=-37,646,7700m）を起点とし、座標軸をN=15°～Eに傾ったものを基準とした構内座標を設定する。地区割りは、範囲50mの方形を基準としている。
4. 本文で用いる方位は、津島地区、鹿田地区は国土座標系の座標北を、他は磁北を用いている。
5. 岡山大学構内の道路名は、周辺の道路の場合はそのまま沿用する。三朝地区の発掘調査地点は小字名をとり「福岡苑路」と呼ぶ。他地区は住戸の名称で仮称する。
6. 調査名簿「発掘調査」に分類したものについては、各道跡ごとに調査紙に従って次数番号で呼称し、「式刷・研磨調査」、「立会調査」に分類したものについては、住戸の名前を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは「式刷・研磨調査」に分類する。
7. 「発掘調査」についての記述は、いずれも現段階での燕麥番号であり、詳細な正式報告ではない。
8. 表に記載した所属部は、原則として各学部の略文字を略号として用いている。
9. 付表2に記載した調査・観察については、掲載段度が中段以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未開拓部分も含め、全てのデータは、各センターにおいて保管している。
10. 本文などで使用の燕麥番号は表と一致する。
11. 本紀要に掲載の地図（付図1）は、平成10年岡山市発行の岡山市図版7～9・10・13・14を複写したものである。

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

2003年度に津島岡大遺跡において実施された立会調査は、事業数で24件を数える（表1・図16）。全体として掘削深度が深く、規模の大きな工事が多くなされた結果、立会調査によって遺構の確認や旧地形の復元のためのデータ等、有益な知見を得ることができた。

長期的に実施された主な工事事業としては、旧事務局宿舎の移築に伴う工事や自然科学系総合研究棟新宮間連の工事、農学部総合研究棟改修工事、公共下水接続工事があり、立会調査を随時行った。なかでも、公共下水接続工事と自然科学系総合研究棟新宮にかかる工事では、たびたび縄文時代の上層まで掘削がおよび、比較的多くの遺構を確認した。

以下では、はじめに、特に重要な知見が得られた公共下水接続工事（表1 調査番号21）と自然科学系総合研究棟新宮（同8）に伴う立会調査について、調査成果の概要を述べる。次に、その他の立会調査地点について、中世段階以下の上層を確認した地点に関して概要を示す。

(光本 順)

2. 公共下水接続工事に伴う立会調査

津島地区においては、9ヶ所で公共下水接続工事が行われた。近世層までの掘削がなされたNo. 9区間（職員宿舎）を除く8ヶ所では、いずれも中世段階以下の土層を確認しており、No. 1・2・4・6・8区間では縄文時代の上層まで掘削がなされた。ここでは、特に遺構が確認されたNo. 2・4・6区間について取り上げ、他の区間については第1節4、「その他の立会調査」の項において上層の堆積状況を示すこととする。

(1) No. 2区間（津島南B E～B G 10m）

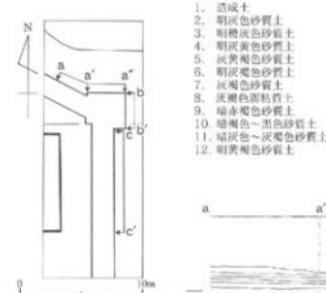
a. 調査の概要

本調査は、津島南地区の東半部、大学構内敷地南端に設置された下水栓と体育館脇の合併処理槽とを接続する汚水管敷設工事に伴って実施した立会調査である（図1）。本調査区周辺では、東に約50mの位置に1986年度に実施した第4次調査地点がある¹⁰。調査は2001年2月2日から24日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

① 層序と地形（図2・3）

本調査区は南北約85m（管路長約95m）であるが、全体にはほぼ同一の堆積状況を示しており、著しく異なる上層の堆積はみられなかった。各層の時期は、少量の出土遺物とこれまでの津島岡大遺跡の調査成果に依っている。

1層は1907年（明治40年）の陸軍屯管造成以降の造成土である。2層は明灰色砂質土で、明治時代の耕作土である。3層は明橙灰黄色砂質土、4a層は明灰黄色砂質土、4b層は明黄灰色砂質土、5層は灰黃褐色砂質土で、近世の耕作土である。6層は明灰褐色砂質土、7層は灰褐色砂質土で、古代から中世の耕作土、8層は灰褐色粘質土で、弥生時代から古代までの耕作土であると考えられる。9層は暗赤褐色砂質土、10層は暗褐色～黒

図1 調査区と土層柱状図位置
(縮尺1/1200)図3 A地区土層断面
位置(縮尺1/400)

色砂質土、11層は暗灰色～灰褐色砂質土で、津島地区一帯に広がりをもつ「黒色土」と呼称している暗褐色土である。上面が弥生時代前期にあたる。12層は明黄褐色砂質土で、縄文時代後期の基盤層である。本調査地点は南北約85mの間に谷部や河道といった低地は確認されなかった。縄文時代後期の基盤層でみた地形の起伏は南北で約0.2m、段も起伏の大きい部分の比高も0.3m程度であり、幅の広い安定した微高地が形成されていたと想定できる。縄文時代後期の基盤層が最も低くなるA地区周辺は弥生時代前期の溝が多数掘削される範囲であり、弥生時代には最も低い部分に多数の溝を掘削していたことがうかがえる。ただし、本調査区の東約50mの地点に位置する第4次調査地点では、北京から西南方向に走行する中世段階の河道を確認しており、本調査区南

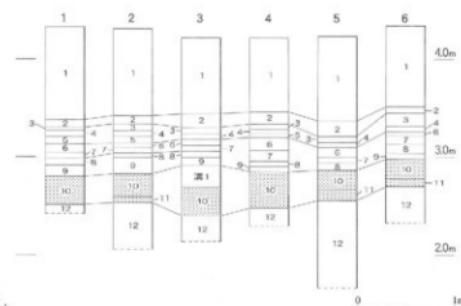
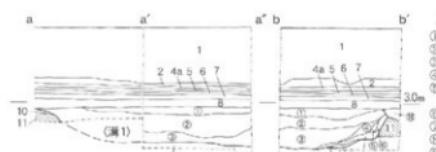


図2 土層柱状図(縮尺1/50)



- ① 明黄褐色砂質土
- ② 灰褐色砂質土
- ③ 灰褐色砂質土、下層は粗砂
- ④ 灰褐色砂質土
- ⑤ 灰褐色砂質土
- ⑥ 黑色土ブロック合む。
- ⑦ 黑色帶砂層
- ⑧ 黑色砂質土・土温合む。
- ⑨ 黑色砂質土

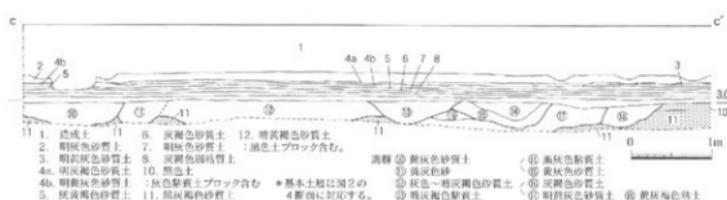


図4 A地区土層断面(縮尺1/60)

端よりさらに南にこの河道が通ることが想定される。

② 遺構

遺構が密に確認されたのは、A・B地区である。A地区では弥生時代前期の溝群、B地区では縄文時代後期の土坑・弥生時代前期の溝を検出している。

A地区(図3・4) :約10mの範囲に北東～南西方向の溝が多数切りあいながら掘削されている。溝1からは弥生前期の底底部が出土しており、溝1は弥生時代前期に掘ると考えられる。

また、そのほかの溝もいずれも溝1の掘削開始面である10層上面から掘削されており、同様に弥生時代前期の溝であると考えてよい。本調査地点から東へ約50mの第4次調査地点でも北東から南西方向に走行する弥生時代前期の溝が確認されており、この一帯では弥生時代前期に多数の溝が掘削されていたことがわかった。

B地区(図5・6) :c-c'以南の樹部分は縄文時代後期の基盤層である12層まで、それ以北の管路部分は10層(黒色土)上面まで慎重に掘削した。この時点で断面を精査したところ、12層から切り込む落ち込みのラインを認めた。そこで精査を続けたところ、大規模な土坑であることが推測された。しかし、管の埋設では、これ以上の掘削を必要としないため、数本のトレンチを入れて、断面で土坑の形状や規模、構造を確認することとし、大部分を残す方針で調査を進めた。

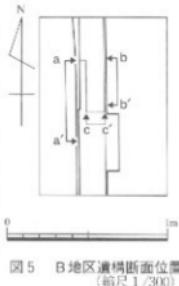


図5 B地区遺構断面位置
(縮尺1/300)

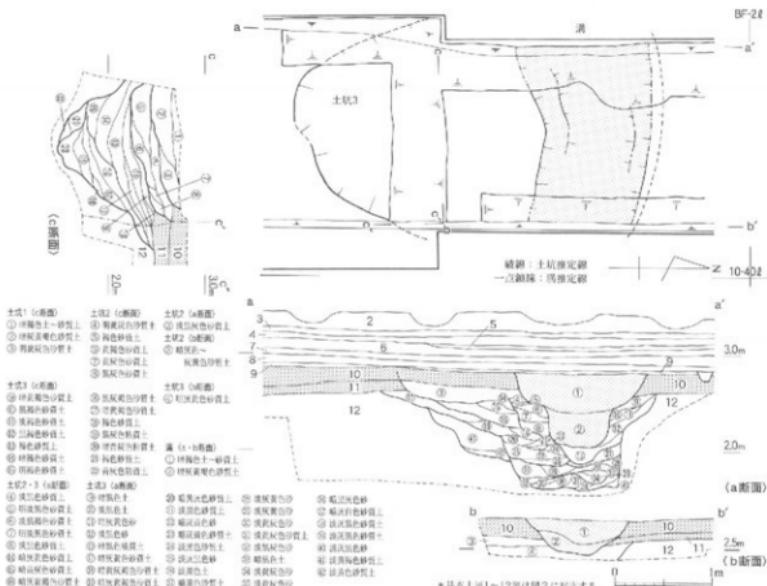


図6 B地区遺構平・断面(縮尺1/50)

土坑の平面形は、今回の調査区では幅が狭く、全体を明らかにすることはできなかつたが、検出できた部分と断面を合わせて考えると、土坑3に関しては長軸長約3.8mの長方形を呈すると推測される。また、断面形は、a断面をみると、北側は垂直に立ち上ること、南側の立ち上がりは緩いことが指摘できる。埋土は北、東側では黄褐色砂質土と黒色土が互層状に堆積するが、南、西側では黄褐色砂質土が主体的である。本土坑から遺物の出土はなかつたが、土坑の掘削開始面が縄文時代後期の基盤層である12層にあり、縄文時代後期の所産とみられる。

また、上下2層に細分される黒色土のうち、下位の11層上面からも掘削がなされている土坑2や、c断面では10層から掘削が開始される可能性もある土坑1もあり、縄文時代後期以降、長期にわたって掘削が継続されてきたことが考えられよう。土坑3についてはa断面でも数回の掘削が認められ、このことも長期の掘削を推測することと矛盾しない。

本土坑の埋没後、東西方向に走行する幅約1.1mの溝が10層上面から掘削されている。遺物は出土していないが、掘削面と黒色土が埋土の主体をなすことから、弥生時代前期の溝と考えられる。この溝についても、これ以上の掘削は行わずには保存措置をとっている。

b.まとめ

本調査区は全体的に起伏が少なく、安定した微高地を呈していることが判明した。また、調査区全体で確認できた黒色土より上位の部分では、A・B地区の遺構密度はやや密な状態であることが確認されたが、それ以外は極めて希薄であった。ただし、縄文時代後期の基盤層である12層まで掘削が達したのは耕部分と南側の管路の一部であり、縄文時代後期の遺構密度については確認できていない部分が多い。

縄文時代後期の土坑は、長期にわたって掘削が継続されたものであると考えられるが、その機能や性格については不明な点が多く、今後の検討が必要である。
（野崎貴博）

註（1）采一郎1987「境内遺跡新発見に伴う発掘調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報4』岡山大学埋蔵文化財調査室 pp.12-15

(2) No. 4区間 (津島北AZ16区)

調査地点は津島北地区の西南端に位置する(図7)。耕部分において、1.3m四方の範囲で、地面から約2m、標高2.05mの深さまで重機による掘削がなされ、12層上面から掘り込まれた東西方向に伸びる溝を検出した。

① 層序 (図8)

確認した各層の帰属時期は、津島地区的上層の堆積状況に照らし合わせると以下のようになる。1層は、明治時代の造成土、2層は暗青灰色砂質土で明治時代の耕作土である。3・4層は黄褐色砂質土、5・6層は淡黄褐色砂質土で、近世層と考えられる。7・8は灰黄白色粘質土、9は暗黄灰色粘質土で中世層と考えられる。10層は暗灰色粘質土で、古代～古墳時代頃の土層、11層は暗黄褐色粘質土、12層は暗黄灰色粘質土で、弥生時代中期～後期の土層と考えられる。13層は黒褐色砂質土で、津島地区的健層である「黒色土」(弥生時代早期～前期)に相当する。14層は黄褐色砂質土で、縄文時代後期の基

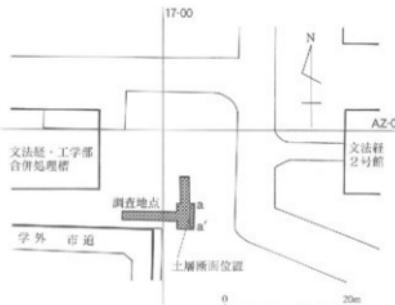


図7 No. 4区間調査位置・土層断面位置 (縮尺1/800)

無層である。

(2) 造構 (図8)

12層上面で検出した溝は、上面で標高2.25m、底面で標高1.725mに位置し、東西方向にのびる。幅は上端が現状で1.2m、底面が0.25mを測る。溝の断面形は、中央部分がU字形にくぼんで深くなり、それより上は両側に緩やかに開く形となる。溝の埋土は、3つに分層される。そのうち、上2層の埋土は色調や含有するブロックの内容において比較的類似している。断面の形状と併せて考えると、埋土第1・2層と第3層とは、掘削あるいは堆積の時期や要因が異なることが考えられる。溝から遺物は出土していないが、層位関係から弥生時代中期～後期頃の造構であると考えられる。(光木)

(3) No. 6 区間 (津島南B G22区)

本調査地点は、津島南地区の西端付近に位置する(図9)。

(1) 層序 (図10)

斜部分で標高1.95m、管路において標高2.4mまで重機による掘削がなされた。深度の深かった樹部分では「黒色土」が認められず、樹文時代の基盤層に相当する黄褐色砂質土(6層)を標高2.15m付近で確認した。

したがって、旧地形としては微高地をなしていたものと考えられる。

2層は、津島地区における近代層に相当し、3つの層に細分される。樹部分の西壁においては図示した東壁よりも2層が20cmほど高く堆積しており、東壁と西壁の間で段が形成されていたことが推定される。3・4層は近世～中世の土層と考えられる。5層は須恵器小片や鉄滓が出土し、古代から古墳時代後期に相当する層と考えられる。

(2) 造構 (図10)

樹周辺において造構を確認することができた。近代の畦畔状造構、弥生時代終末から古墳時代初頭のピット等を検出した。

畦畔状造構は、2a層の堆積後に形成される。東西にのびると考えられ、現状で南北幅3.5mを測る。畦畔状造構の北端は段状に掘削されている。一方、南端は、樹より南側の管路部分で矢板を使用した掘

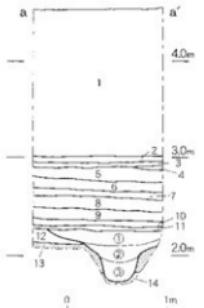


図8 No. 4 区間 東東壁
土層断面 (縮尺 1/30)

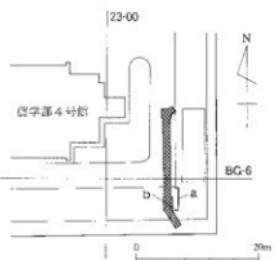


図9 No. 6 区間 調査区・土層断面位置
(縮尺 1/800)

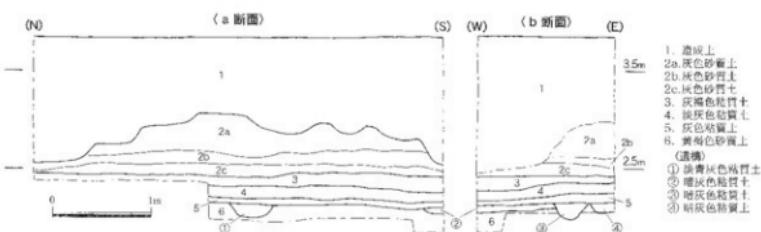


図10 No. 6 区間 土層断面 (縮尺 1/50)

削がなされたため明確でない。明治期の地図によると、「L」字状に東と北へのびる道が本調査地点に相当する場所に存在しているため、咲町状遺構はこうした道と何らかのかかわりがあるものと推測される。

柵部分の東壁断面では、須恵器を含む遺構（土層番号①）を確認した。この遺構は、それと対応するとと思われる遺構が反対の西壁に認められるため、溝である可能性が高い。遺構から出土した須恵器が小片であるため、詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期～古代とみてよいであろう。

柵部分の東壁端から南壁にかけては、6層上面に遺構堆上と考えられる土器小片の混じる土層がみられる。この土層を切る形で、南壁に2基のピットが隣接して確認された。その内、北側のピットからは、弥生時代終末から古墳時代初頭ごろの高杯や甕片が出土した。

このように、津島岡大遺跡の西南端において旧地形の状況と弥生時代終末～古墳時代初頭をはじめとする遺構・遺物の存在が明らかとなった。（光本）

3. 総合研究棟新営雨水排水敷設工事に伴う立会調査

（津島北AX～BA06区）

a. 調査区の位置と調査の経過

本調査地点は2002年度に発掘調査を実施した津島岡大遺跡第28次調査地点（自然科学系総合研究棟）の南から東門に至る南北約120mの範囲である（図11）。周辺には西に接続して第5次調査地点（大学院自然科学研究科棟）がある。立会調査は2003年8月4日から9月2までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

b. 調査の概要

① 屢序（図12）

調査地点の雨水排水設備は北から南に排水するものであり、掘削深度は南から北に向かって減ずる。したがって調査地点の北半では、掘削は中世以前に遡る土層には至っていない（S）。

各層の時期は、共伴遺物が少なく決めがたいが、周辺の調査成果を参考に基づ定しておきたいたい¹³⁾。

1層は1907年（明治40年）の陸軍屯営地造成以前の造成土である。2層は青灰～灰色砂質土で、明治時代の耕作土である。3層は黄褐色～明黃褐色砂質土で、近世の耕作土である。4層は明灰～



図11 調査区位置
(縮尺 1/2000)

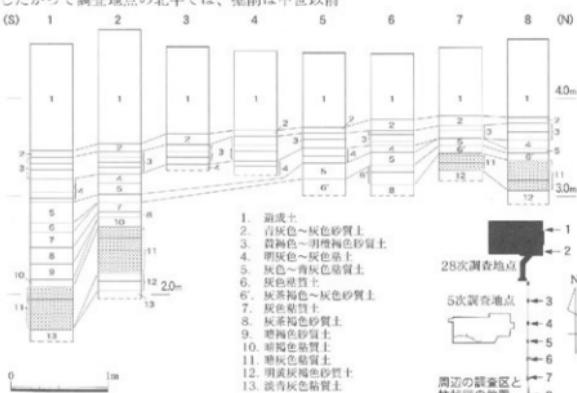


図12 土層断面柱状図 (縮尺 1/50)

灰色粘土で、中段の耕作土である。5層は灰～青灰色粘質土で、古代から中世までの耕作土と考えられる。6層は灰色粘土、7層は灰色粘質土で、古墳時代の包含層と考えられる。8層は灰茶褐色砂質土で、弥生時代中期～後期の包含層と考えられる。9・10層は北に隣接する第28次調査地点で確認しているが、本調査範囲では確認できていない。第28次調査地点では、9層は暗褐色砂質土、10層は暗褐色粘質土で弥生時代前期に比定されている。11層は津島地区一帯に広がりをもつ、「黒色土」と呼称している暗褐色土である。上部が弥生時代前期にある。12層は明黄灰褐色砂質土で、绳文時代後期の基盤層である。第28次調査地点では12・13層に細分される。

(2) 地形

今回の調査地点と第28次調査地点の成果をあわせると、津島北地区の東半で南北約180mにわたってほぼ連続した土層の堆積状況を確認できたことになる。そこでこれまでの周辺の調査成果もあわせて地形復元をしたい。

図12をみると、11、12層の標高が南北で大きく異なることに気づく。南側の柱状図7、8では、绳文時代後期の基盤層である12層上面の標高が約3.0～3.2m、上向が弥生時代前期に比定される11層では、上面の標高が約3.3～3.4mであるのに対し、北側の第28次調査地点において微高地と認識されている柱状図2の地点では12層上面の標高は約2.2m、11層上面の標高は約2.7mであり、0.7～1mの比高がある。これらの間にあたる範囲は、今回の調査範囲では掘削深度が小さく中世以前の状況については不明な点があるが、本調査地点の柱状図3～5闇の西に近接する第5次発掘調査地点の調査成果³⁾を参考にすると、この範囲には绳文時代後期～弥生時代前・中期までの東西方向の河溝が通るとして推測される。このことから、绳文時代後期～弥生時代前期までは河道を挟んで南北に標高差のある微高地が形成されていたことがうかがえる。弥生時代以降、この旧地形は反映されながらも、全体的には平坦化が進んでいく。

(3) 道構

本調査地点ではA地点の範囲で弥生時代から古代・中世までの東西方向の溝群、B地点範囲で近世～近代の溝と畦畔を確認した。

A地点(図13)：弥生時代から古代・中世の東西方向の溝群である。多数の溝が約10mの範囲に切りあいながら掘削されている。本地点より西へ約150mの地点に位置する第19次発掘調査地点においても同時期の東西方向の溝が多数切り合って検出されており³⁾、本調査地点の溝群と連絡するものと考えられる。

B地点(図14)：近世～近代の東西方向の溝と畦畔を確認した。幅は畦畔が約1.2m、溝が約3mである。現在、大学構内を東西に貫流する座主川は条里のK画を反映していると考えられるが、この溝と座主川との心々間

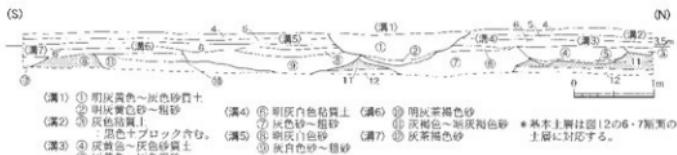


図13 A地点 溝群土層断面(縮尺1/60)



図14 B地点 道構群土層断面(縮尺1/60)

の距離は約105mとなっており、今回検出した溝と畦畔は近世段階の条里の区画を反映した遺構の一部である可能性が高い。

c.まとめ

本調査地点では、南北約120mにわたって土層を観察できたことにより、地形復元のためのデータを得ることができた。また、近世段階の条里の区画を反映している遺構を確認できたが、このようなデータは立会調査でも得られるため、今後も丹念にデータを積み上げ、確度の高い条里地割を復元していく必要がある。(野崎)

註(1) ここでは第2次調査地点の成果を参考にした。

・ 阿部教三2004『津島岡大遺跡第28次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要3002岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.4-6

(2) 阿部芳郎編1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(3) 野崎貴編2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

4. その他の立会調査

個別に取り上げなかった調査地点のうち、中世層以下の土層まで掘削が及んだ地点の土層堆積状況は図15となる。その中で、「黒色土」及び縄文時代の上層を確認した地点は、No.21-1、21-8、15、6、4地点である。

総合研究棟新營に伴う排水工事(No.15)では、地面から約2.5mの深さまで掘削がなされた。この地点で

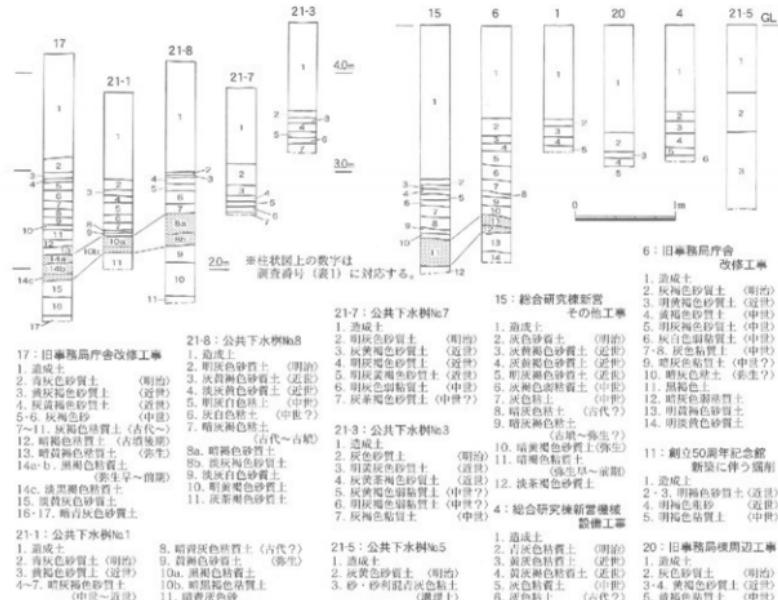


図15 津島地区における立会調査地点土層柱状図 (縮尺 1/50)

は、弥生時代中期～後期頃に相当する土層から振り込まれた溝（北東～南西方向）の一部が検出された。

公共下水樹接続工事 No. 514(間) (No. 21-5) では、近代層である 2 層の下に、砂・砂利混じりの粘質土である 3 層が、現状で 80cm にわたって振り底まで堆積していた。この土層は、東西方向にのびる近世段階の溝の埋土であると考えられる。本調査地点は現在の市主川の北に隣接しているが、市主川と同様の位置関係であった津島鳥岡遺跡第 25 次調査では、中長から近世に至る東西方向の溝が確認されている¹⁵⁾。したがってこの溝は、近世段階の市主川の埋土である可能性が高いものと考えられる。

(光木)

註 (1) 野崎賛助2001『津島鳥岡遺跡第23・24・25次調査』『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』pp. 8-18 岡山大学歴史文化財調査研究センター…

表1 2003年度津島地区調査一覧

番号	地名	調査地区	施設	調査名 称	調査期間	推定深度 (GL-m)	層 級
1	立会 津西町	津西町 15	下 (井)	明正二「昭和記念新作仕立作業 (雨水井水井筒、鐵蓋井上)	4.7-7.20-17	1.3	中長帶まで埋土
2	立会 津西町	AY01	事務室	平成遷入式スタート式調査工事	-	0.25	造成土内
3	立会 津西町	A703	政治会館	教育行政課窓口業務改善申請取扱工事 (排水槽設置)	4.23	1.1	舌谷層まで
4	立会 津島町	AX06	上	総合研究和新技術実験促進工事 (ガスも管埋設工事)	5.2-9.16	0.4	古代層?まで埋土
5	立会 津西町	BO02	下	リックター場地監査調査 (埋土調査)	5.13	0.85	造土+内
6	立会 津島町	BC15	事	旧事務所改修改築工事 (排水管埋設)	6.25-27	2.43	造土+内
				排水管改修改築工事 (排水管埋設)	7.9-10	-	古土壤層まで
7	立会 津島町	B2-B2.8	新	農業土壤化開拓改良施設整備工事 (排水能力・電力・岩引込み排水井上)	7.28	1.7	古土壤 GL-1.6m 黒色土、GL-2.1m での切妻型壁面露頭
8	立会 津西町	AX 06 ~ TA 06	T.	排水井付新設その1工事 (排水井水)	8.4~9.2	1.7	堆積3.3-3.4m で黒色土、強生～古代の東西層多段、近世・近代の市街跡、河跡埋設
9	立会 津西町	TG14	事	農業改良施設埋設工事	8.20	0.3	造土内
10	立会 津島町	AX01-05	T.	農業改良施設新設改修改築工事 (雨水井水設置)	8.21-22.26-29	1.2	近世透水層
11	立会 津島町	DD15	事 (ほか)	旧事務所改修改築その他の工事 (5V ピット)	8.21	0.8	造土内
12	立会 津島町	TD14	新	農業改良施設埋設改修改築工事 (排水井水引出管・雨水管配管設置)	9.22	0.5	高塹土内
13	立会 津島町	BC-BD15	新	農業改良施設新設改修改築工事 (ガス配管設置)	9.21	0.9	造土内
14	立会 津島町	AW-AX 06-07	T.	排水管新設耐震改修改築工事 (外灯)	9.30 11.14-18-27	1.4 1.4	小貝層まで埋土
15	立会 津島町	AW-AK 06-07	T.	组合せん清断新設改修改築工事 (排水)	10.1-11.6	0.5-0.9	排水管改修改築層まで埋土あり、各年透水層
16	立会 津島町	TD14	事	旧事務所改修改築その他の工事 (排水井水改修)	10.7-8	1.4	古土壤まで埋土
17	立会 津島町	BC-BD15	事	旧事務所改修改築改修改築工事 (外給水管・雨水管配管)	10.14-17-19 11.7	0.8-2.75	算路は系丘上、西で鱗文状透水層
18	立会 津島町	BD14-15	新	農業改良施設新設改修改築改修改築工事 (ガス管建物上)	20.29	1.17	造土内
19	立会 津島町	DC-ED 15-16	事	旧事務所改修改築改修改築工事 (ハンマー削除、ホットスチーリング、鉄筋除鋸)	20.31	1.4	ホットスチーリング・外灯柱点は近世層まで開削
20	立会 津島町	BD15	事	旧事務所改修改築改修改築工事 (排水井上)	21.12	1.45	中長層まで埋土
2-1	立会 津島町	BG-BCH13	公用・土木施設	公用・土木施設改修改築工事 No. 1 工間 清掃洗浄工事処理場	-	1.8	古土壤層まで埋土
2-2	立会 津島町	BE-BE10	井、2 区間	井、2 区間 体育館裏～底踏迷路	1.95-2.25	1.8	地盤埋土開削層、路面まで開削、再生土出現
2-3	立会 津島町	BG02-08	No. 3 区間	No. 3 区間 生田川 BOX 機	-	1.1	半挖削まで削削
2-4	立会 津島町	A716	No. 4 区間 文、法、河2号通路	-	2.05	古土壤層まで削削、再生土出現	
2-5	立会 津島町	BA10	No. 5 区間 摺子軒	-	1.9	半挖削の山田川を既設	
2-6	立会 津島町	DG22	No. 6 区間 奥田川 4 号隧道	-	1.35-1.9	既設既存隧道まで削削、先づ古土壤層ビット	
2-7	立会 津島町	S116	No. 7 区間 豊田川河床	-	1.15-1.3	半挖削まで削削	
2-8	立会 津島町	S215	No. 8 区間 内藤合	-	2.0-2.15	古土壤層まで削削	
2-9	立会 津島町	AT11	No. 9 区間 黑須合	-	1.2	半挖削まで削削	
23	立会 津島町	AZ00-GA02	教育	教育学部英語 I 実業英語改修改築改修改築工事	04.1.13	0.5	造土内
23	立会 津島町	IB10	保	区域普通センタ・施設その他の工事	04.2.28	0.6	既設埋土
24	立会 津島町	AL14-15	文(6) 水、文、壁、ドア、ラップス構造工事	04.2.27	0.5	造土内	

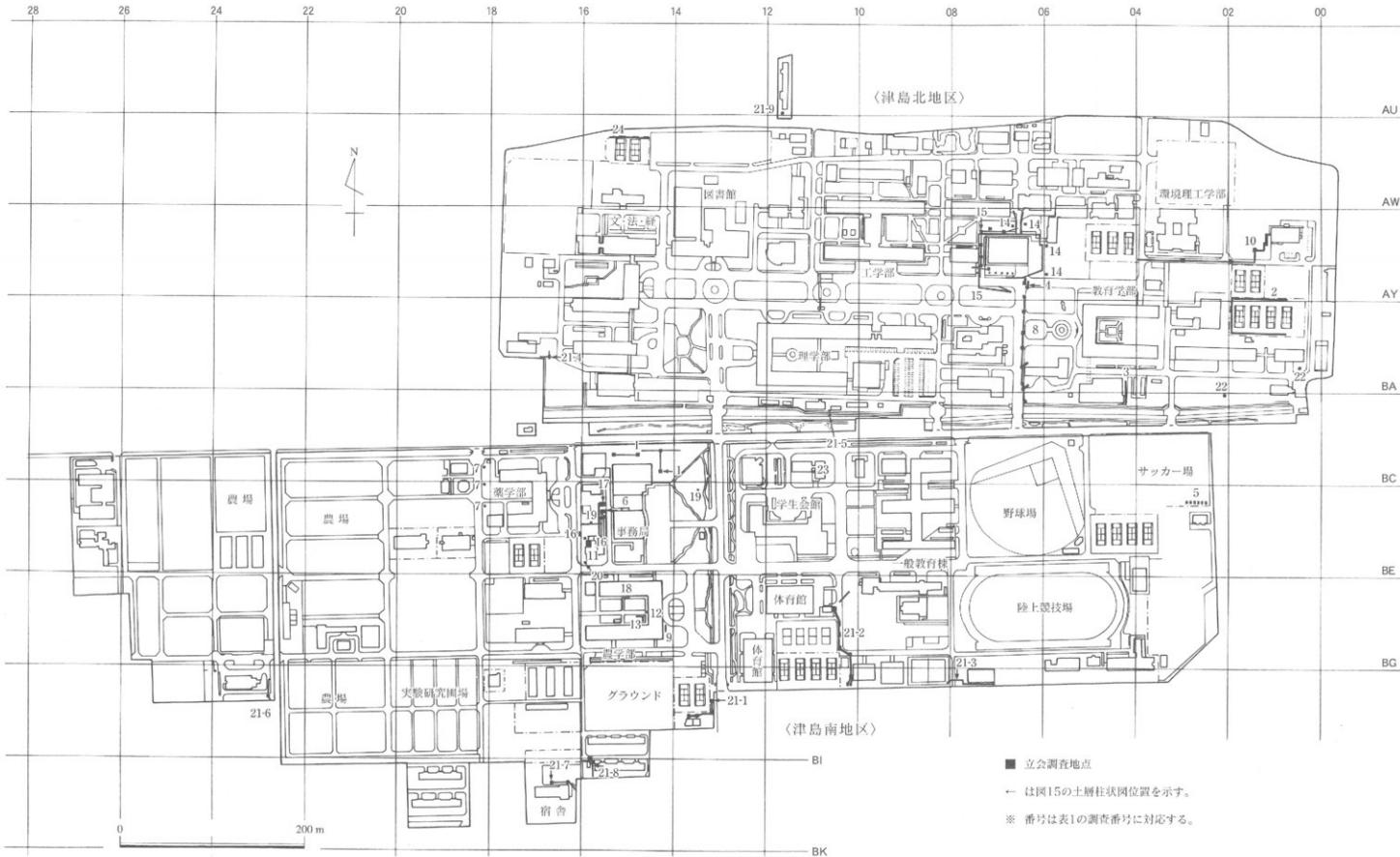


図16 2003年度の調査地点【1】一津島地区 (縮尺1/4000)

第2節 津島岡大遺跡の研究

1. 縄文時代後期の集落構造とその推移

山本 健世

津島岡大遺跡は、東西1.4km、南北0.8kmに広がる岡山大学津島キャンパスの敷地の中に、これまでに大小合わせて29ヶ所におよぶ発掘調査が実施され、確認調査あるいは工事に際した立会調査の成果も含めると、遺跡全体の状況をある程度理解できる段階に至っている。また、同遺跡の南側では約1.5kmの距離に位置する津島遺跡や周辺遺跡、北側に隣接する朝寝鼻貝塚などの調査成果も報告されており、津島岡大遺跡の範囲内にとどまらず、岡山平野西岸域の状況を広く読み取ることができる。

ここでは、同遺跡の全体像を整理することによって、縄文時代後期における集落構造の一端を明らかにしたい。

(1) 津島岡大遺跡における集落の実態

津島岡大遺跡の内容は、これまでに計14回の発掘調査報告書あるいは年報・紀要において報告されている¹⁾。報告にあたっては、縄文時代後期の集落構造と生業との関係を念頭において論考²⁾のほか、居住域での石器出土状況³⁾や炉の問題⁴⁾から具体的な利用内容の解明が試みられてきた。

ここでは、遺構・遺物のあり方から各調査地点を類型化し、地形と空間利用の関係を模式的に捉えることで、最も資料が豊富な後期前葉における集落構造の特徴を描き出し、その後の推移も合わせて考えることとする。

a. 縄文時代後期における地形復元

津島岡大遺跡は、岡山平野中央部を南流する旭川西岸に位置する。遺跡の北側には半田山丘陵が迫り、南側には張り出する尾根から北側に大きく入り込む谷部の前面に、丘陵裾から平野部にかけての立地が認められる(図17)。

遺跡内には、東側に位置する旭川からの水路が半田山丘陵下端を巡って遺跡内に流れ込み、中心的な河道を形成するほか、背後の谷部からの流路が遺跡の北側周辺における谷地形形成に影響していることは、現状の地形や水路からも容易に理解できる(図17・18)。特に注目されるのは、遺跡の中央部を走る河道Aである(図18)。同河道は、第3・15次調査、第5次調査、第23次調査の3地点における調査から、微高地との比高差や規模、あるいは急峻な斜面形成や堤上から予想される水量の多さなどの点で、他の低地部とは明らかに異なる状況が共通しており、遺跡のほぼ中央を北東から南西に向けて蛇行しながら走る中心的な河道と評価される。その他に、北東から南西方向に並ぶ各地点(第19次調査、第10次調査、第14次調査、第26次調査)において、砂礫などの基盤層の高まりが連続的に認められることから、河道Aの南側に第26次調査地点に続く河道Bの存在が予想される。一方、遺跡の北側部分には、比高差が小

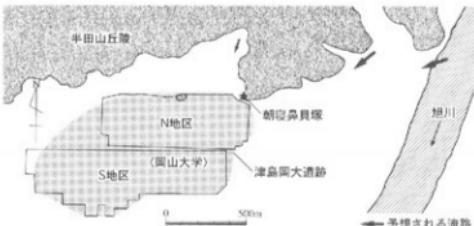
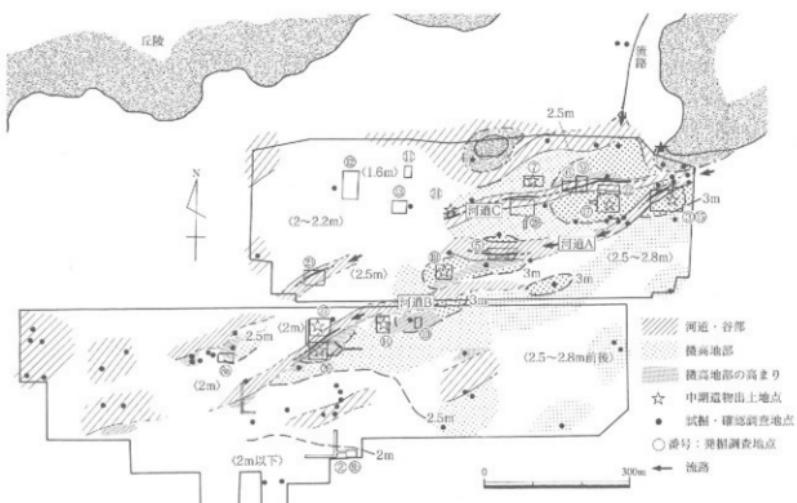


図17 津島岡大遺跡の位置と周辺環境



さく緩やかな起伏に富み、流路部があまり明確ではない谷地形の河道C(図18)が広がり、蛇行しつつ第13次・12次調査区を経て遺跡の背後にあたる北西部に続く可能性を有する。

縄文時代に対応する土表面の標高値を確認すると、遺跡北東端に位置する尾根付近が最も高く、標高3m以上を示す。同数値を示す地点は、河道Aあるいは河道Bの縁辺に限定される傾向が強い。各調査地点の位置関係からまとまりを考えると、第3・15・17・22・6・9次調査地点、第5・19次調査地点、第10次調査地点の3カ所に高位部があげられる。それぞれの周縁には標高2.8~2.5m(第7次調査)、さらにその外側には同2m前後の範囲が確認される。このレベルまで下がるのは遺跡の北西域あるいは南西域である。全体としては北東から南西への傾斜を示すが、縄部にわたる地形形成に北東端の尾根の存在や河道A・Bの影響が関わっていることが予想される。

大小の河川が網の目状に走り、その中に微高地が点在する状況というよりは、中心的な河道とその周辺に形成された自然堤防状の高まりを核とした微高地の存在が特徴的である。また、微高地は、北側の丘陵に近い部分では、その範囲は広く安定的であり、南側に向けて、その広がりは狭小で点在的となる様子が見え隠れする。

こうした地形は、縄文時代中期後半には、ある程度出現していたことが、僅少ではあるが各地点で出土する中期土器の存在から予想される。その後、谷部は後期段階に埋没し比高差を減少するが、弥生時代前期まで大きな変化を認めることはできない。

b. 集落構造の復元

津島岡大遺跡における発掘調査地点の内容(表2)をもとに、各地点の類型化を行って全体像を考えよう。

i) 類型化の基準

類型化するにあたっては、遺構の分布と遺物の出土状況に注目して基準を設定した(表3~5)。

する状況にあるため、その空間利用を考える上では遺物が一定量出土している場合、つまり、I～III類に当たるもののみを対象とした。

（遺物）

出土量からI類～IV類、出土位置によってa・b類にそれぞれ分類した。遺物量が多いと評価されるのはI・II類である。量の多さから考えて、利用場所との強い関係が予想される。III・IV類は非常に少ない状態と言える。こうした遺物量に関しては、調査面積との関係が問題となることは当然であるが、ここでは、曖昧ではあるが、出土状況を加味することで各地点の傾向として示した。

ii) 類型の相関関係からみた集落の特徴

前項で想定した類型の相関関係をみると、時期によってその状況に違いが認められる（表6）。

後期では、頸型間の相関関係の強さと類型数の多さが特徴である。相関関係では、多量の遺物量を示すI類はA①類・B①類と関係が強く、その他の類型は遺物量が少量～僅少のIII類あるいはIV類となり、遺物密度が高いほど遺物量は多いという明快な関係を示す。その中で、E類でありながら遺物量の多いII類を示す第22次調査地点は、第17次調査地点に接する位置にあることが、遺物量の多さを生んでいる要因であると予想され、第17次調査地点の端部として同一の空間域に含まれると判断される。B類については、B④・I b類に集約される点が注目される。また、全体に類型数の多い傾向の中で、I類の数の少なさは際だつ。そこには居住域あるいは土器使用の作業空間の存在が明確な形で他と区分されていることが読みとれる。

以上の状況から、縄文時代後期では、遺構・遺物は広範囲に広がるのではなく、活動内容によってポイント的に集中するというシンプルで明確な空間利用形態の存在が指摘される。

弥生時代早期では、類型の減少と遺構・遺物の希薄化が特徴である。類型は、A類・C類・F類が姿を消し、明確な遺構としてはB類のみと言っても過言ではない状況を呈する。さらに、B類は細分化を示し、B②・III・IV類の出現と地点の増加が注目される。ここにも、遺構・遺物の減少化傾向が強く表出されている。こうした状況から浮かび上がる集落には、居住域や加熱活動域の姿はなく、貯蔵域のみが点在することとなる。貯蔵域は、従来型のもの（第3・15次調査地点）に加え、遺物をほとんど共伴しない数基の貯蔵穴が分散的に点在する（第5次調査他3地点）という新たな動きを見せる。その他にはE II類の出現があげられる。遺構は確認できないで遺物のみが出土する状況で、具体的な利用上の評価は困難であるが、注意しなければならない。

iii) 類型分布と空間利用の推移

各類型が遺跡内において、どのような位置に分布するかを平面的に確認し（図19・20）、集落内の空間利用状況から時期的な特徴を抽出した上で、時間的流れを見てみよう。

縄文時代後期前葉（図19）

居住域を表すA類・B類は遺跡の北東部に限定される（第3・15次調査、第17・22次調査、第6・9次調

表6 類型の相関関係

a. 縄文時代後期

	A(1)	A(2)	B(1)	B(2)	C(1)	C(2)	D	E	F
I	1地点 (17次)		3地点 (3/25次, 6/9次, 5次)					1地点 (22次)	
II					1地点 (2/26次)				
III		1地点 (3/5次)					1地点 (28次)	1地点 (21次)	1地点 (23次)
IV		2地点 (6/9次)			2地点 (11次, 7次)	3地点 (13次, 12次, 8次)	1地点 (14次)	O	

b. 物生時代早朝

	A(1)	A(2)	B(1)	B(2)	C(1)	C(2)	D	E	F
I			1地点 (5/15次)						
II								1地点 (2/8次)	
III				2地点 (5次, 23次)				1地点 (22次)	
IV				1地点 (26次)			1地点 (26次)	O	

査)。そして、北東部に位置する丘陵裾部には朝寝鼻貝塚が広がる³⁰(図19)。

同地域は標高3mを超える最も安定した広がりが確保される場所であり(図18)、さらに、水量の豊富な河道Aの北側に位置することから、比較的洪水等の被害も被り難い地域と判断される。そこには、居住域の選択基準を窺うことができる。

居住域(A類)を詳しく分析すると、中心をなすA

①I a類は第17次調査地点

というさらに狭い範囲に限定される。貯蔵域はA①I a類を中心としA②Ⅲ・Ⅳ類が周囲を取り巻く居住域内の河道部(第3・15次、第6・9次調査)に形成されている。貯蔵穴は群集し多数の遺物を伴うことから、日常的に管理され盛んに利用される重要な遺構であったことが予想される。貯蔵穴の機能を考える上でも、居住域との位置関係や貯蔵穴数の問題、遺物との関連性などは注目されるところである。集落内で、まとまった量の遺物が出土する地点は極めて限定的であり、A①類とB①類との結びつきが非常に強い傾向を示すことは前述したが、そうした状況から、遺物の利用あるいは廃棄が、それぞれの遺構と密接に関わった行為に伴って近辺で行われていたことは容易に想定できる。とすると、B①類の遺物は貯蔵穴の機能、つまり、堅果類の加工作業に伴った遺物である可能性は非常に高いと判断される。居住域周辺での管理、貯蔵域内での加工作業の実施が、本時期における貯蔵域にみる特徴である。

加熱活動域を示すC類の位置は、標高1.6~2.2mを測る。集落の北西部あるいは南西部に認められる。いずれも居住域よりはかなり低く、面積もさほど広くはない微高地が選地されている。火を有する①類は3地点で確認されているが、確実に前業とされるのは、集落端部に位置する第11次調査地点と第27次調査地点周辺である。この2地点では①類周辺に②類が認められており、少なくとも、北西部と南西側部の集落端部には、火を中心とし一定の広がりを有する加熱活動域の存在が想定される。ここで問題となる活動内容である³¹が、遺物の出土状態から貯蔵穴とは全く異なる行為であることは言えても、残念ながらそれ以上の決め手には乏しい。現状では集落域の端部に位置する傾向が一つの手がかりになるかもしれないが、今後の検討課題である。

D類に関しては点的な分布が認められる(第22次・28次・14次調査地点)。A類域に近い位置ほど遺物量が多くなる傾向があることや遺構の希薄性から考えて、同類型地点で出土する遺物は周辺からの流れ込みであり、利用頻度は極めて低い地点であると判断される。このように、居住域近辺においても積極的に遺構を構築するような利用がなされない空間が、集落内の隨所に点在する要因の一つには、安定しない地形があげられるかもしれない。

遺跡の南東域では、一定の面積が確保される調査が非常に少ない点は問題であるが、地形や確認調査に関する現状のデータからは全体に内容は希薄であった可能性が考えられる。

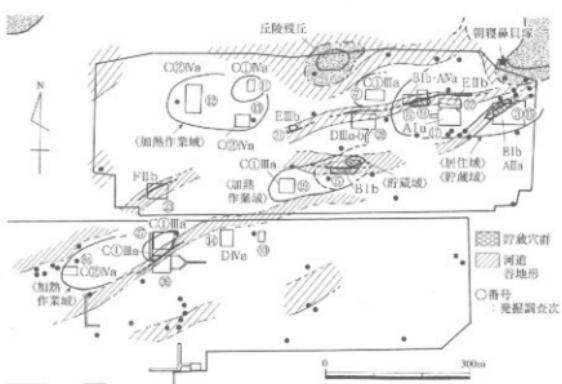


図19 各調査地点の類型化と空間利用1—縄文時代後期

縄文時代後期中葉（図19）

B①I b類が第5次調査地点に、C①Ⅲ a類が第19次調査地点に、C①Ⅳ a類が第7次調査地点に認められるが、前段階に比べると、同時期の遺構数は少なく分布範囲も狭い傾向が示される。ところで、C類とした第19次調査地点は第5次調査地点にごく近い位置にある。標高は同じく3mを測り、遺構数は他のC類と比較すると際だって数が多い。こうした状況は、第3・15次調査地点の状態に近いことから、河道部にあたる第5

次調査地点および第19次調査地点を含めた範囲には居住域の可能性を考えることもできよう。こうした点から、後期前段から中葉にかけて居住域の若干の移動は起きたかもしれないが、類型の相関関係にも変化はなく、基本的には同様の状態が継続していたと判断される。

弥生時代早期

空間利用を示すのは貯蔵域B類のみである。それ以外は姿を消しており、複数の類型によって構成される縄文時代後期とは大きな違いを示す（図20）。利用場所についても、縄文時代後期における中心的居住域（第17次調査）は利用されていないのに対して、前段階まではほとんど痕跡を残していない遺跡南部にあたる第26次・2次・8 b次調査地点では出土遺物が多い（Ⅱ類）ことも大きく異なっている。さらに、貯蔵域に関してても、従来の地点に加えて、遺跡の南よりに新たな分布域を見せる点が注目される。それらは、貯蔵穴数が少ない②類あるいは遺物を伴わないⅢ・Ⅳ類であり、縄文時代後期のB①I b類とは明らかな違いを示す。

このように、貯蔵域が点在するのみで、土地利用の中心がやや南に移動するという本時期の集落構造には、縄文時代後期とは大きな変化を見ることができる。

c. 各時期の特徴とその背景

前項で整理した類型分布あるいは推移を念頭に置いて、各時期の特徴をまとめたい。

縄文時代後期

集落の立地は、丘陵下端部から遺跡中央部を流れる河道の自然堤防状の高まりを中心とした範囲が選ばれ、集落は限定された居住域と周辺に広がる加熱活動域で構成される。居住域内には貯蔵域が取り込まれている。

居住域は、標高が高く面積が確保された安定的な微高地が選択され、2~3棟の竪穴住居と大形土坑、ピット群、溝などの遺構群に加え、大量の遺物を包含している。近辺には貝塚も形成される。貯蔵域は、その機能が保たれる地形や居住域との位置を考慮しつつ、効果的な利用を意識した河道あるいは谷部の選地が窺われる。炉を中心とした加熱活動域は、やや低くて面積はさほど広くない微高地が利用されており、集落の端に広がる傾向が認められるが、遺物は非常に希薄であり、加熱間違遺構以外の遺構はほとんど認められない場合が多い。

中葉段階には、遺構・遺物の出土量がやや少くなり、集落の中心は若干移動する。不明確な点もあるが、集

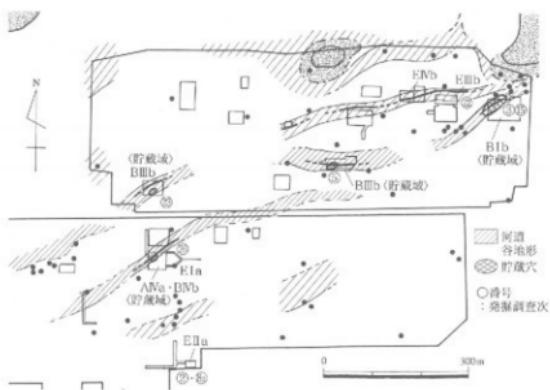


図20 各調査地点の類型化と空間利用2—弥生時代早期—

落構造などには変化を示さない可能性が高い。

弥生時代早期

縄文時代後期の集落とは構造面に大きな変化を見せる。最も特徴的な変化は、居住域・加熱活動域の消失である。貯蔵域に限っても、居住域と分離して分散的に置かれる点やその立地が、從来希薄であった南側に中心が移動し、遺物をほとんど伴わず数基で構成される点などにも新たな傾向が現れる。こうした居住域との分離は管理面での低下を考えさせる。さらに、遺物をほとんど共伴しない点からは、加工作業についても、後期に認められた集中的で定期的な加工作業の想定は困難であり、そこには堅果類に対する生業面での重要性の低下を感じざるを得ない。貯蔵穴や遺物出土土地点に窺われる集落の南側への移動は、活動域が平野部へ進出する傾向の現れと理解されるが、縄文時代に利用されていた微高地部には、なぜ遺構が残されていないのか。続く弥生時代前期では微高地には水田畦畔が形成される。こうした変化の中にその理由が求められるであろう。

(2) 周辺遺跡の状況

① 百間川沢田遺跡³⁰

岡山県南部の岡山平野に位置する。津島岡大遺跡とは旭川を挟んで対峙する位置に当たる。四元調査区において、縄文時代後期中葉の遺構・遺物がまとまって出土した。丘陵下端の微高地から斜面部に、貯蔵穴3基を含む土坑8基・炉7基・貝塚、そして多量の出土遺物が報告されている。土坑の形態や立地からその大半は貯蔵穴の可能性が高いと考えると、B①類の地点と評価される。また、多量の遺物と炉の存在あるいは貝塚などからは、A①類とも結びつくこととなり、居住域と貯蔵域との密接な位置関係が想定される。

弥生時代早期（報告書では縄文時代晚期後葉）では、同遺跡の高麗手調査区あるいは百間川原尾島遺跡において遺構・遺物が確認されている。遺構は土坑程度で貯蔵穴は検出されておらず全体に希薄である。いずれの地点も平野部にあたり、丘陵裾部の四元調査区とはやや異なる立地を認めることができる。

縄文時代後期集落の状況や弥生時代早期における貯蔵穴の減少や平野部への移動・出土土地点の増加などに、津島岡大遺跡と共にした動きを見ることができる。

② 久田原遺跡³¹

岡山県北部の山間部に位置する。山塊の裾部、谷口の比較的平坦な地形に立地する。山塊の反対側にあたる西側には、隣接して河川が流れる。遺跡は縄文時代後期中葉・晩期中葉・弥生時代早期（報告書では晩期後葉）の3段階の時期が確認されている。

縄文時代後期は機能が明らかな遺構が少ないため、晩期に注目しよう。晩期中葉では、堅穴住居3棟と河道内に袋状土坑（貯蔵穴）14基が確認されている。その他に晩期として焼成土坑5基、ピット多数、火廻が報告され、出土遺物も多い。類型化すると、A①I類・B①I類、そしてC①類で構成されることとなり、居住域・貯蔵域・加熱活動域を有する集落となる。弥生時代早期（晩期後葉）では、堅穴住居1棟とピット群が報告され、貯蔵穴は確認されていない。河道部は埋没し平坦化が進んでおり、地形や集落構造に変化が認められる。

このように、晩期中葉の集落構造や弥生時代早期（晩期後葉）での変化は、津島岡大遺跡などと共通する状況であることを指摘しておこう。

(3) 縄文時代後期以降の集落動向と生業

津島岡大遺跡に認められる縄文時代後期集落の動向は、岡山県南部あるいは北部地域の後・晩期集落においても確認することができる。縄文時代後期は遺跡の立地変化や遺跡数の増加などに、大きな変化が認められる時期

表7 低湿地型貯蔵穴一覧（岡山県）

遺跡名	所在地	後期前葉	後期中葉	晩期中葉	弥生早期
津島岡大遺跡	岡山市（県南部）	40基（2地点）	7基（1地点）	15基+a（4地点）	
吉川門沢田遺跡	岡山市（県南部）		3基（他の土坑4基）		
南方前池遺跡	山陽町（県南端）			8基	
吉生小学校裏山遺跡	倉敷市（県南部）			12基	
舟津原遺跡	倉敷市（県南部）			3基	
久田原遺跡	奥津町（県北部）			14基	
宮の前遺跡	赤穂町（県北部）			41基	

である。同時期に平野部や扇状地を中心に展開する集落には、津島岡大遺跡に代表されるような、貯蔵城を形成し明確な空間利用形態を示す場合があり（表7）、新たな集落構造が生まれ出していく様子を窺うことができる。こうした動向の背景の一つに生業の問題があることは、前期・中期における海産資源への傾斜が、後期以降、植物資源へと転換していく様子の一端を示す貯蔵穴の急増などからも読み取ることができる¹⁶。岡山県下では、貯蔵穴B①類を示す遺跡は、縄文時代後期前葉に始まり、その多くが晩期中葉に属する。こうして成立する生業形態は、石器組成など様々な点から堅果類の他、狩猟・漁労・農耕などがバランスのとれた形で構成することが予想される。

しかし、その貯蔵穴群も、最終段階まで残る津島岡大遺跡においても、水田遺構の形成時期前にはB②類として生業内での比重を低下させ、弥生時代前期¹⁷にはほとんど姿を消していく。その弥生時代早期段階には、生業面で貯蔵穴への傾斜が影を潜めるなかで、集落構造にも大きな変化が認められる。津島岡大遺跡では次の段階には水田畠畔が広範囲に覆うことを考慮すると、弥生時代早期段階に、生業の転換が起きていた可能性を指摘しておきたい。

註（1）津島岡大遺跡に関する文献は付表4・5にあげている。以下に述べる各調査地点の内容は、各報告書および年報・紀要を参考している。

（2）富樫孝志1995『縄文時代後期～晩期における津島岡大遺跡の構造』『津島岡大遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（3）忽那敬三2004『右器組成からみた縄文時代後期集落の空疎利用』『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（4）高田浩司2003『津島岡大遺跡における縄文時代後期の炉』『津島岡大遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（5）宮内直人1998『胡麻算貝塚発掘調査報告』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告2

（6）平井勝1993『古閑川沢遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 岡山県古代吉備文化財センター

（7）弘田和司2001『久田原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会

（8）註（1）（6）（7）

岡山県教育委員会1976『宮の前遺跡』中國総務省動植物保護に伴う発掘調査7』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告02

下澤公明1988『本州四国連絡橋海上ルート建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71 岡山県教育委員会

中原雅美1993『吉生小学校裏山遺跡』『山築白堊草道建設に伴う発掘調査5』高山系埋蔵文化財発掘調査報告81 岡山県教育委員会

近藤義郎1995『南方前池遺跡』岡山県山陽町教育委員会

（9）第19水溝において、弥生時代前期に屬する貯蔵穴が報告されている。

岩崎志保無2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第2章 鹿田遺跡の調査研究

本年度は2件の発掘調査と12件の立会調査を行った(図33・表8)。発掘調査は、医学部附属病院病棟建設に伴う第14次調査と医学部総合教育研究棟建設(2002年度第13次調査実施地点)にあたっての外構工事に伴う第15次調査である。病棟建設に関連した調査は、1998年(平成10年)度以降、第9~12次調査として進めており、今回も5回目となる。立会調査は、こうした両棟建設に関しての周辺整備工事が主体を占めている。(山本)

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第14次調査(医学部附属病院病棟2期、鹿田CD~CK12区、CD~CL13区、CD~CM14~20区)

a. 調査の成果

本調査では附属病院病棟新設予定地の1330m²余を調査した。その結果、弥生時代後期以降、近世に至るまでの各時期において、耕作地あるいは集落に関連する遺構・遺物を検出した。これまでの周辺調査地点での成果も併せて、鹿田遺跡の南部における時期別の概観を以下に述べる。

近世には、この一帯は耕作地として利用されたものと考えられる。主要な水路となる東西方向の溝を中心に、規格的な用水路が東西・南北につくられ、その一方でため池状遺構のような特異な遺構が営まれている。

鎌倉時代末から室町時代には、大型の溝で区画された屋敷地の存在が窺える。第9・11次調査の成果もあわせると、およそ35~70m毎に南北方向の溝がつくられ、東西方向の溝と併せて、大溝で区画された中に井戸・柱穴等が確認される状況である。その区画内でも、大まかには北側に建物、南側に耕作地といった土地利用形態に違いが認められる。

平安時代末から鎌倉時代にかけても、井戸の存在などから調査区の北西部に集落が存在することは確実である。古墳時代以前になると、遺構・遺物とともに希薄な様相を示すようになり、この点は隣接する第9・11次調査地点とも共通する。溝・柱群等の状況から弥生時代後期~古墳時代には本調査地点付近は主に耕作地として利用されていたことが窺え、同時期の集落は既調査地点の状況からは現在の外來診療棟付近に求めることができる。

調査期間：2003(平成15)年7月31日~12月17日

調査面積：1331m²

調査担当：岩崎志保(主任)、高田浩司、横山美香、野崎貴博

主な遺構・遺物：近世～近代の吐跡・溝4条・土坑10基・ため池状遺構1・陶磁器・瓦・漆椀・平安時代後半～室町時代の井戸10基・土坑5基・柱穴群・溝・土師質土器・白磁・青磁・木簡・櫛・弥生時代後期～古墳時代の吐跡・溝・土器集中箇所4箇所

b. 調査の経過

2003年7月17日より造成土取りを開始し、同7月31日より発掘調査を開始した。調査では近世から弥生時代までの遺構を確認し、12月17日に発掘調査を終了した。また10月18日には現地説明会を開催し、同日より10月24日

までの一週間、病棟内的一部を使用してパネル展示会を実施した。現地説明会当日には約200名、パネル展示会期間を合計すると約370名の見学者を得た。

c. 調査の概要

① 調査地点の位置 (図21)

本調査地点は、附属病院南病棟の東隣接地であり、調査以前は駐車場として利用されていた。

② 層序 (図22)

- 1層：造成上である。現地表面の標高は2.5~2.7mである。
- 2層：灰色砂質土で近代の耕作土である。3区では堆積が認められず、部分的に削平されている。上面の標高1.3~1.5mである。
- 3層：淡灰色～灰白色砂質土であり、上下2層に細分できるところもある。近世の耕作土と考えられる。調査区北側では堆積が見られない。上面の標高は1.3~1.5mである。
- 4層：淡灰褐色～緑灰色の砂質土である。中世の包含層である。上面の標高1.2~1.4mである。上下2層に細分できるところもあり、それぞれが遺構面である。上層の4a層は削平を受けているため、調査区の大半では残っておらず、部分的に確認されるのみである。4b層はほぼ全域に堆積しており、上面で戸井・溝等の中世の遺構を多数確認した。
- 5層：暗緑灰色～灰褐色粘質土で、中世の包含層である。調査区北側では2層に細分できる。上面標高1.05~1.15mである。5層でも中世の遺構を確認した。また3区では6層上面に洪沢砂と考えられる黄褐色砂質土(5*層)が部分的に認められる。
- 6層：灰褐色～茶褐色の粘質土である。上面では中世のピット等を確認しているが、6層自体は古墳時代の包含層と考えられる。上面の標高0.9~1.05mである。
- 7層：黄褐色砂質土である。弥生時代後期～古墳時代の包含層である。上面の標高は0.7~0.9mである。部分的には2層に細分できるところがあり、上層の7a層は比較的砂質が強く、下層の7b層は粘質が強く、耕作土の可能性を考えられる。

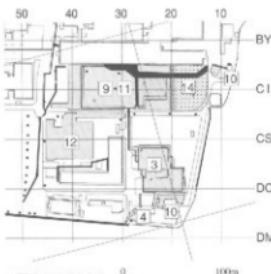


図21 第14次調査地点位置
(縮尺1/5000)

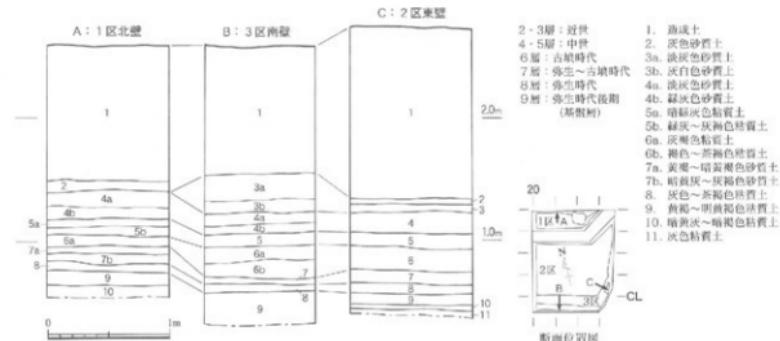


図22 土層断面柱状図 (縮尺1/40)

8層：灰色～茶褐色粘質土で、弥生時代後期相当の耕作土と考えられる。上面の標高0.6～0.8mである。8層上面では、畔とされる高まりや溝数条を確認している。

9層：黄褐色～明黄褐色粘質土である。基盤層であり、上面で弥生時代後期の土器片を含む上器集中遺構を確認しているほか、隣接する第11次調査地点からつながる弥生時代の大畔とされる高まりを確認している。上面の標高は0.55～0.75mである。

10層：暗灰色～暗褐色粘質土で、無遺物層である。

11層：灰色粘質土であり、下層に行くにつれ灰色砂をラミナ状に含む部分がある。無遺物層である。

② 遺構・遺物の概要

〈近世〉(図23)

3層上面で、土坑11基・溝4条・ため池状遺構1を検出した。これらの近世遺構は、主に調査区の南側2・3区で確認した。北側の1区では削平によって中世遺構上面まで破壊が及んでいることもあるが、井戸・土坑等の深い遺構も近世段階のものは認められなかった。

土坑は3区西端と2区東側に偏在して構築されている。土坑1～4・6の5基は、3区の西端に切り合ひ関係を持って集中的につくられている。そのうち数基には木枠の痕跡がみられ、野獣としての機能が窺われる。第12次調査地点B・C地点においても近世の土坑が20基確認されているが、これらのうち1基は墓、他はゴミ穴と推定され¹⁰、本調査地点とは様相を異にしている。

3区では近世の東西方向の畔1条を検出している。この畔は近世～近代にかけて継続して營まれたものと考えている。CL～CMライン間には中世～現代まで掘り返しを繰り返しながら利用された東西方向の溝があり、この溝より南側には、畔や野獣等の存在から水田城が広がっていたことが窺える。

この東西溝の北側では、溝にとりつく形で、ため池状遺構(D13)を検出した。ため池状遺構は東西14m、南北7m、深さ1.6mの隅丸方形で、西側には幅2m、深さ1.4mの溝がとりつき、第11次調査地点内で終わっている。また南西角と南東角の2カ所から、幅1.5m、深さ0.8mの溝が検出され、南を流れる東西溝にとりついている。ため池状遺構の中からは陶器片・瓦片のほか、塗りぬき・キセルなどが出土している。こうした状況から水を調整する機能を持つ水ためであったことが予想されるが、具体的な機能・用途については現在のところ不明である。

〈中世〉(図23)

4層～6層上面で、井戸10基・土坑3基・溝25条・ピット多数を確認した。柱穴群や井戸・土坑は調査区の北西部を中心に検出された。これらの遺構は南北方向の大きな溝(幅4～5m、深さ1.5m)や、東西方向のやや浅い溝(幅1～2m、深さ0.3m)によって区画されており、星敷地を構成しているものと考えられる。

井戸は調査区北西部を中心に検出した。いずれも木枠等は認められなかった。井戸は平安時代後半につくられたものが最も古く、以後、室町時代にかけて次々に構築されたものと考えているが、詳細な時期については検討が必要である。井戸からの出土遺物のあり方は様々であり、調査区西端部で検出された井戸1からは土師質の椀・杯・皿のほか、瓦器碗や白磁碗など豊富な遺物が出土した。これらは多くの炭や焼土とともに出土している。井戸1の所属時期は平安時代後半～末頃と考えられる。ほぼ近接した時期と考えている1区で検出した井戸(土坑18)からは、土師質土器椀・瓦器椀と櫛・呪符木簡それぞれ1点が出土している(木簡については第3節参照)。そこはか2区で検出した井戸(土坑20)には、土師質鍋がすっぽりと入れられていた。

南北方向の溝3条(D5・6・15)からは櫛・鍋などの土師質土器の破片のはか、輸入陶磁器、瓦が出土した。これらの溝の時期は中世後半(室町時代)の範疇で考えている。南北方向の溝のうち、最も東に位置する溝15は幅2.5～3mで、南端部は東西溝の北側で収束し、東西溝との間には幅20cm程の浅い導水路がとりついていた。収束部では底にウマド頭骨を1点検出した。溝15底面より導水路部の底面は40cmほど浅く、近世のため

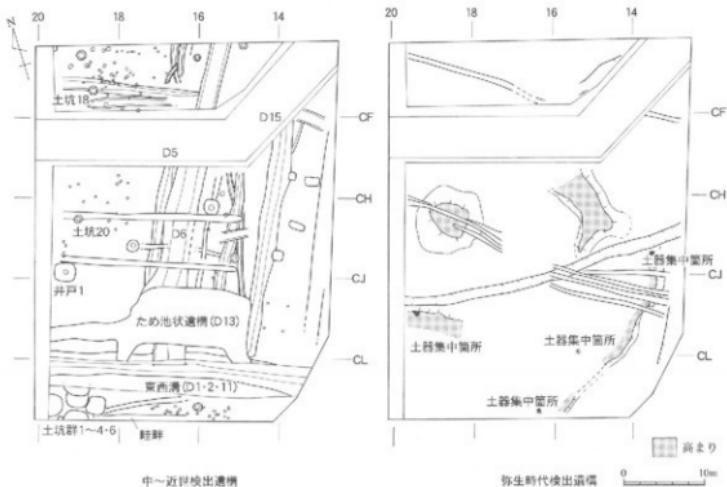


図23 検出遺構全体図 (縮尺1/600)

池状遺構と同様に、水を調整する機能があったことが窺われる。詳細な時期については今後の整理作業を経て慎重に検討していくが、南北方向の溝は、次第に東へと位置を変えている可能性があり、集落あるいは屋敷地が拡大している状況が推定される。

柱穴は調査区北西に偏在して確認された。1区西半に最も集中しており、2区の北西部と、3区中央部分にややまとまっている。建物を復元するには至らなかったが、1区南端寄りで東西方向、2区の北側で南北方向に並ぶラインを、それぞれ1条確認した。また2区南東部に、方形に並ぶ4基の柱穴を検出している。

〈弥生時代後期～古墳時代〉(図23)

7～9層上面で、弥生時代～古墳時代にかけての遺構を確認した。溝9条、土器集中箇所4箇所である。当該時期は、本調査地点周辺は耕作地として利用されたことが窺える。

7層上面では2区で北西から南東に走行する小規模な溝を数条検出した。

8層上面では1区で北西～南東方向の溝を1条、また2区の南側で、南西から北東へ走行する溝1条を検出した。本溝は第11次調査地点で検出していた大畦畔に伴う溝に遡るものである。この溝の南側は基盤層である9層が高い部分にあたり、畦畔の可能性が考えられる。この高まりの部分で2箇所、土器集中箇所を確認した。特に掘り込みは設けず、複数個体分の土器片がひとかたまりに置かれている状況であった。同様の土器集中箇所は2・3区で他に2箇所確認している。第9次調査地点では畦畔の交差部分に同様の土器集中箇所を確認している。いずれも時期は弥生時代後期と考えられる。

9層上面では2区の北側部分で、高まり部分2箇所を確認した。同様の地形は第9次調査地点でも確認されており、機能としては水田耕作等の耕作活動による削平を受けずに取り残された部分と考えられる⁽²⁾。

7～9層検出中の遺物出土量はきわめて少なく、本調査地点の古墳時代以前については遺構・遺物ともに希薄な様相と言える。

以上、本報告の内容は暫定的であり、詳細な報告は今後の整理・検討を経て正式に行う。 (岩崎志保)

註 (1) 高川浩司2003「近世の櫛について」『岡山大学附属文化財調査研究センター紀要2001』岡山大学附属文化財調査研究センター
 (2) 古岡川原尾島遺跡等でみられる「島状高まり」に類するものと考えられる。

平井藤ほか1995「古岡川原尾島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 岡山県教育委員会

2. 鹿田遺跡第15次調査 (総合教育研究棟ポンプ槽・検水槽設置、鹿田B Q～B S45・46)⑥

a. 調査の成果

本調査地点は鹿田遺跡第13次調査地点（総合教育研究棟建設地）の南東隅に隣接する。今回の調査では、近世の土坑、中世の溝群と土坑、古墳時代初頭の井戸と溝を検出した。このうち、近世土坑、中世溝は第13次調査東半でも検出されており、東側に遺構が広がることを確認できた。古墳時代初頭の井戸では、上・中・下位の3群に分かれた遺物群を検出した。井戸での活動を考えるうえの良好な資料となろう。第13次調査で検出された大規模な土器だまりが連続して検出されることも予想されたが、本調査地点では確認されず、本調査区の北側に広がるか、収束するものと考えられる。

調査期間：2003（平成15）年10月16日～29日

調査面積：30.4m² 調査担当：野崎貴博

主な遺構・遺物：近世土坑1基、中世の溝5条・土坑1基、古墳時代初頭の井戸1基・溝1条、古墳時
 代初頭の土器・木器

b. 調査の経過

鹿田地区では、2002年度から総合教育研究棟の建設工事が行われており、建設に先立って2002年4～10月に第13次発掘調査を実施している^①。2003年度になり、建物周辺の外構工事が施工され、順次立会調査を行ってきたが、総合教育研究棟の南東に隣接する本地点において、雨水・実験排水を排出するためのポンプ槽・検水槽の建設計画が具体化するに至った。第13次調査では古墳時代の大規模な土器だまりをはじめ、井戸や溝などの遺構や、中世の集落跡が確認されており、これらの遺構が連続することも予想されたため、対象となる面積は小さいものの、本地点についても発掘調査を実施することとした。

調査の実施に先立ち、2003年10月14、15日の両日で造成土・支障配管等の不規則な堆積物を撤去した。発掘調査は10月16日から開始し、近世・中世・古墳時代の遺構を調査したうえで、10月29日に終了した。

c. 調査の概要

① 位置 (図24)

本調査区は鹿田地区のほぼ中央にあたり、総合教育研究棟（第13次調査地）の東南隅に接する。北に記念会館、東に臨床研究棟、北東に管理棟（第5次調査地点）、南西に基礎研究棟（第7次調査地点）が建つ。

② 層序 (図25)

本調査地点は、調査区の北側約1/5が攪乱によって尖われ、西側も第13次調査範囲に重複しており、残存状態は不良であった。そのため土層の観察

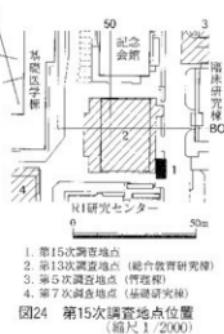


図24 第15次調査地点位置
 (縮尺 1/2000)

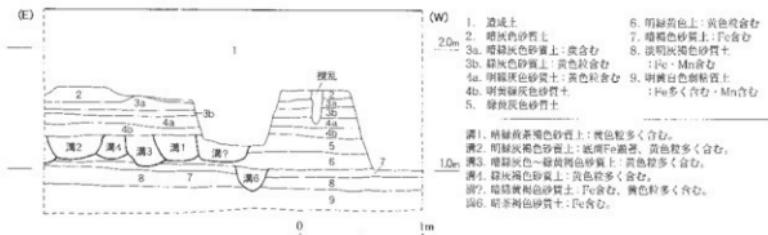


図25 調査区南壁土層断面 (縮尺1/40)

は調査区南壁・東壁で行っている。以下、各層の特徴を記しておく。

1層：大正時代以降の造成土で、現地表面から約1m下位まで堆積している。現地表の標高は約2.5mである。

2層：暗灰色砂質土で、近代の耕作土である。上面の標高は約1.6mである。

3層：緑灰色砂質土で、色調から上下に2分している。3a層は明緑灰色砂質土で炭・土器片を含む。3b層は緑灰色砂質土で黄色粒を含む。近世に掘る。3a層上面で土坑1基を検出した。上面の標高は約1.6mである。

4層：明緑灰色砂質土で、色調から上下2層に細分している。4a層は明緑灰色砂質土で、中世の包含層である。

5層：緑灰色砂質土で、中世の包含層である。調査区を南北方向に並行して走る溝群、東西方向に走る溝はこの層に帰属する。

6層：明緑黄色土で、黄色粒を含む。中世の包含層である。

7層：暗褐色砂質土で、鉄分を含む。この層の上面は古墳時代前期の面であり、井戸と溝を検出している。

8層：淡明灰褐色砂質土で、鉄分・マンガンを含む。遺物はほとんど出土していない。隣接する第13次調査地点の成果から、弥生時代後期の堆積層と考えられる。

9層：明黄白色弱粘土で、鉄分・マンガンを含む。遺物は出土していない。

③ 遺構・遺物

本調査区においては、近世・中世・古墳時代初頭の遺構面を確認した（図26）。

近世：3層上面で土坑1基を確認した。南北は掘削によって失われているが、北半の平面形は半円形を呈しており、円形の土坑が復元される。隣接する第13次調査地点の調査区東半では多数の近世土坑が検出されている。本調査地点でも近世土坑を検出したことにより、これらの土坑群の範囲がさらに東に広がることを確認できた。

中世：5層上面から掘削された南北方向、東西方向に走る溝群・土坑1基・ピット1基を確認した。また南壁で溝と思われる2ヶ所の落ち込みを確認したが、平面的に確認することはできなかった。

南北方向の溝（溝1～4）は並行して掘削されているが、いずれも切りあい関係を有しており、先行する溝が埋没した後、新たな溝を再掘削したものと思われる。東西方向の溝（溝5）は南北方向の溝群を切って掘削されており、今回検出した溝の中では最も新しい段階に掘削されたものである。土坑は、溝群の西で検出した。大半は掘削によって失われており、本来の規模は不明である。

古墳時代初頭：古墳時代初頭の遺構は、7層上面で井戸1基と溝1条（溝6）を検出した。

南北方向に走行する溝6の規模は、幅約30cm、深さ約15cmと小規模なものである。溝の走行方向を中世の溝群と比較すると、北東から南西に向かってやや斜行している。第13次調査地点で確認された弥生時代後期の溝も北東から南西に向かってやや斜行しており、地形の影響をうけている可能性もある。

井戸は調査区西側で検出した（図27）。井戸の西側は掘削により失われていたが、現状で南北約150cm、東西約130cmで、やや歪んだ長楕円形を呈している。井戸の断面形は、上方の約1/4は擂鉢状に大きく開き、屈曲

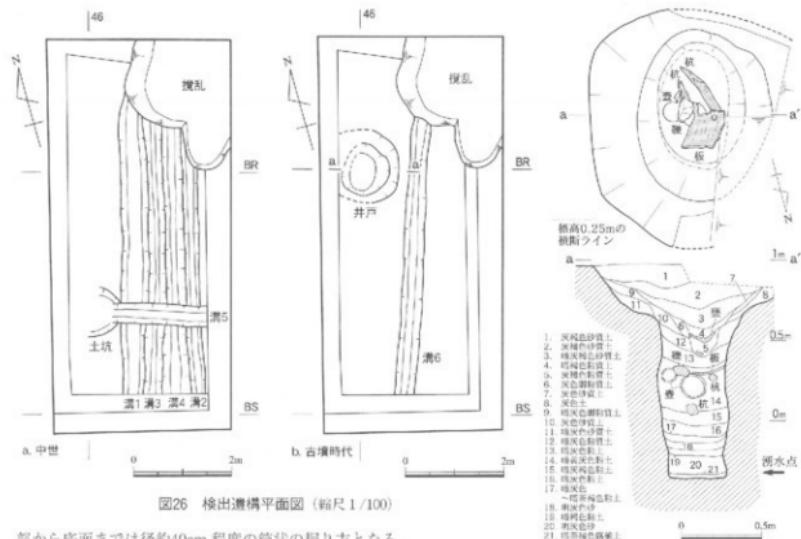


図26 検出構造平面図（縮尺 1/100）

図27 井戸 平・断面図
(縮尺 1/30)

部から底面までは径約40cm程度の筒状の掘り方となる。

埋土は1~3層が砂質土、4~5層は炭化物を多量に含み、ピット状に落ち込む粘質土層である。6~11層は大きく皿状に開く開口部を埋める砂質土

~粘質土層、12~17層は厚く堆積する粘土層、粗砂と植物遺体を多く含む粘土層が交互に堆積する18~21層に大別できる。

井戸の内部に認められた遺物群は、上位・中位・下位の3群に分かれる。上位の遺物群は井戸筒部の埋没後、径約30cm、深さ約20cmの規模で振り込まれたピットの内部(4、5層)で、壺がつぶれた状態で検出されたうえ、埋土には炭化物を多く含んでいる。中位の遺物群は、上位の遺物群から約10cmの無遺物層を挟んだ14層で検出された。ほぼ完形の壺2個体、杭2本、板材1枚が出土している。壺は直口壺、小形丸底壺が出土しているが、直口壺は井戸のほぼ中央に、小形丸底壺は東側に寄せて収められていた。2個の壺の上には、壺がのせられた状態で入れられている。2本の杭はいずれも横倒しの状態であった。この遺物群の最上位には板材が置かれている。下位の遺物群は、20層の最下部から出土した。土器の量は少なく、小形の台付鉢1点、壺の破片数点が出土したのみである。小形の台付鉢は逆さに伏せた状態で出土した。

これらの遺物の出土状況と堆積の状況をあわせて考えると、下位の遺物群は湧水点より下位にあたり、井戸の使用段階における行為を示すと考えられる。中位の遺物群は湧水点より約50cm程度堆積が進んだ段階であり、井戸廃絶後、埋没途中の段階における行為を示す。また、上位の遺物群は埴鉢状に開く開口部付近まで筒部が埋没した後、ピット状の振り込みを掘削し、その振り込みの中で壺を用いて煮炊きを行っていると考えられる。

以上のように、この井戸では使用から廃棄までの間に、土器を用いた行為が3回行われていたことが判明した。井戸における土器を用いた行為を考えるうえで重要な事例といえよう。

④ 第13次調査地点との関係

隣接する第13次調査の東半部では、中世段階の遺構として、北側・南側に東西方向の溝、本調査地点と接する

東側に南北方向の溝が掘削されている。これらの溝は区画された内側では、多数のビット群、建物や井戸が確認されているが、建物の主軸と溝の方向はほぼ合致しており、溝で囲まれた屋敷地と考えられる空間が形成されていることがわかる。本調査区で確認した溝は、第13次調査地点東辺を南北に走行する溝と並行しており、一連の区画溝と考えられる。

次に、弥生～古墳時代の造構についてみておきたい。第13次調査地点の地形は、南北が比較的高く、中央には東西に窪地が通るが、調査区中央からは南東に折れて本調査地点に至るように延びる。今回の調査区は狹小な範囲であったため、明確な落ち込みは確認できなかつたが、調査区全体が窪地の中に含まれる可能性もある。

さて、第13次調査地点で確認された東側の土器だまりは窪地の中に形成されており、今回の調査区にも延びる可能性があつたが、北半が擾乱を受けていたためか、検出されなかつた。しかしこれ以上南に延びる可能性はなく、東に伸展するか、あるいは収束するかのいずれかであると推定される。

今回の調査地点で検出した井戸は、この土器だまりの南に隣接して位置する。ところで、第13次調査地点でも、B O46付近では土器だまりの東に方形の井戸が確認されている。この井戸の底には完形の甕が2個体入っていた。第13・15次調査地点で確認したこれらの井戸はともに、①土器だまりに近接して井戸が掘削されること、②いずれも土器を用いた行為が確認されること、という共通点があり、井戸と土器だまりとの関係が注目される。

なお、本調査の成果は現在整理途上にあるため、本報告の内容は現時点での理解を示す暫定的なものであり、今後、修正・変更の可能性があるものであることを断っておきたい。(野崎)

註：(1) 光本昭2003「庵田遺跡第13次調査」[岡山大学埋蔵文化財溝査研究センター編]要2002 pp.26-29 岡山大学埋蔵文化財調査研究センタ-

第2節 立会調査の概要

庵田地区では前節で報告した第14次調査・第15次調査以外に、小規模工事に伴う立会調査を12件実施している。このうち、包含層が確認されたものは9件である。ここでは、造構が確認されたもの、地形復元に有用なデータが得られたもののうち、総合教育研究棟新営屋外排水敷設工事に伴う調査（表8、調査番号5）、総合教育研究棟外構工事（雨水・污水・実験排水路敷設）に伴う調査（表8、調査番号9）について報告する。

1. 総合教育研究棟新営屋外排水敷設工事に伴う調査 (庵田BS~BZ45区、CA~C046区、C045区)

a. 調査の経過

本調査地点は、庵田地区のほぼ中央、総合教育研究棟からエネルギーセンター西側の駐車場入り口までを南北に接続するもので、管路長約90mをはかる。周辺には、北西に第13次調査地点（総合教育研究棟）、東に第9・11次調査地点（病棟）、南東に第12次調査地点（エネルギーセンター）がある。調査は2003年8月21日から9月12日までの期間で、工事の進行にあわせて臨時実施した。

b. 調査の概要

1層は造成土である。2層は近代の暗灰色粘土、3層は近世の明緑灰色粘土である。樹4-5間に近世上坑を確認した。4層は明灰茶褐色砂質土で、中世の包含層であり、最も南端の樹1では柱穴と考えられるビット数基を確認した。5層は茶褐色砂質土で古代、6層は灰茶褐色砂質土で弥生時代後期～古墳時代の包含層と考えられ

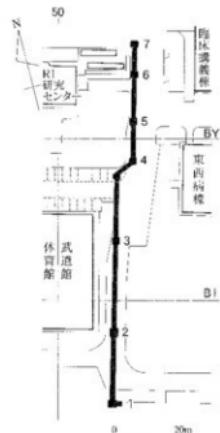
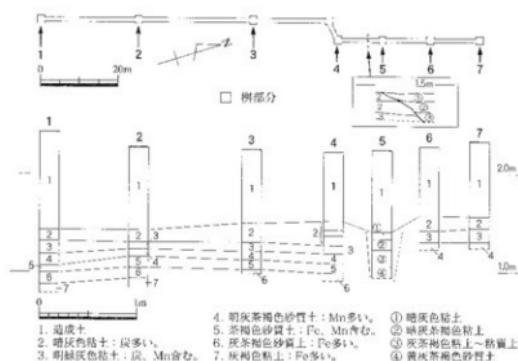


図28 調査位置 (縮尺 1/1500)



る。7層は灰褐色粘土上で、弥生時代中期の包含層の可能性がある。また、樹4～6間で確認した①～④層では、粒子が細かく粘性の強い湿地性の堆積物と考えられる粘質土層が確認された。

土層観察から、同地域は、樹1～4間では大きな地形の起伏は認められず、おおむね平坦な地形であるといえる。樹4～5間で2層から切り込むかたちで粘性の強い粘土層が堆積しており、この部分には谷状の落ちがあったものと推定される。ただし、樹6ではこの堆積が認められず、谷状の落ちは樹4～6間の幅で収まると考えられる。

c.まとめ

今回調査した汚水管が南端部で接続する汚水配管は1999年度に立会調査を実施した調査46の区間⁽¹⁾にあたる。鹿田地区の南半部を南北に約170mにわたって掘削したことになる。その成果もあわせると、鹿田地区では南辺付近に中世段階の幅広の溝が多数掘削される。それ以北では、第9・11次調査地点で検出した溝が通る部分もあるが、今回の調査の樹5付近で確認した谷状の落ち込みまで、中世以降は比較的安定した微高地が広がることが予想される。
(野崎)

註 (1) 横川美香2000「鹿田地区」『岡山大学構内遺跡調査研究年報17』 pp.23・25 岡山大学理歴文化財調査研究センター

2. 総合教育研究棟外構工事に伴う調査 (鹿田B L～B S45～53)

a. 調査の経過

本調査は2002年度に発掘調査を実施した鹿田遺跡第13次調査地点の周辺に埋設される雨水・汚水・実験排水設備敷設に伴う立会調査である。本調査地点の周辺には、北東に第5次調査地点(管理棟)、南西に第7次調査地点(基礎研究棟)がある。また、第13次調査地点では近世・中世・古墳・弥生の各時期で造構が密に検出されており、今回の工事においても掘削深度の大きい部分では造構にかかることが予想された。調査は2003年10月8日から11月19日までの期間で、工事の進行にあわせて随時実施した。

b. 調査の概要

1層は近代以降の造成土である。2層は明灰褐色粘土で近代の堆積である。3層は暗灰色粘土で近世の堆積である。4層は暗緑灰色粘土質、5層は暗緑灰褐色砂質土で、中世の堆積層である。6層は灰黄褐色砂質土で、古墳時代初頭の遺構が上面から掘削されている。7層は灰黄褐色砂質土で、弥生時代後期の包含層である。8層は南辺で確認された淡青灰色粘土質、9層は明黄褐色砂質土でいずれも弥生時代後期以前の堆積層と考えられる。

遺構は第13次調査範囲の東側管路（断面6）で密に検出された。検出された遺構は5層、6・7層上面から掘削されている。5層では井戸、土坑を確認した。土坑からは擂鉢、椀等の中世の遺物が出土しており、5層から掘削される遺構は中世に属すると考えられる。6・7層では溝、ピットを確認した。溝からは高杯等が出土しており、6・7層の遺構は弥生～古墳時代前期に属すると考えられる。

c. まとめ

本調査区は第13次調査範囲を取り囲むように設定された排水路であるが、北辺・西辺では掘削深度が小さく、遺構の広がりを確認し得なかった。東辺・南辺では周辺へ遺構が広がることを確認できたが、第13次調査地点で確認された3ヶ所の大規模な土器だまりの延びについては明確にはできなかった。

(野崎)

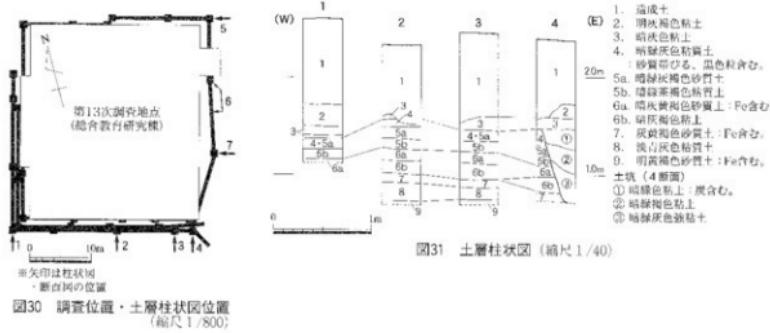


図30 調査位置・土層柱状図位置
(縮尺 1/800)

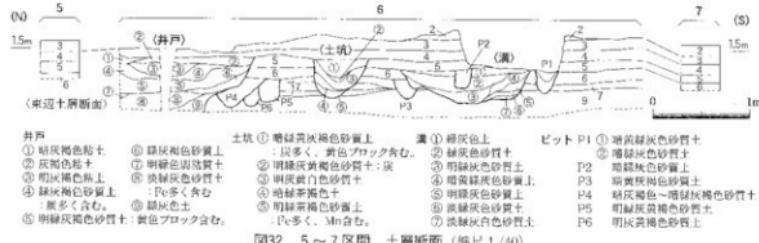


図32 5～7区間 土層断面図 (縮尺 1/40)

表8 2003年度鹿田地区調査一覧

番号	標題	内実地図	所属	調査名	調査期間	調査深度(G.m)	調査名
1	路側	CD-CM12~20	監視	沿岸踏道2列工事	7.31~12.17	1.7	調査面積1332m ² 、奥行き古墳時代の柱配・透、季世の遺跡・石碑・漢文、近世の水戸口・石垣・築堤、近世のため池・土堤・築堤跡等(古水戸口)
2	発掘	BQ-BS45~56	監視	沿岸踏道2列工事	10.16~29	1.9	調査面積30.7m ² 、半世紀前、古墳初期井戸・漢文遺跡等(古水戸口)
3	立会	CM-CM1, C727	監視	足場の基礎構造工事(引柱・軒柱・背板)、洗浄渠設置工事、地下水貯留槽(井戸)設置	7.14~23	0.8	外村歩道地点にて近世祭りまで深部、その他の底層
4	立会	BS5-BL43~45	監	沿岸踏道研究施設新設機械設備工事(ダム・丸太橋)	8.21~22	0.85	近世礎跡
5	立会	BS-BG4	監	沿岸踏道研究施設新宮寺の跡工事(引柱等)	8.22~9.12	1.7	後世寺業?監査等で発掘、近世二級・中世二級、トモ殿壁等、洗浄渠等
6	立会	BS4~45	監	沿岸踏道研究施設新宮寺跡工事	8.6~17	1.0	CL=0.06mで近世礎跡等
7	立会	AK65	監	沿岸踏道外引排水工事	0.2	2.0	造成工事
8	立会	BQ-BS65	監	沿岸踏道研究施設新宮寺跡工事(監点・酒大師等設置)	10.6	0.8	近世礎跡
9	立会	BL~BS45~53	監	沿岸踏道研究施設外引排水工事(雨水・污水・地下水)、史跡踏破等	10.8~11.19	0.8~1.75	近世中層含むまで露出した便用あり、古戸子手代、中世井戸、五代土器等を確認
10	立会	BR-BS20~51	監	沿岸踏道研究施設新宮寺跡工事	11.11~13	0.85~1.35	多くは透波、一部で中世壁面等
11	立会	BS47~53	*	沿岸踏道研究施設外引排水工事(雨水管)	11.17~18, 12.2	0.65~0.9	多くは透波工内、一部で近代壁面等
12	立会	BK-BR46	監	沿岸踏道研究施設外引排水工事(雨水の設置)	11.19	0.6~0.8	近世工内・先端工内
13	立会	BR20, BL44	監	沿岸踏道研究施設外引排水工事(引柱)	11.2	1.4	中世層まで掘削
14	立会	AS-AY65~68	監	沿岸踏道研究施設新宮寺跡工事(透気等改修)二重(既設大型支柱改修工事)	04.1.16	0.5~0.9	既設工内

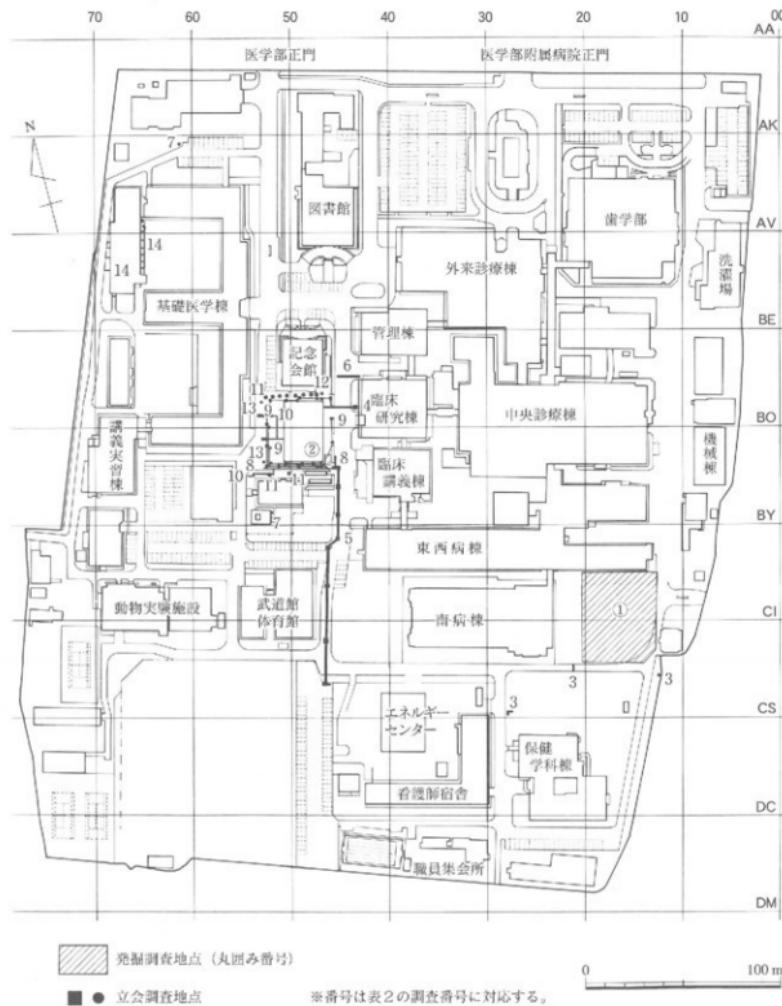


図33 2003年度の調査地点【2】—鹿田地区—(縮尺1/2500)

第3節 鹿田遺跡の研究

1. 鹿田遺跡第14次調査出土木簡について

岩崎 志保

a. はじめに

2003年度に実施した鹿田遺跡第14次調査では、中世の井戸より木簡1点が出土した。鹿田遺跡での木簡の出土は今回で4例目であり、貴重な事例が増加したことになる。調査の概要については「第1節」を参照されたい。本稿では今回出土した木簡の概要を紹介し、これまでの事例も加え、その意義について考えてみることとする。なお、遺構・遺物に関する詳細については、まだ整理途上であることを断っておきたい。

b. 第14次調査出土木簡

① 出土遺構

木簡が出土した遺構は、調査区の北側、鹿田地区構内座標ではC E 18区に位置する土坑（井戸）である。上面が径1m程のほぼ円形を呈する素堀りのもので、検出面からの深さは1.6mである。上面から深さ0.5mまではややすり鉢状に傾斜し、それより下位はほぼ垂直に近い傾斜である。

埋土は9層に分けられる。木簡は、使用中の流入土と考えられる9層（灰色粘土）の上に堆積する8層（灰色粘土）中より出土している。8層には有機物を多く包含している。木簡と一緒に出土した遺物には木製櫛1点・土師質碗1点・瓦器2点等があり、これらの遺物から推定される木遺構の年代は平安時代後半～末である。

② 木簡の形状と記文

出土した木簡は大きく3片に割れているが、接合する破片であり、最大長43.3cm、最大幅5.5cm、最大厚0.6cmである。上端は角を落として円みをついている。下端は欠損しているため、全長や、全体の形状は不明である。保存状況は比較的良好、上部1/4の墨書は肉眼でも判読が可能であった。中央部分はおそらく外気にさらされていた影響と考えられる面の荒れや、反りが認められる。この部分については赤外線カメラ撮影装置による撮影での判読を行った。

本資料は「呪符」木簡である。表面には上から「天國星」の文字が認められる。天國星は道教の神で北斗

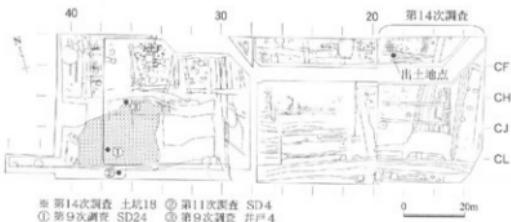


図34 鹿田遺跡第9・11・14次調査木簡出土地点 (縮尺1/1600)



図35 木簡出土状況



図36 鹿田遺跡出土木簡

七星の別名ということである。天岡星の効能には治病・消災・延命が主たるものとして挙げられる。続いて星座を示した罔柄と、「勝邪」とも見られる顔面、「星」と見られる字が描かれている。星座を示すと見られる罔柄は中央部より下位にも認められる。また下の破片には、ちょうど断裂部分に集中して文字が書かれている。四文字ずつ、少なくとも三段、おそらく四段にわたって書かれていることがわかる。最上列には「王王王王」、二段目「□田□□」三段目「木火金水」、四段目「□□□□」、その他にも墨痕は認められるものの、判読することはかなわなかった。「木火金水」とは陰陽五行説に関連する文言である。中国に起源する思想で、日本では古代において特に重んじられたものであり、古代人の生活に必要な五つの素材（木火土金水）を示している。木火金水の順となるのは「五行相生説」が基礎となるものである。

裏面にははっきり文字と認められるものはないが、下方に墨痕かと思われるものは見られる。

このような「天岡星」呪符木簡の出土例は、草戸千軒遺跡（13次S X落込み・27次S K 1825）・尾道市街地遺跡等、他にも数例が知られている（図37）。

c. その他の鹿田遺跡出土木簡

鹿田遺跡からは、以前にも木簡3点が出土している（図36）。これらのうち、③の詳細については既に報文があるため、ここでは①②の2点について述べることとする。

①は今回の出土木簡と近似した時期の、同じく「呪符木簡」である。一辺25cm程の方形を呈する池状遺構の底面から出土した。墨書きの内容については残存状況が悪く、赤外線カメラ撮影装置によってようやく判読できる程度であった。

②は墨書きがほとんど見えず、墨で書いた部分の木質がわずかに浮き上がりのことから判読できた内容である。かなり風化が進んでいることから、野外でさらされていたことが窺える。「**正四年**」の年号から推定される元号は「寛正四年（1463）」・「永正四年（1507）」・「天正四年（1576）」のいずれかである。内容は何らかの仏事に関するもので、菩提か逆修のため供養法要をおこなった記録であることが窺える。

d. まとめ

これまでに鹿田遺跡から出土した木簡は、大きく分けると呪符木簡と供養木簡とに大別できそうである。また時期的にみると呪符木簡は平安時代のもの、供養に関するものはそれよりも新しく室町時代以降のものと分けることも可能である。

呪符木簡は、全国的に見てもその多くが集落跡からの出土であり、鹿田遺跡の例も同様である。その使用目的としては①物忌み、②地鎮、③疫病除け、④厄除けの4つに大別される。このうち「大岡尾」符は疫病除けに使用されることが多いようである。また9次調査の呪符木簡については判読できる文言から、「急々如律令」という呪符が続いているものとみられ、物忌みに使用された可能性が高い。

このような中世におけるまじない・信仰の証左は、日本各地で見つかってきており、当時の生活の一端を示す貴重な資料である。鹿田遺跡が特異な場所であったのでは決してなく、たとえば近隣では、岡山市百間川米田遺跡や福山市草戸千軒町遺跡でも呪符木簡の出土が認められるように、中世の集落には普通に見られる習慣・風習であったといえる。その一方で、平安時代後期の星宿信仰は主として貴族の間に流行していたことや、祈祷にはそれなりの財力が必要といったことから、呪符木簡を出土する集落の性格や位置づけといった点も興味深いところである。

今回は資料紹介にとどまったが、今後遺構・遺物の詳細な検討を行っていく中で、鹿田の集落での空間的・時期的変遷を整理して、改めて木簡資料についても考えていくこととしたい。

鹿田遺跡の木簡記文に関しては、岡山大学文学部久野修義・今津勝紀先生より御教示を得た。なお、本簡資料については、暫定的な内容であり、今後の整理・検討を経た後に正式報告を行うこととする。

引用・参考文献

- 中山俊世・久野修義2000『岡山・鹿田遺跡』『木簡研究』第22号 pp.203-205 木簡研究会
- 喜田敏・岩橋志保2000『鹿田遺跡第9次調査・鹿田遺跡第11次調査』『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 広島県立歴史博物館1980『中世の民衆とまじない（春の企画展図録）』
- 荒井一郎1996『まじないの世界Ⅱ』『日本の美術』No.361

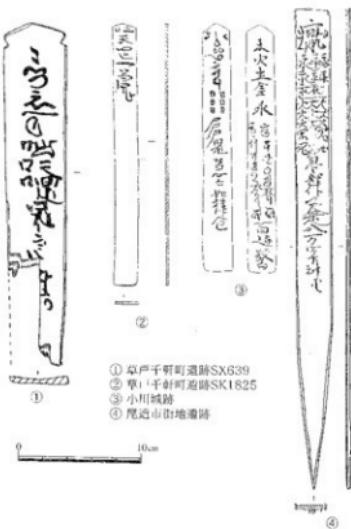


図37 木簡の類例（縮尺1/4）

第3章 その他地区の調査研究

第1節 東山地区の調査概要

2003年度は東山地区で1件の立会調査を実施した。調査1は附属教育実践総合センター環境整備工事に伴う外灯移設である(表9)。移設元・移設先の2カ所で、いずれも $0.8 \times 0.8\text{m}$ の範囲を GL-1mまで掘削し、近代層と思われる青灰色粘質土まで達した。

(岩崎)

表9 2003年度東山地区調査一覧

番号	種類 構内 位置	所属	調査 名 称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	備 考
1	立会	一 教育	教育学部附属教育実践総合センター環境整備工事	04.2.25	1.0	青灰色粘質土(近代?) まで掘削



図38 2003年度の調査地点【3】—東山地区—(縮尺1/3000)

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理・研究

1. 調査資料の整理

2003年度において調査資料の整理で中心となったのは、津島岡大遺跡第15次調査と第17・22次調査、そして第27次調査の資料である。いずれも、特に縄文時代後期の遺構・遺物が注目された調査地点である。

津島岡大遺跡第15次調査では、牛糞に関する遺構として貯蔵穴から水田への推移を、縄文時代後期から弥生時代前期に向けて捉えることができた。その中で河道部と微高地の土地利用状況や変化を分析できた点は大きな成果である。第27次調査では、縄文時代後期における微高地の利用状況を確認し、その中で、炉の存在に注目した分析を行った。

遺物面では、こうした4地点の調査からは縄文時代後期前半を中心とした遺物が豊富に出土しており、中期末～中津式、あるいは福田K2式などの土器編年を考える上で、貴重な資料を提供することとなった。

以上の分析・整理作業の結果を受けて、2003年度に刊行した発掘調査報告書は、「津島岡大遺跡13」と「津島岡大遺跡14」である。年度前半期に刊行した前者は、2001～2002年度に発掘調査を実施した津島岡大遺跡第27次調査の報告書であり、縄文時代後期の炉の形態と機能についての考察を行った。年度末に刊行した後者は、1995～1996年度に調査した津島岡大第15次調査の報告書であり、縄文時代の貯蔵穴と弥生時代の水田に注目した考察と出土土地別の石器組成から土地利用を考えた考察を掲載した。いずれも、縄文時代の集落遺跡をして、遺構・遺物とともに良好な資料を報告することができた。

自然科学的分析では、鉄滓類（津島岡大遺跡第10次調査・第19次調査出土）の成分分析と棒火矢（河遺跡第12次調査出土）に使用された火薬の成分分析を行った。鉄滓に関しては川鉄テクノリサーチ株式会社に依頼し、棒火矢の火薬に関しては、岡山大学理学部地球科学科松田敏彦助教授にご助力頂いた。その他に、津島岡大遺跡において弥生時代早期～前期の鍛錠となっている「黒色土」の形成原因を解明する試みとして、土壤分析を行い、岡山理科大学の白石純氏にご協力頂いた。それぞれの分析結果については、次項で報告している。（山本）

2. 調査資料の分析

(1) 津島岡大遺跡（第10次・第19次調査）出土鉄滓類の分析

津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター新営予定地）および第19次調査（コラボレーションセンター新営予定地）から出土していた鉄滓について、自然科学的分析を川鉄テクノリサーチ株式会社に依頼して実施した結果、「古墳時代後期においては、津島岡10次・19次調査地点周辺で、鍛冶等に関連する作業が行われた」という想定を補強するデータを得た。分析結果は、以下に報告する。なお、両調査に関する発掘調査報告書は、「津島岡大遺跡11」¹³⁾・「津島岡大遺跡12」¹⁴⁾として2002年度に発刊されている。

註（1）山本悦世・岩崎志保2003『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（2）野崎貴博2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

津島岡人遺跡から出土した製鉄関連遺物の自然科学的分析

川鉄テクノリサーチ株式会社

はじめに

調査の観点として、鉄滓の製鉄原料の推定、製鉄工程上の位置づけ、観察上の特記事項などを中心に調査した。その結果について報告する。

調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目

調査資料の記号、出土遺物・注記および調査項目を表10に示す。

(2) 調査方法

i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位以下で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

岩石磁力調査については、直徑30mmのリング状フェライト磁石を使用し、感応検査により「強・稍強・中・稍弱・弱」の5ランクで、個別調査結果を表示した。遺物内の残存金属の有無を金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。

ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- 全鉄 (T, Fe) : 二塩化チタン還元-二クロム酸カリウム滴定法。
- 金属性鉄 (M, Fe) : 奥素メタノール分解 EDTA滴定法。
- 酸化第一鉄 (FeO) : 二クロム酸カリウム滴定法。
- 酸化第二鉄 (Fe₂O₃) : 計算。
- 化合水 (C, W) : カーラルフィッシャー法。
- 炭素 (C) : 燃焼-赤外線吸収法。
- ライム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化マンガン (MnO)、酸化ナトリウム (Na₂O)、イオウ (S)、珪素 (Si)、マンガン (Mn)、リン (P)、銅 (Cu)、ニッケル (Ni)、クロム (Cr)、アルミニウム (Al)、バナジウム (V)、チタン (Ti) : ICP発光分光分析法。
- シリカ (SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化チタン (TiO₂)、酸化リン (P₂O₅)、酸化カリウム (K₂O) : ガラスビード蛍光X線分析法。
但し CaO、MgO、MnO は含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。
- カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、酸化ナトリウム (Na₂O) : 毒子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分(全鉄 T, Fe、金属性鉄 M, Fe、酸化第一鉄 FeO、酸化第二鉄 Fe₂O₃、シリカ SiO₂、アルミナ Al₂O₃、ライム CaO、マグネシア MgO、酸化ナトリウム Na₂O、酸化カリウム K₂O、酸化チタン TiO₂、酸化マンガン MnO、酸化リン P₂O₅、化合水 C, W、炭素 C、ヴァナジウム V、銅 Cu、コバルト Co)を化学分析している。

鉄器中成分の化学分析は、13成分(炭素 C、シリコン Si、マンガン Mn、リン P、イオウ S、銅 Cu、ニッケル Ni、コバルト Co、アルミニウム Al、ヴァナジウム V、チタン Ti、カルシウム Ca、マグネシウム Mg)を化学分析している。

iii) 顕微鏡組織写真

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。金属性鉄はナイタール(5%硝酸アルコール液)で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡(5倍~20倍)による観察もする。

iv) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射(回折)された特性X線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置 理学電気株式会社製 ロータフレックス (RU-300型)

測定条件

① 使用X線

Cu-K α (波長=1.54178Å)

②	KP 線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③	管電圧・管電流	55kV・250mA
④	スキャニング・スピード	4.0°/min
⑤	サンプリング・インターバル	0.020°
⑥	D.S. スリット	1°
⑦	R.S. スリット	0.15mm
⑧	S.S. スリット	1°
⑨	検出器	シンチレーション・カウンター

v) 胎土・耐火材遺物の耐火度試験および耐火度推定

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JIS R 2201（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）及びJIS R 8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定する。

造物資料を粉碎（180μmの網通過）し、規定（量的に少量であるから寸法は第2種の小型：幅7mm、高さ27mm）のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に設置し、毎分5°Cで加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を溶剤温度とする。

これまでの耐火度の測定結果と胎土の化学成分の分析結果を146資料について整理した。

耐火度y（ゼーゲルコーン溶剤温度、°C）と胎土の化学組成因子fxとの関係について、次を得ている。すなわち、 $y = 110.98 \cdot fx + 927.82$

ここで、 $fx = (25.8Al_2O_3 + 5.2SiO_2) / (146MgO + 448MnO + 78.6CaO + 12.5T.Fe + 10.4TiO_2)$

調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて42～44頁に示す。表10に調査資料と調査項目をまとめた。表中の○印が調査実施項目を示す。表11は鉄滓の化学成分分析結果、表12は胎土の化学成分分析結果と耐火度の計算値ならびに表13は鉄滓資料のX線回折結果、顕微鏡組織をそれぞれ示す。

化学成分分析、顕微鏡観察およびX線回析の結果等を考慮し、考察する。各資料について、タイトル・資料番号、資料種別（括弧内は推定された製造工程）、着磁力、MC（金属探知機判別）を一行で示す。そして、各資料の調査項目、すなわち、外観観察、顕微鏡組織観察、X線回折測定、化学成分分析およびSEM観察の調査結果をまとめ、考察する。各資料の最も確からしい推定結果を最後にまとめる。以下、資料番号順に述べる。

（資料No. 1）輪刷口、着磁力：無、MC：無

外観：外観写真を42頁図39に示す。総重量は81.6g、長さ68mm×幅55mm×厚さ22mm。先端に灰色の発泡した溶融渣が付着している羽口部で、還元部分から推定すると外径70mm、内径25mm程度か。着磁力は先端付着部でわずかに感応する。内側の胎土はやや濃い肌色で白色、褐色の砂礫が混入し砂（スサ）と思われる植物繊維痕も見える。灰色の土と表皮剥離の痕影響部を除いて試料採取する。

耐火度：胎土の耐火度yを化学成分因子fxから推定した計算結果を表12に示す。耐火度は1,420°C（fx=4.33）と得られ、図43にプロットした。耐火度の測定結果は1,405°Cと得られた。既往の値と比較して、本資料の耐火度は同じとして通常の温度である。

化学成分：胎土の化学成分分析の結果を表12に示す。シリカ（SiO₂）、アルミナ（Al₂O₃）を主成分（87.2%）とするムライト（Mullite: 3 Al₂O₃・2 SiO₂）系耐火材で、酸化鉄（2.8% Fe₂O₃）とアルカリ成分（K₂O+Na₂O=3.5%）を含んでいる。原料には、通常の木筋系粘土上に、シリカ成分の高い陶石系または長石系の胎土原料を配合し焼成したものと推察される。

したがって、本資料は、製錬用羽口の上質粘土材で、使用には十分耐えた胎土と推定される。

（資料No. 2）鉄滓（鍛冶滓（含鉄錆化物））、着磁力：強、MC：無

外観：外観写真を42頁に示す。総重量は19.5g、長さ29mm×幅26mm×厚さ20mm。全体が橙色の水酸化鉄と土の酸化鉄系に覆われた小型資料。錆化鉄系遺物か。錆化鉄を避けて切断し、試料採取する。錆化鉄塊が鉄滓か切ってみないわからないが、着磁力が強いため残存金属鉄の小片でも見つかるよいが。試料調査時に残存金属は見られなかった。

顕微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。No. 2-1、No. 2-2とも、写真全体に白く斑がかったように見える。オキシ水酸化鉄（安定なゲーサイト）が存在すると推察される。写真No. 2-1は、オキシ水酸化鉄で、本来は白色蘭玉状ウスタイトと金属鉄が共存していたと推察される。写真No. 2-1は、金属鉄と炉壁材が接した資料で、金属鉄は完全に錆化し、オキシ水酸化鉄（ゲーサイト）になっていると推察される。なお、着磁力が強で、MC反応が無の資料は、金属鉄が存在しないで、マグネット（Magnetite: Fe₃O₄）が存在することを示す。（参考：鉄さびの経年過程を参照）

X線回析：回析結果を表13に示す。マグネット、ゲーサイト、ウスタイトとヘマタイトが同定された。酸化鉄、水酸化鉄の鉱物である。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄（T. Fe）54.5%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト：

FeO) は16.6%、酸化第二鉄(ヘマタイト： Fe_2O_3) は59.2%で、 Fe_2O_3 と FeO の比率は、78:22で、シリカ(Silica : SiO_2) 12%では平衡状態図(参考：鉄錆の平衡状態図を参照)のマグнетイトとヘマタイトの境界領域に近く、金属鉄は完全に錆化していると推察される。また、化合物を4.7%含むことからも金属鉄が錆化し、オキシ水酸化鉄(ゲーサイト)を生成していると推察される。

津化(溶融ガラス化)成分の指標となる造渣成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$)は16%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン(Titanium dioxide : TiO_2)は0.2%と低く、バナジウム(Vanadium : V) 0.002%と低い。鉱石に含有する成分の一つである銅(Copper : Cu)は0.001%と少ない。酸化マンガン(MnO)含有量は、砂鉄系に含まれる値よりも、5~10倍高い。

本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの化学成分分析の結果(データ)を整理し、図40~42に示す。図40・41では鍛冶津で、 MnO/TiO_2 比と TiO_2/T 、 Fe 比の関係から鉱石系鉄錆を示している。金属組織から金属鉄は完全に錆化し、顯微鏡組織を消失しているが、鉱石系の精鍛鍊錆治津または鍛鍊鍊錆治津の金属鉄が含まれていた、と推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①鍛冶津(含鉄錆物)で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

(資料 No. 3) 鉄津(鉄鉱石系精鍛鍊錆治津)、着磁力：強、MC：無

外観：外觀写真を42頁に示す。総重量は19.5g、長さ56mm×幅47mm×厚さ29mm。3面に割欠面を有し、2片に割れたものを接着してある資料。表面からは黒色先兆粗粒な津の様相を呈する。表面には灰色の土が固着しているが、剥がれた部分からは微密な黒い鉄錆が確認できる。表皮の土は除去して試料採取する。

顯微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。写真No. 3-1の前面に白色蘭玉状・樹枝状のウスタイト(Wustite : FeO)と写真の背面にファイヤライト(Fayalite : 2FeO· SiO_2)が観察される。写真No. 3-2もウスタイトと多量のファイヤライトが観察される。

X線回析：回析結果を表13にまとめた。ウスタイト(Wustite : FeO)、マグネットイト(Magnetic : Fe_3O_4)が同定された。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。金鉄51.7%に対して、ウスタイトは49%、ヘマタイトは19.2%で、 Fe_2O_3 と FeO の比率は、28:72で、シリカ14%で、平衡状態図のウスタイトの領域にあり、還元反応が進行していたと推察される。酸化マンガン(MnO)含有量が、砂鉄系に含まれる値よりも、約10倍高い。

津化成分の指標となる造渣成分は29%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.17%で、バナジウム0.006%、銅0.001%と少ない。本資料の製造工程の位置づけとして、図40~42に、分類を示す。本資料は、図40・41において、砂鉄系が鉱石系か判断が難しいが、鍛冶津に近い。図42では、鉱石系製鍊津のグループに属している。したがって、製鍊の後期から精鍊の中期の工程で生成した鉄津で、金属鉄が生成する段階にあつたと推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①精鍛鍊錆治津で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

(資料 No. 4) 鉄津(炉壁付着津)、着磁力：弱、MC：無

外観：外觀写真を42頁に示す。総重量は364.9g、長さ128mm×幅62mm×厚さ60mm。全体が灰褐色と黒色のまだら模様で、斑状の大きな資料。ガラス質で一方に炉壁材と思われる変色部分があり、炉壁溶融部が炉壁付着津であろう。中央の黒灰色の瘤状になった部分から試料採取する。

顯微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。写真No. 4-1の前面に軟化溶融した胎土成分中に気泡が観察される。写真No. 4-2にはやや赤色を呈するガラス質津が観察される。したがって、炉壁材が軟化したガラス質津と推察される。

X線回析：回析結果を表13に示す。シリカ(Quartz : SiO_2)とクリストバライド(Cristobalite : SiO_2)のみが同定された。胎土成分がガラス化しているため、回析されない。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。金鉄3.8%に対して、ウスタイトは0.6%、ヘマタイトは4.4%で、 Fe_2O_3 と FeO の比率は、87:13で、シリカ73%で、平衡状態図のクリストバライドの領域にあり、胎土成分と推察される。

津化成分の指標となる造渣成分は93%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.6%で、バナジウム0.005%、銅0.001%と少ない。本資料の製造工程の位置づけとして、図40・41に、分類を示す。本資料は、図40・41において、炉壁付着津のグループに属している。

以上の結果を総合すると、本資料は、①炉壁付着津、と推定される。

(資料 No. 5) 鉄津(鉄鉱石系製鍊津)、着磁力：弱、MC：無

外観：外觀写真を42頁に示す。総重量は182.8g、長さ77mm×幅44mm×厚さ40mm。割欠面は2つ。ごろりとした繰状資料。薙ぬした凹内のある面には、灰茶色の土跡が凹部に詰まっている。平坦な一面には石英質の砂糖や長さ5mm、幅3mm程度の白い石灰質状のものもある。小魚の骨でもあろうか。試料採取は付着土砂や埋没砂糖を除去して行う。

顯微鏡組織：ミクロ組織写真を43頁に示す。写真No. 5-1の前面に僅かに白色蘭玉状・樹枝状のウスタイト

および写真的背面には多角形がやや変形したファイアライト観察される。写真 No. 5-2 にも大きなファイアライトが観察される。

X線回析：同析結果を表13に示す。ファイアライトとウスタイトが同定された。

化学成分：化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄43%に対して、ウスタイトは54%、ヘマタイトは2%で、 Fe_2O_3 とFeOの比率は、4:96で、シリカ28%で、平衡状態図のファイアライトの領域にあり、還元反応は僅かに進行していたと推察される。

津化成分の指標となる造渣成分は40%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.27%で、バナジウム0.002%、銅0.001%と少ない。酸化マンガン(MnO)含有量が、砂鉄系に含まれる値よりも、10~20倍高い。

本資料の製造工程の位置づけとして、図40~42に分類を示す。本資料は、図40・41において、鉱石系製鍊滓または砂鉄系鍛冶滓に属している。図42において、鉱石系製鍊滓に属している。顕微鏡組織では、ファイアライトが主成分であり、酸化マンガン含有量が高いので、鉱石系製鍊滓と推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①製鍊滓で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

(資料No. 6) 鍊滓(鉱石系製鍊滓)、着磁力: 税強、MC: 無

外観: 外観写真を42頁に示す。総重量は193.0g、長さ78mm×幅50mm×厚さ45mm。割欠面は2つ。全体に滑らかな凹凸があり、赤褐色の水酸化鉄が凹部に結まっている。下部には径8mm程度の白色鉢物が埋没している。裏は平らで細かな発泡痕がある。試料採取は付着土砂や粗面を除去して行う。

顕微鏡組織: ミクロ組織写真を43頁に示す。写真 No. 6-1 の全面にやや失った多角形のファイアライトと僅かにウスタイトが観察される。写真 No. 6-2 には、No. 6-1 の多角形が崩れた冠状のファイアライトが観察される。製鍊滓にみられる組織である。

X線回析: 回析結果を表13に示す。ファイアライト、ウスタイトとマグネットが同定された。

化学成分: 化学成分分析の結果を表11に示す。全鉄43%に対して、ウスタイトは51%、ヘマタイトは4%で、 Fe_2O_3 とFeOの比率は、8:92で、シリカ30%で、平衡状態図のファイアライトの領域にあり、還元反応は僅かに進行していたと推察される。

津化成分の指標となる造渣成分は42%で、砂鉄原料に含まれていたと考えられる二酸化チタン0.39%で、バナジウム0.006%、銅0.005%と少ない。酸化マンガン(MnO)含有量が、砂鉄系に含まれる値よりも、約10倍高い。

本資料の製造工程の位置づけとして、図40~42に分類を示す。本資料は、図40・41において、鉱石系製鍊滓または砂鉄系鍛冶滓に属している。図42において、鉱石系製鍊滓に属している。顕微鏡組織ではファイアライトが主成分であり、酸化マンガン含有量が高いので、鉱石系製鍊滓と推察される。

以上の結果を総合すると、本資料は、①製鍊滓で、②鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

まとめ

各資料の調査結果および考察結果を以上に述べた。それらの結果を以下にまとめる。

調査資料は、織羽口片と鉄流から構成されている。

- (1) 資料 No. 1 の羽口片は、シリカ (SiO_2)、アルミナ (Al_2O_3) を主成分 (87.2%) とするムライト (Mullite: $3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$) 系耐火材で、やや上質耐火と推察される。耐火度は、測定では1,405°Cと計算では1,420°Cと得られ、通常製鐵用羽口材として使用には十分耐えた羽口耐火と推察される。
- (2) 資料 No. 2 は、金属鉄が完全に転化したオキシ水酸化鉄(熟化鉄)と鍛冶滓が共存している。鉄源は、酸化マンガン含有量が高いので、鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。
- (3) 資料 No. 3 は、精錬鍛冶滓で、鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。
- (4) 資料 No. 4 は、造渣成分が93%で、炉壁付着滓、と推定される。
- (5) 資料 No. 5 と資料 No. 6 は、製鍊滓で、酸化マンガン含有量が高いので、鉄源には鉄鉱石を使用した可能性が高い、と推定される。

【付記】試料 NO. 4 の弥生時代後期の「炉壁付着滓」については、溝からの出土という点と時期的な問題を鑑みて、慎重に検討することとしたい。

(岩崎)

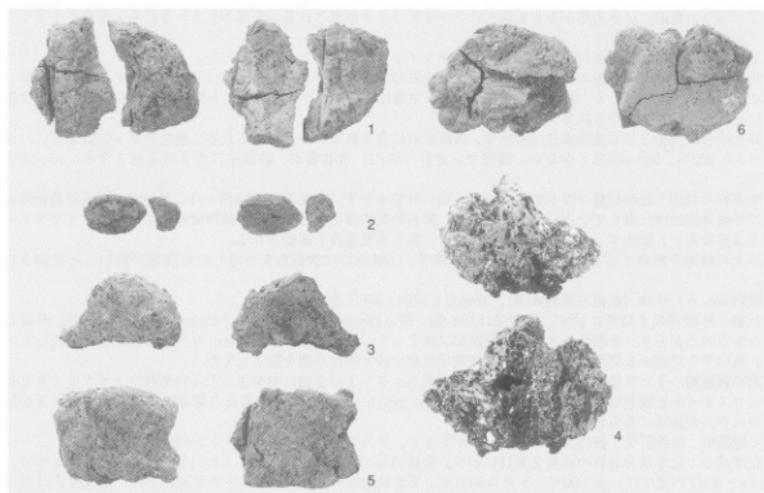


図39 出土鉄滓外観写真（番号は資料番号と一致する）

• 製鉄工程上の鉄滓の分類

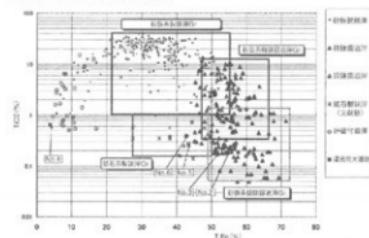


図40 出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタンの分布図

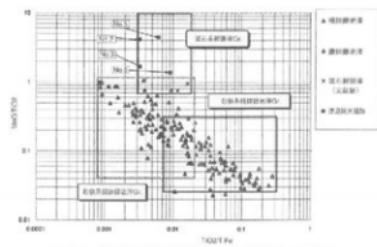


図42 砂鉄系銀冶炉と錫石系製錬滓の分類

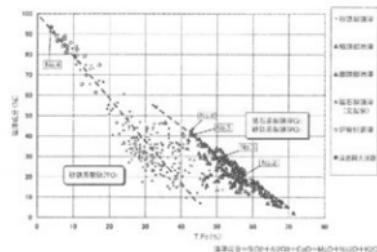


図41 製錬滓と銀冶炉の分類

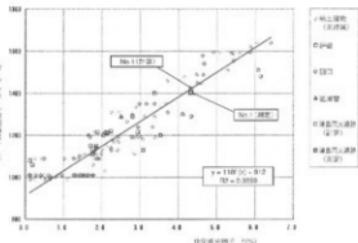


図43 粘土遺物の化学成分と耐火度との関係

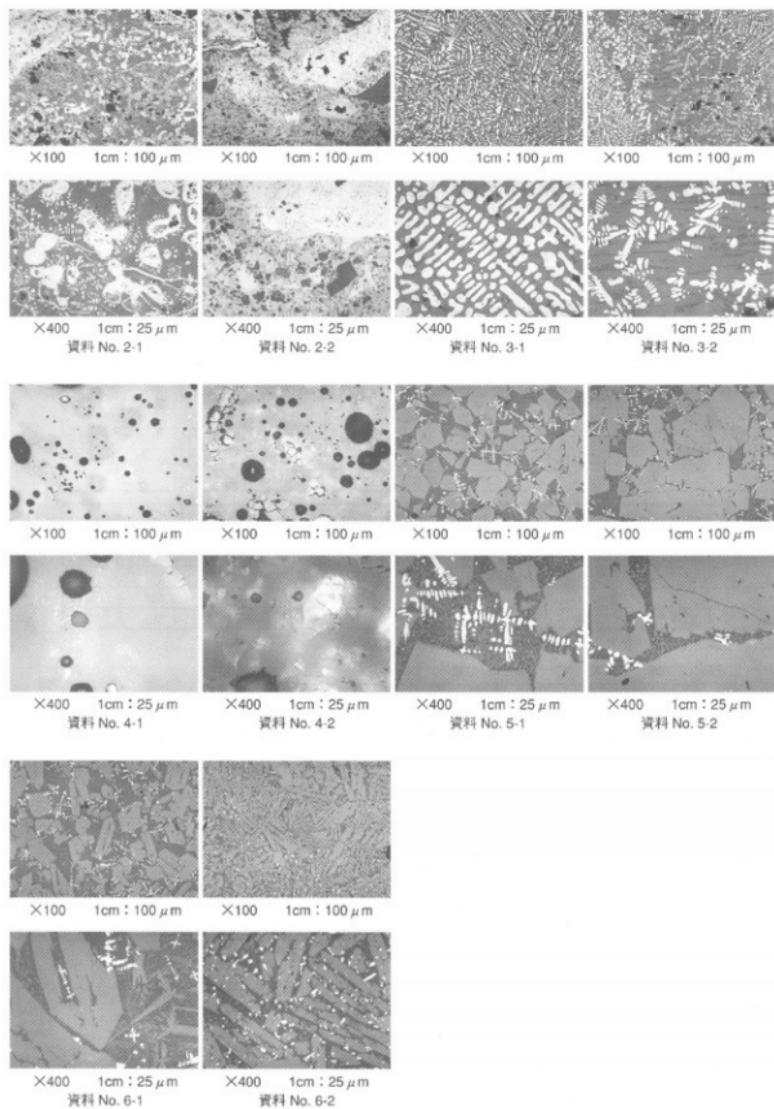


図44 ミクロ組織写真

表10 調査資料と調査項目(津島岡大遺跡出土資料)

資料No.	出土地点・層・遺構	資料種別	重量g	著 磁 力 反 応 性 真	M C 外 観 写 真	化 学 成 分 組 成 写 真	X 線 回 析 図	耐 火 度
1	津島岡大10次 7層上半	輪羽口	81.6	無	○	○	○	○
2	津島岡大10次 積穴住居2 古墳時代後期	鉄滓	19.5	強	無	○	○	○
3	津島岡大10次 7層下半 國102-M4	鉄滓	84.7	強	無	○	○	○
4	津島岡大19次 弥生時代後期	10層 漢13	製鍊滓	365	弱	無	○	○
5	津島岡大19次 古墳時代後期	182.8	製鍊滓	182.8	稍弱	無	○	○
6	津島岡大19次 山形時代後期	193.0	製鍊滓	193.0	稍強	無	○	○

(1) 資料番号・記号、資料種別等は、埋蔵文化財調査研究センターの記載資料による。
(2) ○は、観察・測定調査の実施項目を示す。

(3) MC 反応とは、メタルチャック(全周探知機)による残存金属の有無を示す。

<附記>

- No. 1 國102-1
2 國102-M5
3 國102-M4
4 國104、四版21-1
5 表3中「椀形窓」
6 表3中「製鍊窓か?」

表11 津島岡大遺跡出土鐵滓の化学成分分析結果(%)

資料No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	比率(%)	
											Fe ₂ O ₃	FeO
2	54.5	0.19	16.6	59.2	12.0	2.11	1.67	0.12	0.12	0.24	78.1	21.9
3	51.7	0.17	49.0	19.2	13.7	2.16	11.0	1.27	0.18	0.85	28.2	71.8
4	3.77	0.19	0.64	4.4	72.6	13.3	1.95	1.25	1.08	3.16	87.3	12.7
5	43.4	0.22	53.6	2.2	28.2	4.97	4.29	1.55	0.38	0.82	3.9	96.1
6	42.8	0.11	51.1	4.2	30.0	4.30	5.79	0.80	0.22	1.02	7.7	92.3

C.W.=化合物、造作成分=SiO₂-Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O

表12 遺土の化学成分分析結果(%)と耐火度測定結果(℃)

No.	T. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	C. W.	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	TiO ₂ /T. Fe	MnO/TiO ₂	造作成分	
1	2.34	0.46	2.83	2.40	72.0	15.2	0.71	0.46					
No.	TiO ₂	MnO	Na ₂ O	K ₂ O	C	Igloss	耐火度y(℃)						
1	0.67	0.04	1.15	1.97	0.17	2.70	f(x)	y(計算)	y(測定)	4.33	1,420	1,403	

Igloss : Ignition loss (1000°C 加熱減量)

y(耐火度)=(ゼーゲルコーン 測定温度 y) 測定法: JIS R 2304(耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法) および JIS R 8101(耐火度試験用標準コーン)に準拠して測定。

y=118fx+912
(粘土遺物未腐朽)(化学成分因子fx<7.0)
ここで、

$$fx=(25.8\Delta\text{Al}_2\text{O}_3+5.2\text{SiO}_2)/(146\text{MgO}+448\text{MnO}+78.6\text{CaO}+12.5\text{T. Fe}+10.4\text{TiO}_2)$$

表13 鉄滓資料のX線回析試料・顯微鏡組織と製造工程の分類

資料No.	資料の種別	X線回析試料		製造工程の分類	出土遺構記号
		M.	W.		
2	鉄滓	M.	W. H	鍛冶滓(含鉄鉱化物)	津島岡大10次 積穴住居2
3	鉄滓	W. M		鉄鉱石系精錬鍛冶滓	津島岡大10次 7層下半 國102-M4
4	製鍊滓	S		炉渣付着滓	津島岡大19次 10層 漢13
5	製鍊滓	F. W		鉄鉱石系製鍊滓	津島岡大19次 9層 漢46・49
6	製鍊滓	F. W. M		鉄鉱石系製鍊滓	津島岡大19次 9層 漢47

鉱物記号: W(ワウタイト:Wustite-FeO), M(マグネタイト:Magnetite-Fe₃O₄), H(ヘマタイト:Hematite-Fe₂O₃), Go(ゴーティアイト:Goethite-FeOOH)、
F(ファイヤライト:Fayalite-Fe₂SiO₄), S(シリカ:Quartz-SiO₂)

(2) 棒火矢の火薬成分分析

津島岡大遺跡第12次調査で出土した近世の棒火矢³⁾について使用された火薬の成分分析を試みた。事前に火薬専門機関等数カ所に問い合わせたところ、通常江戸時代のものであれば「黒色火薬」であろうとの予測を得られた。黒色火薬の成分は硝酸カリウム・硫黄・木炭の3種であり、分析の結果、カリウムと硫黄が検出されれば、黒色火薬であると確定できるということである。

そこで2003年7月に、理学部地球科学科松田敏彦助教授に実物を見て頂いたうえで、サンプルを採取し、X線回折装置による分析を実施して頂いた。

その結果、期待された成分は得られなかった。その要因として、発掘後長時間が経過していること、保存処理を経ていることから、カリウム・硫黄ともにすでに溶け出してしまったものと考えられる。出土直後に周辺土壌も一緒に取り上げたうえで、分析することができれば、あるいは良い結果が得られたものと思われる。

今回の成分分析では期待された成果ではなかったものの、今後の調査・研究に活用される貴重な点が得られた。

(岩崎)

註 (1) 山本聰・岩崎志保2003『津島岡大遺跡II』岡山大学構内道路発掘調査報告第16冊

(3) 津島岡大遺跡第28次調査土壤分析

津島岡大遺跡第28次調査（自然科学系総合研究棟新宮予定地）³⁾において、主に「黒色！」層の成因を探ることを目的として、土壌の成分分析を実施した。実施にあたっては白石純氏（岡山理科大学自然科学研究所）の御協力・御教示を得た。

分析試料：津島岡大遺跡第28次調査共同溝地点の北壁及び東壁より、縄文時代後期～近世まで9枚の土層について、各5点ずつ土壌のサンプリングを行った。

分析結果：表14に上層の分析値を示している。各土層からは、合計5点の土壌をサンプリングし、その平均値を表に掲載した。なお、東壁土壌もほぼ同じ結果となったため、ここでは省略している。

①各土層で比較すると、10元素のうちFe元素にのみ差がみられた。

②Fe量は6層（明黃褐色砂質土）に最も多く含まれ、ついで11a層（黒褐色粘質土=「黒色土」）に多く含まれていた。このことから、Feの量が七層の色調に反映していることは、十分予測される。また、その他の元素には、顕著な差がみられず、分析値からはこれ以上の検討はできない。

③上層のpH値を調べた。すると、5層までの上層では微アルカリであったが、6・11・12層では中性で、13層では微アルカリであった。

まとめ：この結果を受けて、以下の2点についての検討を行った。

表14 土壌サンプリング分析値(%)

層位	上層	pH値	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P
3 b	黄褐色砂質土	7.3	近世	62.51	1.02	19.90	7.87	0.23	2.16	1.41	2.51	2.00	0.13
4 a	黄褐色砂質土	7.4	中世	63.24	1.03	19.63	7.10	0.22	2.18	1.42	2.82	1.98	0.14
4 b	黄褐色砂質土	7.5	中世	66.14	0.92	18.33	5.76	0.13	2.01	1.55	2.58	2.18	0.18
4 c	淡黃灰褐色粘質土	7.5	中世	64.29	1.12	19.53	6.23	0.11	2.20	1.37	2.87	1.95	0.16
5	淡黃灰褐色粘質土	7.3	古代～中世	63.91	1.07	19.70	6.30	0.13	2.08	1.29	3.18	1.96	0.15
6	明黃褐色砂質土	7.0	古墳	59.69	0.95	19.02	12.19	0.19	2.08	1.19	2.38	1.90	0.13
11 a	淡黃褐色粘質土	6.9	弥生前期	61.69	0.97	19.26	9.50	0.24	2.06	1.48	2.31	2.04	0.18
12 a	淡黃褐色粘質土	6.9	縄文後期	62.65	0.99	19.57	7.96	0.23	2.13	1.23	2.81	1.99	0.22
13 a	淡青灰色粘質土	7.2	縄文後期	64.46	0.95	19.46	6.26	0.11	2.10	1.40	2.78	2.08	0.20

1. 鉄分が多いということは、上層から沈殿してきたものが、黒色土で止まることにより、その上層に多く堆積しているものと考えられる。
 2. pH値について、6・11・12層が中性であることの原因は不明である。しかし黒色土の周辺の上層のみに認められることから、黒色土の成因を解明する手がかりになる可能性がある。
- 今回の分析の結果、依然として、不明な点は多いものの、黒色土の成因を考えるひとつの手がかりとはなった。今後も様々なアプローチを試みることしたい。
(岩崎)

註（1）志郎敏二2004「津島岡大遺跡第28次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

3. 調査資料の保存処理

木製品の保存処理作業

PEG保存処理 2002年度11月より開始している第6期保存処理を、今年度も継続して実施した。経過は表15の通りである。PEG濃度を95%から100%へ向けて上昇させている途上で、次年度に継続となつた。

今回は津島岡大遺跡第19次・22次調査および、鹿田遺跡第7次調査出土木器の処理を行っている。なお今年度も保存処理の外部委託は行っていない。
(岩崎)

表15 保存処理工程表

処理回数	年月日	濃度
第6期処理	2002/11/12	40%で開始
	2003/4/18	50%へ
	2003/5/29	60%へ
	2003/8/25	70%へ
	2003/9/30	80%へ
	2003/11/10	90%へ
	2004/2/4	95%へ
	2004/3/31	100%へ上昇中

第2節 調査成果の公開・活用

2003年度は、鹿田遺跡第14次調査において現地説明会ならびに地域の公民館講座の中での説明会を実施したほか、鹿田キャンパスと津島キャンパス両地域において展示会を開催した。また、博物館学実習あるいは中学生の職場体験の受け入れなど、学校教育現場との連携も積極的に行い、調査成果の公開・活用に対して、様々な形の取り組みを行つた。

1. 公開・展示

(1) 鹿田遺跡第14次調査現地説明会の実施

発掘調査における現地説明会は、学内および一般向けに1度開催することが常であったが、今回は、地域の公民館講座に関わる見学依頼があったため、2回の説明会を行うこととなつた。



図45 鹿田遺跡第14次調査現地説明会風景

① 学内・一般向けの説明会：10月18日（土）

鹿田遺跡第14次調査では、7月から発掘調査を開始していたが、終盤にさしかかった10月に、本地点の調査成果として中心になる近世～古代末の調査がほぼ終了した段階であったことから、説明会を行うこととした。日程は、10月18日（土）の14時～16時である。調査地點が、新病棟の東隣であったことから、外館からの見学者に加えて、入院患者や見舞い客など病院関係の方々の姿も少なからず見受けられた（図45）。見学者は106名となり、2組に分かれての見学となった。

調査現場では、近世の導水施設が設置されたと考えられる溜め池状遺構や中世あるいは古代末に遡る井戸などが注目された。また、出土した遺物に関しては、新病棟内において開催した鹿田キャンパス特別展示の中で、その説明を行った。

② 公民館講座に伴う説明会：10月5日（土）『岡山市立御南公民館むかし探検隊』

地域の歴史を学ぶというテーマで一連の講座を開催されている御南公民館から、鹿田遺跡の内容、特に「鹿田庄」に関しての講演と遺跡見学の依頼があった。それを受けて日程を調整した結果、10月5日（土）の午前中に同遺跡の説明と歴史的位置づけに関する講演を、続いて午後に遺跡見学を行った。それに加えて、これまで出土した遺物の中で、特色あるものに直接触れられる簡単な展示を提供し好評を得た。（山本）

（2）鹿田キャンパス特別展示

鹿田遺跡は、岡山大学が埋蔵文化財調査室（現埋蔵文化財調査研究センターの前身）を設置した1983年から、本格的な発掘調査が開始されており、2003年は鹿田遺跡発掘20周年の年にあたる。また、定期的に開催している展示会は、津島キャンパスでは6回を数えるのに対して、鹿田キャンパスでの開催は1990年の第2回目にあたる1回だけで、以来行われていなかった。こうした状況から、現地説明会を契機に、これまでの鹿田遺跡の調査成果を概観できる「鹿田遺跡発掘20周年特別展示」を併せて計画することになった。

展示会場は、新たに建設された新病棟エレベーター前のフリースペースを利用し、期間は2003年10月18日（土）～24日（金）の7日間である。会場の利用などには医学部附属病院の協力を得た。初日の18日は第14次調査の現地説明会にあわせた展示であり、順次、調査研究員が解説を行った（図46）。その内容は、①鹿田遺跡の位置と概要、②鹿田遺跡の弥生～古墳時代、③中世の鹿田、④近世の鹿田、の4コーナーに分けて造構の写真や主だった遺物の展示を行うものとした。遺物に触れてもらうほか、遺構では井戸の土壙はぎ取りや模型も加えることで、全体に、実物を実感してもらうことを主眼においた。

当日は、200名を超す見学者があった。初日の開催時間は14:00～16:00の予定であったが、昼過ぎには、通りすがりの方を含め、次々と見学者が会場に来られ、また、終了後も絶えず数名の方が残る状態であったため、実際は13:00～17:00が開催時間となってしまった。見学者の中には、現地説明会以上に病院患者さんの姿が目につき、車いすを利用されている方やパジャマ姿の小学生などが興味深げに訪れるのが印象的であった。

19日は休日であったが、20日からは職員の勤務時間にあわせて、8:30～5:00にパネル展示を継続した。平日は発掘調査を行って



図46 鹿田キャンパス特別展示会風景

いるため、調査研究員は展示に立ち会うことができず、残念ながら展示ケースの無い状態にある遺物の展示は、保管上の問題から不可能と判断せざるを得なかった。遺物に関してはパネルを用いることで、少しでもそれを捕うこととした。会場には解説パンフレットを1日に50部程度を置いたが、毎日全て無くなってしまっており、その数から期間中に370名以上の見学者があったことが予想される。

今回はいわゆる「出前展示」とでもいうものであった。こうした試みを通常の生活からは隔離されてしまう多くの方々を抱える病院という場所で行なうことができたことは、今までの展示とはまた違う意味で有意義な展示であったと言えよう。

(山本)

(3) 第7回岡山大学キャンパス発掘成果展

概要:2002年度以降、年1回の定例となっている岡山大学キャンパス発掘成果展を開催した。第7回目である。本年度は、発掘調査の実施と報告書刊行が重複した状況にあり、それに加えて、鹿田キャンパスでの展示も企画されたため、限られたスタッフと時間の中で、より効果的な展示方法を模索することが望まれた。その結果、開催期間は、本学附属図書館による「池田家文庫貴重資料展」の期間を考え合わせて、2003年10月27日(月)～11月1日(土)、会場は埋蔵文化財調査研究センターの収蔵庫2階展示室周辺となり、昨年度に比べると、期間は1/2に短縮し、会場スペースも大幅に限定した状態で行った。見学者は延べ109名であった。

内容と成果:テーマは『遺跡の土層を切る!!』で、今年の特色は土層に焦点をあてたことにある。発掘調査の際に、「どのような観察から遺構をとらえるのか」、あるいは「土層と遺物の密接な関係を伝えること」に主眼を置いた。また、発掘現場の臨場感を出す展示をめざし、現場で撮影したビデオでは、現場の音声をそのまま使用したほか、津島岡大遺跡・鹿田遺跡で採集した土層のはぎ取りを全体に巡らせるなど、随所に工夫を凝らした。土層のはぎ取りは、遺跡や時代によって土質が異なることがわかりやすいように並べ、土層と遺物の時期を対応させた展示を、現代から縄文時代まで各時期ごとにレベルを考えながら行った。さらに、遺構に関しては、井戸の断面や炭化米集中土坑の平面でははぎ取りを展示し、「その掘り方を考えてもらう」という企画を一つの目玉に据えた。その他に、チャレンジコーナーとして、昨年度の展示会で好評を博した「石器を探してみよう」のコーナーを再度設けたほか、新たに「土器の時期を当ててみよう」の企画を追加した。

こうした試みが一定の成果を上げたことは、アンケート結果から窺うことができる。展示の中で印象に残った

アンケート数 (回答率)		印象に残ったもの・おもしろかった企画	やってみたいこと
④ (43%)		土器と遺物	発掘体験
		石器を摸ろう	他の後発
		土器を分類しよう	その他の
		展示方法	注目(8.6% - 6%)
		その他	計20(参加1~4%)

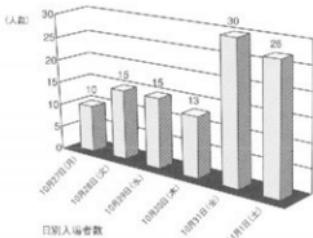


図47 展示会日別入場者数



図48 展示会見学風景



図49 津島キャンパス展示風景

ものあるいはおもしろかった企画について、土層に間違することをあげた人が最も多く、回答者の61%にのぼっている。第2番目は、昨年人気の高かった「石器を探そう」が35%と根強い人気が示された。遺構のはぎ取りなどに関する展示方法をあげる人も22%あり、目的としたテーマあるいは展示方法の工夫が、見学者に評価されたと考えられる。

一方、実験的に行った7時までの夜間開催に関しては、効果はかばかしいものではなかった。時期的に日没時間との関係で、5時以降は暗くなってしまう点なども問題であったのかもしれない。

広報活動：広報活動は昨年と同様であるが、その中で、本センターの展示会や発掘調査現地説明会の参加者に対する案内が効果的であること、見学者におけるリピーター比率の高さから窺われる。

課題と展望：見学者合計109名という数字は、昨年の252名を大きく下回る。昨年の1／2に到達しない数字である。減少の要因としては、期間が10日間から5日間と短かったことや、その期間内に日曜日を含まなかつたことが大きいことは、日曜日1日のみで全体の2割強となる60名の来場者を得た昨年度の実績から容易に導き出される。さらに、今年度の状況を確認してみると、月曜日～木曜日の平日は10～15名程度で推移し、終了間近となる金曜日に30名、土曜日に26名を数えた（図47）。昨年度と比較すると、平日の状況は共通しており、やはり休日開催が効果的であることが再確認されることとなり、今年度の数値は期間からすると妥当といえるのかもしれない。

アンケートの回収率を見ると、今年度は49枚で回収率45%であり、昨年の75%と大きな違いを示す。回収率が激減した背景には、見学者の満足度に昨年度との違いが現れている可能性があるのではなかろうか。体験型を全面に出した昨年の展示が強く支持された結果といえるかもしれない。しかし、「楽しかったです」「たびたび展示会を開いてください」「来年も楽しみにしています」「こんな展示もありなんだなというのがたくさんありました。」「いろいろおもしろい展示があり楽しめました。」という声も得られており、展示方法に一定の評価があったことも確かである。昨年度に比べると、体験の度合いは減少したが、はぎ取り土層という实物本意の展示からは、発掘現場の雰囲気を伝えることができたのではなかろうか。

また、「やってみたいことは？」の問い合わせでは、発掘体験と土器接合が二分する状況を示した。両方をあげた人は多くはないことから、体験希望者に関しては、現場指向と室内指向に分かれることが浮き彫りとなったことも、アンケートから読み取れた点である。

今回の見学者に占めるリピーター率は39%にのぼっており、継続的な展示会への期待の大きさを示している。今後も、こうした様々なデータを活用しながら、いろいろな実験的展示方法に取り組み、安易な体験型にとどま

らす、効果的な展示方法を模索しつつ、魅力的な展示会を企画・実施することが重要であろう。業務全体の中で、それぞれのバランスを考慮しながら、より多くの期待に応えられるような工夫を考えつつ、今後も内容の濃い情報発信を継続していきたい。

(山本)

(4) その他の展示・開放

前述の津島・鹿田両キャンパスにおける展示会、あるいは本センター建物内における常設展示の他に、学内においては、附属図書館内のパネル展示、そして、岡山大学考古資料展示室における常設展示にも展示コーナーを設けている。

① 附属図書館内での展示：11月4日～11月28日に展示

例年、年に1回パネル展示を行っている。今回は、津島キャンパスでの展示会が直前に予定されたため、第7回展示の内容と関連した「発掘調査と地層の観察」という題を設定し、発掘調査では、どのような視点で遺構を確認し、どのような方法で調査するのかを、地層との関係を示しながら解説した。

② 岡山大学考古資料展示室

文学部考古学研究室が保管する資料を中心に、本センターの資料を含めた展示を行っている。常設展示ではあるが、見学に際しては希望を受けた上で随時対応している。大学関係者から一般の方々、さらには各地の高校・大学の生徒・学生が団体で訪れる場合も多い。

(山本)

(5) 報道機関への公開

新聞紙面への掲載としては、津島岡大遺跡第12次調査（附属図書館）で出土した棒火矢、鹿田遺跡第14次調査（医学部附属病院病棟）で確認した近世の溜め池状遺構、鹿田遺跡第7次調査（医学部基礎棟）で出土した猿形木製品があげられる。

棒火矢は幕末頃の砦に使用する武器であるが、全国的にも、これほど完形に近い状態で出土した例は無く、2002年度に山陽新聞で取り上げられ、その後、2003年度には読売新聞でも紹介された。鹿田遺跡の溜め池状遺構は、現地説明会の前に山陽新聞で報告された。鹿田遺跡第7次調査の猿形木製品は、かつてその希少価値から新聞報道があったが、類似資料から使用方法に関する分析が進んだことを受けて山陽新聞が取り上げた。（山本）

2. 資料・施設等の利活用

(1) 教育機関への支援（授業等の受け入れ）

① 博物館学実習：8月1日～8日

例年通り、岡山大学文学部が実施している学芸員資格取得のための授業（博物館学実習）の受け入れを行った。期間は、8月1日～8月8日のなかで6日間である。全体を3グループに分けて、それぞれ2日間の受講日程を組んだ。内容は、埋蔵文化財の取り扱い方に関する知識を体験できるように設定している。幸いに、同時期が鹿田遺跡第14次調査の発掘調査中であったことから、第1日目は発掘調査、第2日目は本センター施設内で出土遺物の洗浄・注記・接合作業を実施した。さらに、展示コーナーを利用して、大学内に広がる構内遺跡の概要説明とともに遺物の展示状況を見学し、埋蔵文化財が出土してから一般に公開されるまでの一連の作業工程を組み込んだ。その他に、木器の保存処理作業の体験も一部で行った。

② 中学生の職場体験：11月19日～20日・21日、岡山市立高松中学校・竜操中学校、生徒計5名

岡山市内の中学校から、「中学生の職場体験」の受け入れ依頼が2件あった。1件は昨年にも依頼された岡山市立高松中学校で、もう1件は、今年度新たに申し入れた岡山市立竜操中学校である。担当教諭との打ち合わせならびに生徒の下見を経た後、職場体験を実施した。作業内容にあたっては、竜操中学校の教諭から、「大学研究者の仕事も伝えて欲しい。」との希望があったため、通常、よく行われている埋蔵文化財資料に関する実務的な体験だけではなく、考古学研究室の協力を得て、研究活動面の実態に触れてもらうことを新たに盛り込んだ。

期間は、岡山市立高松中学校の中学生3名が11月19日（水）～20日（木）、岡山市立竜操中学校の中学生2名が11月19日（水）～21日（金）である。内容は、第1日目に本センターの施設見学・室内整理作業、第2日目に考古学概論受講・文学部の考古学研究室見学・考古資料展示室見学等、そして午後に鹿田遺跡第14次調査の発掘体験を予定した。しかし、第2日の天候が悪い予報が出たため、急遽予定を組み替えて以下のようない内容となった。

第1日午前：本センターの施設見学と概要説明後、室内整理作業を実施。図書整理、施設内の整理・整顿

午後：鹿田遺跡第14次調査の発掘（残念ながら、降雨のため短時間の体験となった）。土器記

第2日午前：考古学概論受講、文学部考古学研究室見学・考古資料展示室見学・掃除・遺物の展示作業体験、

午後：出土土器の洗浄・接合・注記作業。

第3日午前（竜操中学生のみ）：施設内整理、レポート作成

③ 中学生の総合学習

- 岡山市立京山中学校生徒見学

(2) 調査・研究への支援

① 資料提供

- 〈一般〉・縄文時代後期土器（津島岡大遺跡第15・17次調査）：2件

- 植物遺体一種子（津島岡大遺跡）：1件

- 磨り石・敲き石（津島岡大遺跡・鹿田遺跡）：1件

- 鮫鱗繩（鹿田遺跡第5次調査）：1件

- 年代測定資料（津島岡大遺跡第3・5・15次調査・鹿田遺跡第7次調査）：1件

- 津島岡大3次～弥生早期土器・堅米類・同5次～縄文後期土器・堅果類

- 同15次～縄文後期土器・弥生早期土器・同時期の堅果類・鹿田7次～古墳初頭土器

- 〈学生〉・縄文時代後期土器（津島岡大遺跡第17次調査）：1件～岡山大学考古学修上課程

- 猫形木製品（鹿田遺跡第7次調査）：1件～名古屋大学博士課程

② 図書の外部貸し出し：21件（岡山大学文学部学生他）

③ 保有機器の外部利用：鉄製品の保存処理1件（岡山大学文学部考古学研究室）

(3) 資料の貸し出し

① 出版物への資料提供

- 考古資料大観（小学館）：鹿田遺跡第1次調査～古墳時代初頭の本製短甲・古墳時代後期の土器一括
- 季刊考古学84号（堆山閣）：鹿田遺跡第1次調査～古墳時代初頭の発

② 他機関の展示・公開支援

〈写真〉・大阪府立弥生文化博物館：津島岡大遺跡第3次調査－弥生時代早期・前期土器

・岡山県立博物館：鹿田遺跡第5次調査－鎌倉時代井戸

・岡山県古代青銅文化財センター：鹿田遺跡・津島岡大遺跡

〈遺物〉・大阪府立弥生文化博物館：津島岡大遺跡第3次調査－弥生時代早期・前期土器

・岡山県立博物館：鹿田遺跡第5次調査－鎌倉時代井戸出土遺物（牛頭骨・土師質土器皿）

◆ 井戸枠模型

(山本)

第3節 2003年度調査研究員の個別研究活動

1. 科学研究費採択状況

山本悦世：平成15年度科学的研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」：研究代表者

岩崎志保：平成15年度科学的研究費（若手研究B）「東周時代墓葬の比較考古学的研究」：研究代表者

平成15年度科学的研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」（研究代表者 山本悦世）：研究分担者

横田美香：平成15年度科学的研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」（研究代表者 山本悦世）：研究分担者

2. 論文・資料報告

山本悦世：『津島岡大遺跡14』（編集）

「津島岡大遺跡における生業変遷 貯蔵穴と水田の実態」『津島岡大遺跡14』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

『遺跡出土の種子集成図録』（共著）平成15年度科学的研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」の報告の一部

岩崎志保：『遺跡出土の種子集成図録』（共著）平成15年度科学的研究費（基盤研究C）「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」の報告の一部

野崎貴博：「吉備地域における円筒埴輪製作技法の伝播と受容」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

忽那敬三：「石器組成からみた縄文時代後期聚落の空間利用」『津島岡大遺跡14』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

「子ども視」の系譜－子ども墓の比較を通して－『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集

高田浩司：『津島岡大遺跡13』（編集）

「津島岡大遺跡における縄文時代後期の炉」『津島岡大遺跡13』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

『弥生・古墳時代の手工業生産と集団関係』(岡山大学大学院文化科学研究科提出学位論文)

光本 順：『認知考古学とは何か』青木書店（共著、執筆部分「世界像としての古墳被葬者の身体－死者の身体をめぐる行為と認知－」）

『行為と身体の考古学における方法と実践（著述）・弥生時代から古墳時代を事例として－』『メタ・アーケオロジー』第4号

『身体の考古学と儀礼研究』『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集

『近代的身體と考古学』『シンポジウム近現代考古学の射程』

3. 研究発表等

山本悦世：「生業から見た縄文から弥生への変遷ードングリ貯蔵穴から水田」東京大学公開セミナー

（9月27日）

『埋蔵文化財から見る鹿出莊』『岡山市立御南公民館むかし探検隊』（10月5日）

『鹿出遺跡の調査成果』考古学研究会例会発表（11月8日）

岩崎志保：『呂島と呂系遺物からみた春秋戦国時代の社会』日本中國考古学会九州支部例会発表（4月12日）

『埋蔵文化財から見る鹿出莊』『岡山市立御南公民館むかし探検隊』（10月5日）

野崎貴博：『古備地域における円筒埴輪製作技術の伝播と受容』第52回埋蔵文化財研究集会（8月17日）

忽那敬三：『発掘の基本と実際』加古川市民生涯人講師

光本 順：『吉備の陶棺』倉敷埋蔵文化財センター秋の考古学講座（11月23日）

『岡山地域の分網形土器品における身体表現の二相一型式学的検討と比較から－』人類史研究会第15回大会（3月21日）

4. 資料収集・実態調査

山本悦世：縄文時代中期末～後期土器の実見（岡山県）

縄文・弥生遺跡の実態調査（石川県、富山県、神奈川県）

四国における古代・中世土器の調査（愛媛県）

岩崎志保：縄文時代中期～後期土器の実見（岡山県）

縄文・弥生遺跡の実態調査（石川県、富山県）

野崎貴博：中・後期古墳の踏査（愛媛県）

高田浩司：古墳の踏査・銅鏡・石器の実見（岡山県、香川県、東京都、埼玉県）

光本 順：弥生時代絵画資料ほかの調査（奈良県、愛知県）

忽那敬三：縄文時代の足型付土製品の資料調査（財團法人北海道埋蔵文化財センター、苫小牧市博物館）

第5章 2003年度における調査・研究のまとめ

調査 発掘調査は鹿田地区での2件（鹿田遺跡第14次調査・15次調査）が挙げられる。第14次調査は、1999年から始まった医学部附属病院病棟新宮工事における最後の調査であり、鹿田地区の南東部域における遺跡の状況を示す遺構・遺物が提出された。近世～弥生時代の資料なかで、同圏における導水施設が設置された大規模な溜池状遺構や、中世の木簡の出土は特に注目される。木簡に関しては、本紀要にその類例などを含めた報告を掲載した。こうした一連の病棟新宮工事に伴う調査からは、鹿田遺跡の南東部の状況が明らかとなってきており、中世段階の集落の範囲、あるいは弥生時代においては水田域の溝渠の状況など、鹿田遺跡の全容を解明するにあたって大きくことのできない重要な成果をあげている。第15次調査は小規模な調査であったが、古墳時代の井戸を確認するなど、古墳時代前期の資料を豊富に出土した第13次調査地点とあわせて、同時期の集落実態を解明するのに貴重な成果を得ることができた。

立会調査では、津島・鹿田両地区とも比較的規模が大きいものが多く、これまでの成果を補足するデータとして、両地域における遺跡の全体像を理解するためには必要な資料の蓄積が進められている。

研究 今年度は、「津島岡大遺跡13」と「津島岡大遺跡14」の2冊の発掘調査報告書を刊行し、津島岡大遺跡の縄文時代に関して居住域周辺地点と炉を中心とした活動域の状況、あるいは弥生時代早期における水田の広がりを報告した。また、貯蔵穴から水田への生糞転換の推移、石器出土状況からの空間利用形態の解明、縄文時代後期の炉の機能に関する考察などがなされ、縄文集落の実態解明にとって重要な知見が示された。

そのほかには、津島岡大遺跡第17次調査の報告書作成での成果があげられる。同地点は、まさに縄文集落の中心をなす地点であり、多数の遺構・遺物が調査されている。特に、縄文土器は質量共に際立っており、土器研究にとって注目される資料として分析の進展が期待される。

本紀要に掲載した鉛滓の分析・拂火矢の火薬成分分析は、すでに報告書を刊行した資料の分析である。報告書刊行後、必要な資料に関しては研究・分析を継続し、報告を補足できた点は意義深い。また、分析に際して、火薬分析・土壤分析については学内外の研究機関所属の方々と協力・連携することによって行うことができた。今後もこうした研究体制を積極的に取り入れていくことは重要であろう。

展示・公開 発掘調査の現地説明会・鹿田キャンパス特別展示会・第7回岡山大学キャンパス発掘成果展など、本年度は展示・公開に関して様々な取り組みを行った。展示会の成果は、鹿田地区では予想を遥かに上回る人場者数を記録し、津島では多くのリピーターの参加が確認できるなど、本センターの活動が地域において強く求められること、そして、定期的な開催は地域に根付いてきたことを示す結果として現れている。ただし、こうした展示にあたっては、本センターだけの力ではなく、学内諸機関の御協力・御援助があってこそ、有意義な開催が可能となる。今回、特に鹿田地区では病院の御協力を頂けた点は、そうした良き事例といえるであろう。

このように、埋蔵文化財という資源を、より多くの人に提示するために、教育現場での活用・地域公開・学内の公開・研究会など様々な場での取り組みがあげられるが、今年度は、そう言ふ点では、例年以上に幅広い対応ができたと評価されよう。

その他に、専任職員の発掘調査と整理作業に関する能力向上を促す試みや、高精度機材の導入による調査の効率化を積極的に行なった。限られた条件の中で、様々な活動を支えるためには、こうしたセンター・業務に対する質の向上を絶えず意識することが重要である。今後、施設の充実などの外的条件整備に加えて、調査・整理・研究などの内的な質の向上をより一層高める努力を目指していきたい。

(山本)

付 編

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（2004年3月31日まで）

昭和62年11月26日岡山大学規程第48号
改正 平5. 2. 25 第4号
平7. 3. 31 第19号
平12. 3. 31 第38号

（範囲）

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理および保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他の埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

（自己評価等）

第2条の2 センターは、岡山大学規則（平成6年岡山大学規程第64号）第2条の定めるところにより、センターに係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けるよう努めるものとする。

3 第1項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。

4 自己評価委員会に關し、必要な事項は、別に定める。

（教育研究等の状況の公表）

第2条の3 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

（センター長）

第3条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、専門的知識を有する本学の専任教官のうちから学長が命ずる。

3 センター長は、センターに属する業務を掌理する。

4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

（調査研究室）

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の専任教官のうちから学長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の専任教官のうちから学長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

付 錄

(管理運営の基本方針等)

第6条 センターの管理運営の方針等は、岡山大学部局長会で審議する。

(運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に關し、必要な事項は別に定める。

(事務)

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

(離則)

第9条 この規則に定めるもののはか、センターに關し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条4項、第4条第5項及び第5条第3項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成5年5月25日から施行する。

附 則

この規程は、平成7年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程（2004年3月31日まで）

昭和62年11月26日岡山大学規程第50号
改正 平12. 3. 31規程93号

(趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則（昭和62年岡山大学規程第48号）第7条第2項の規程に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に關し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という）の運営に關する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 本学の教授のうちから学長の命じた者若干名

三 センターの調査研究専門委員のうちから学長の命じた者1人

四 センターの調査研究室長

五 施設部長

2 前項第2号の委員の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員会以外の者の出席を求める、その意見を開くことができる。

(庶務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

- 1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。
- 2 この規程施行後最初に任命される第3章第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規程にかかるらず、昭和61年3月31日までとする。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

(3) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程（2004年3月31日まで）

平成5年2月25日岡山大学規程第5号

改正 平12.3.31 規程91号

（趣旨）

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の2第4項の規程に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織および運営に關し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係わる点検及び評価の実施並びにその結果の公表に關し、必要な事項を審議する。

（組織）

第3条 委員会は、次の各号に掲げる者で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター・調査研究室長
- 三 センターに勤務する教官のうちから若干名
- 四 埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名
- 五 施設部長

3 前項に定める委員のはか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

（委員長）

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

（会議）

第5条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（庶務）

第6条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

（雑則）

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成5年2月25日から施行する。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

2. 2003年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

(1) センター組織一覧



(2) 運営委員会

【委 員】

福田孝司 文学部教授（センター長、委員長）	沖 陽子 環境理工学部教授（調査研究専門委員）
新納 京 文学部教授	柴田次夫 大学院自然科学研究科教授
久野修義 文学部教授	山本悦世 文学部助教授（調査研究室長）
村上太郎 大学院医歯学総合研究科教授	齊藤健次 施設部長
名合宏之 環境理工学部教授	

【2003年度審議・決定事項】

- | | |
|-----------------------|---|
| 第51回 2003年5月30日 | • 平成14年度決算について
• 平成15年度事業計画について
• その他 |
| 第52回 2003年12月（持ち回り会議） | • 平成15年度予算に関する
• 技術補佐員の雇用について |
| 第53回 2003年12月25日 | • 鹿田薰跡第14・15次調査完了報告
• その他 |
| 第53回 2004年1月13日 | • 平成16年度予算について |

3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

平成12年5月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施設課 長

I. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。

4. 非常停止装置を備えたベルトコンベア--を用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等
 - 1) 安全で機能的な服装にする。
 - 2) 平坦面から 2m 以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
 - 3) ベルトコンベアの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
 - 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
 - 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2. 挖削
 - 1) のり面の角度

造成土：通常の土壌の場合は50~60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の隙間を深さ1.5m 以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm 以上とする。
 - 2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
 - 3) 深い造堀（深さ1.5m 以上の造堀）

造堀掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3. 高所（高さ 2m 以上の場所）での作業
 - 1) 作業中には安全帯を使用する。
 - 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
 - 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。
4. 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベア・ポンプ等）

 - 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
 - 2) ベルトコンベア・水中ポンプ等の知能を持つ者が監督・稼働させる。
 - 3) ベルトコンベアを重ねたつなぎ目の部分には、なるべくナットが落ちないような措置をする。
 - 4) 原則としてベルトコンベアの直下での作業・通行を避ける。
 - 5) ベルトコンベアの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。（車両関係）
 - 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
 - 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
 - 3) 積荷中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5. 健康管理
 - 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や造堀などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

4. 2004年度の新規程およびセンター組織に関する事項

2004年度は、国立大学の法人化に伴って、埋蔵文化財調査研究センターも組織上の改変が行われ、センター長は大学理事が担当することとなり、副センター長があらたに設置された。また、調査研究員の所属が、従来の文学部から埋蔵文化財調査研究センターへ移行した。その結果、センター規程および組織体制は以下のように変更となった。

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（2004年4月1日から）

〔平成16年4月1日
〔岡大規程第93号〕

（趣旨）

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第1号。以下「管理学則」という）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もつて埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査にすること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存にすること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等にすること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

（自己評価等）

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の教員以外の者による検証を受けることを原則とする。

（教育研究等の状況の公表）

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

（センター長）

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に掲定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を統括する。

（副センター長）

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

（調査研究室）

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な教員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が任命する。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の教員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るために、調査研究専門委員（以下「専門委員」という）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が任命する。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という）を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(締期)

第12条 この規程に定めるものほか、センターに關し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規（2004年4月1日から）

[平成16年4月1日]
[学長 裁定]

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長

三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名

四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人

五 センターの調査研究室長

六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもつて充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

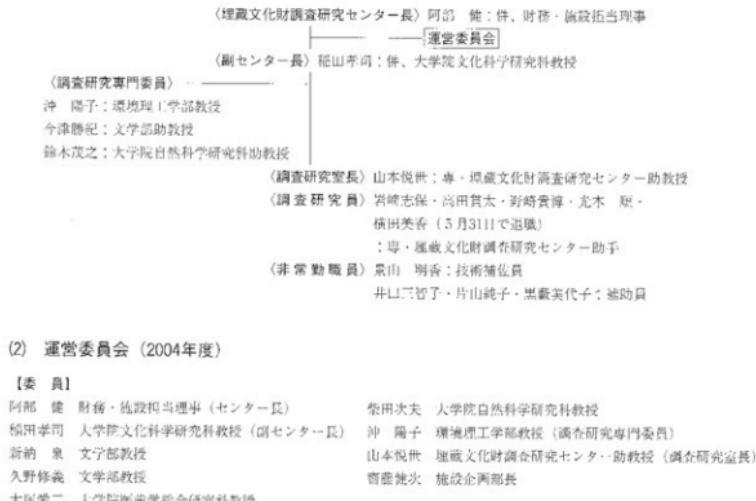
(事務)

第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

(3) センター組織一覧（2004年度）



付 表

付表1 1982年度以前の境内主要調査(1980~1982年度)

年度	施設名	種類	所蔵	調査実名	調査総縦	調査相模(m)	文献	備考
1980	東山	立合	清	医師病院検査室	岡山市教育委員会	8		
	日高清	+	農	麥田新開墾				
	神馬北	+	文書	合併地圖複数枚				
	津島北	+	文書	合併地圖複数枚				
	津島南	BD09, BC09	+	基盤整備(共同渠取公)				
		-11						
	津島西	2D~BE04~	+	築上安堵毛洋移(配木音西移)				
	津島東	07	+	築上安堵毛洋移(配木音西移)				
	東山		病	鳥糞堆泥質新青		*		
			動物実験場新宮	岡山県教育委員会	*			
			珊瑚解剖用標本庫新宮	岡山県教育委員会				
			五	河輪橋改修	*			
	津島	AV05~10, AW05~14, AX06, BY07, BE10	試掘	井戸水質測定				正義 A区14区で発生時代包含層確認、崇教~津島岡大造跡1次発見へ
	津島北	AW14	愛護	法文	井戸水質中標(NP=1)既述	岡山大学	24.0	3 小橋法目風遺跡: 津島岡大造跡1次調査
	津島東		試掘	学	武道館新宮	岡山県教育委員会	9.3	
	津島北	AV15~26	+	信託	挖土新宮	岡山県教育委員会	7.0	
	東山		四	日本伝伝子新宮	岡山県教育委員会	8.0		
			外末藤櫻坂新宮	岡山県教育委員会	4.0	2		
			立合	四	鶴仙塚佐賀道跡新宮・ガス管通	岡山県教育委員会	1	
	東山	AE~AN22, AB22~26	+	東	電線ケーブル敷設	岡山石谷賛美会		

文獻

1. 光永真一 1983 「岡山大学医学部附属病院動物実験施設工事に伴う排水管設置工事に伴う立合跡在「岡山県埋蔵文化財報告」13 岡山県教育委員会

2. 河本 浩 1983 「岡山大学医学部附属病院排水管設置工事に伴う排水管設置」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会

3. 吉留秀敏 1985 「岡山大学津島地区小篠井口川沿岸(AW14区)の発掘調査」『岡山大学内斎藤受賞研究会報告』第1回山田滋強文化財研会業

付表2 2002年度以前の境内主要調査(1983~2002年度)

凡例								
・総合番号: 施設区分別に同じ番号(立合番号は施設別に別けてある) 総合番号は選択的に使用する 津島岡大造跡下水汎濁は半導管敷設監視管の番号であることから、総合番号を番号1として延継している。 発掘調査には番号に△を付す。								
△:発掘調査地で、その後、発掘調査範囲内に入った地点は、範囲内の参考点数を省き、全てが範囲内に含まれた場合は総合番号に△を付す。 △:立合番号で、番号に接する番号:①:出土上層以下を確認した箇所 ②:周囲を追跡、遺物を確認した箇所								
・番号: 立合4~5の番号に対応する。								
△:文:文書4~5の番号に対応する。								

付表2-(I) 発掘調査

(津島地区: 津島岡大造跡)

総合番号	年度	番号	移入年	所蔵	調査実名	調査期間	面積(m ²)	調査実	文献
※1	1982	-	AW14	文	小篠井口架道跡(津島岡大造跡第1次発見)・清糞便中標(NP=1)既述	82.10.26~11.21	24	発生時代小篠・大作清	3
(1)	1983	11	ME4~18, PE17~28, BG4, BH1~15	昌	津島岡大造跡第2次調査 :松木立合跡	84.1.9~3.5	250	発生時代△:松木立合跡	4
(2)	1983	12	BH3	典	津島岡大造跡第2次調査 :△冬深埋赤内壁	11.14~11.22	276	発生時代△:藍木立合跡(津島)	4
(3)	1986	2	AV00	学	津島岡大造跡第3次調査 :松木立合跡	84.1.9~3.5	250	古文時代後期~後紀代早原の行義穴△:遺跡および墓群、弥生時代の遺跡△:古代の水口・清、古代の全般開拓痕	19
	1987	1	AW00~01			8.24~9.5	2500		

総合 番号	年度	番号	構内位置	面積	調査名目	調査期間	面積 (m ²)	調査 率	文獻
⑤	1986	3	TF・TG09	平	津島大遺跡第4次調査 「古墳通路等」	87. 1.19～1.22	70	弥生時代墓群の落、中浜溝遺	6
⑥	1988	1	AV06・08 AZ06・07	八角	津島大遺跡第5次調査 「自然科學研究科種」	89. 6.27～ 89. 3.19	1537	西文化時代後期～東北時代中期の軒前穴 と古墳、佐佐時代末～近世の水田露遇	27
⑦	1988	2	AV・AW04・05	二重	津島大遺跡第6次調査 「生活用器、学習機」	89. 9.20～ 89. 5.31	600	西文化時代後期の軒前穴と古墳、内代御 祭遺跡、佐佐時代前期～近世の水口溝遺	36
⑧	1988	3	AV・AW05・06	正	津島大遺跡第7次調査 「住居土器種」	89. 10.12～ 89. 3.31	800	西文化時代後期～東北時代中期～近 世水田	39
⑨	1990	1	AV・AZ08	大正	津島大遺跡第8次調査 「土器科研究科種」	90. 4.3～4.23	90	古墳時代後期の落	22
⑩	1991	2	BD18・19	新井	津島大遺跡第9次調査 「古墳土器種」	91. 7.23～12.25	650	磯文化時代末～成、弥生時代～古墳の落	33
⑪	1991	3	BH13	新井	津島大遺跡第8次調査 「古墳地盤整理」	91. 7.23～12.2	140	弥生時代後期、古代～古墳衣附	32
⑫	1992	1	AC・AW04	正	津島大遺跡第9次調査 「住居機能定着土器種」	92. 7.1～7.29	650	東文化時代後期の軒前穴と古墳、佐佐時代 ～近世の水田露	47
⑬	1992	2	BD～DC 6・11	保	津島大遺跡第10次調査 「供物土器種」	93. 4.17～7.31	400	弥生時代後期～東北時代中期、古墳時代 作陶遺跡	64
⑭	1993	2	AV・AW11～12	保	津島大遺跡第11次調査 「綜合地盤處理セクター」	93. 9.14～9.1.11	640	西文化時代後期遺	36
⑮	1993	3	AV～AW13～14	保	津島大遺跡第12次調査 「回廊部」	94. 2. 9～3.31 4. 1. 11～3.30	1472	弥生時代初期季節、彌生時代中期～古 墳時代後期、古代～近世遺（柔事園 遺）	64
⑯	1994	1	AV～AW11～12	保	津島大遺跡第13次調査 「回廊部」	95. 10. 6～11.30 95. 2. 19～10. 4	816	西文化時代後期～、孫子始代木、 古墳～古墳時代後期、近代科学分野	41
⑰	1995	2	BD～BC12・13	保	津島大遺跡第14次調査 「強引柱・住居骨倉」	96. 10.23～96. 2.14	856	西文化時代後期水田、弥生時代中期～古 墳時代後期水田、佐佐時代の落	46
⑱	1995	3	AW05・01	少	津島大遺跡第15次調査 「サテラ・ベンチ・ビジス・ラボ タリエ」	96. 1. 16～4. 25	1600	西文化時代後期～、孫子始代木、 古墳～古墳時代後期、古代科学分野	36
⑲	1996	1	BD19～20	新井	津島大遺跡第16次調査 「古墳地盤詰跡」	96. 5. 7～13	30.3	古墳時代後期～古墳時代の土塁、 古墳時代の落	41
⑳	1996	3	AW02～04	保	津島大遺跡第17次調査 「環濠跡・手掘跡」	96. 5. 21～1. 9	1451	鐵文化時代後期の落、弥生時代の落、 水田、古墳の落	44
㉑	1998	2	BB11	保	手掘大遺跡第18次調査 「新築・移築」	98. 4.7～4.20	16	古代の落と遺構	53
㉒	1998	3	AZ09・10	保	津島大遺跡第19次調査 「コラボレーションセクタ」	98. 7. 27～ 98. 2. 18	1018	西文化時代後期～、佐佐時代の河岸、 古墳時代後期～、佐佐時代の河岸、 古墳時代中期～後期、津島大遺跡水 田遺	63
㉓	1998	5	AY07	保	津島大遺跡第20次調査 「壁うね・谷張取」	98. 10. 19～28	16	古墳上土質に調、中浜溝	30
㉔	1998	6	AX09	正	津島大遺跡第21次調査 「シエンバーー設置」	98. 11. 6～24	30.2	西文化時代中期～地上化、弥生時代早期～ 中期、古代丘陵化	65
㉕	1998	8	AW02・03	保	津島大遺跡第22次調査 「夜景」	99. 3. 1～7. 12	773.3	古墳文化中期～後期、弥生時代河 岸、古墳時代後期～、古墳時代中期～後 期（多賀遺跡）、永白堀遺	53
㉖	1999	1	AZ15・BA14	大文	手掘大遺跡第23次調査 「総合研究」	00. 2. 3～7. 28	1339	西文化時代後期～、佐佐時代中期～後 期、津島大遺跡水田遺	16
㉗	2000	3	AZ14	大文	津島大遺跡第24次調査 「手掘研究」	00. 12. 5～14	34.2	西文化時代河岸、斜坡	61
㉘	2000	4	BA15	貞	津島大遺跡第25次調査 「敷地」	01. 1. 29～31	20.0	中井～近世の落、残	6
㉙	2000	5	BC～EC14～13	少	津島大遺跡第26次調査 「敷地」	01. 3. 26～9. 30	1550	西文化～弥生勢力の河岸、財穴穴、十 字ヶ原、近世の落	56
㉚	2001	1	BD～BC14～15	保	津島大遺跡第27次調査 「古墳50周年記念」	02. 2. 1～6. 24	1648	西文化時代後期の落、孫子時代、古墳時 代の落、中井の越跡（典事園遺）	66
㉛	2002	2	AW～AY06～08	正	津島大遺跡第28次調査 「自然科學研究科種」	02. 3. 26～9. 20 03. 1. 15	1798	津島大遺跡落の落、中井～古代の 落、14	71
㉜	2002	4	BF16	貞	津島大遺跡第29次調査 「回廊」	02. 9. 18～10. 3	62.6	中井～古墳時代の落、ビック	71

〈鹿田地区：鹿田遺跡〉

総合 番号	年度	番号	構内位置	面積	調査名目	調査期間	面積 (m ²)	調査 率	文獻
①	1983 1984	9	AU～BD26・40	内丸	坂田遺跡第1次調査：外室設置権	85. 1. 9～8. 31	2188	弥生時代中期後半～中井落	7
②	1983	10	BG・BH18～21	坂内	坂田遺跡第2次調査：NMR CT 素	86. 1. 12～30	176	弥生時代後期～中井落	7
㉓	1986	1	CN～CU27・28 CT～CV19～27 CX～DU16～25 DU～DG22・23	坂庭	坂田遺跡第3次調査：技術	86. 2. 11～19	2390	中井の落、古代の河岸と植樹	10

総合 番号	年度	名号	島内座標	所属	調査名称	調査期間	面積 (m ²)	地 理	文 化
北	1987	3	DD~DF25 DG~DT27・28	医療	東山道跡第4次調査 ・接骨院跡の配置	11. 2~11. 21	30	古代の河港	10
宮	1987	2	BW~BZ35~42	医療	坂戸道跡第5次調査：管理棧	10. 6~88. 3. 2 3. 23~3. 31	1192	准生時代土器窯跡、中世の瓦器	24
宮	1990 1991	2 1	BW~BG57~71	ア	鹿口道跡第6次調査 ・アイシワーブ紀念センター	1. 1~20. 91. 6. 30	600	准生~古墳時代の集落、中世集落	40
宮	1997 1998	4 1	BR53~BZ62 BY56~57	医療 園	鹿口道跡第7次調査 ・医療施設跡	98. 2. 27~8. 6	829	古墳時代初期、中世の瓦器、近世の水道、古墳	50 53
宮	1998	4	DT~DS30~32	医療	鹿口道跡第8次調査：財治遺跡	98. 7. 28~9. 1	155	古墳時代土器、中世墓	33
帝	1998 1999	7 1	CG~CP28~37 CG~CJ20~37 CK~CT25~37	医療	鹿口道跡第9次調査 ・新棧	98. 1. 22~ 99. 5. 1.	2068	准生時代水口、酒、中世~近世墓葬	58
准	1999	3	CD~CE10~12 DD~DF16~22	医療	鹿口道跡第10次調査 ・新宿宿跡	99. 5. 7. 99. 10. 14	244.1	古代の汲井（河内）、准生時代土器、近世酒	56
准	1999	4	CD~CM19~42	医療 院	鹿口道跡第11次調査 ・新宿、寺跡	99. 8. 19~12. 22	2020	准生時代木口駅跡、古墳時代道路、中 世~近世墓葬	56
准	2000 2005	2 2	CO~CV23~44 CO~CM38~41 CN28~38	医療	鹿口道跡第12次調査 ・エヌルモーセンター	00. 10. 2~ 05. 05. 10	1897	准生時代土器、瓦器、古墳時代、中世 墓、近世土器、酒	56 61
准	2002	3	BL~BX46~51	大正 向	鹿口道跡第13次調査 ・社会教育研究棟	02. 4. 30~10. 25	934	准生時代の廻、古墳時代の・櫛形土 器、准生時代の廻、瓦器	73

(三朝地区：福昌遺跡)

総合 番号	年度	名号	島内座標	所属	調査名称	調査期間	面積 (m ²)	地 理	文 化
⑤	1997	1・2	-	召	福昌遺跡第1次調査 ・実験古墳	97. 5. 10~20 7. 28~31	269	准生時代早期・准生時代中期・中世 ・近世墓葬	35
⑥	1997	3	-	召	福昌遺跡第2次調査：先駆田光株式会 社による土器スケープ4分	97. 11. 25~12. 5	120	近世・中世・古代の廻	35

付表2-2(2) 計掘・確認調査

(津島岡大遺跡)

登記 番号	年度	名号	島内座標	所属	調査名称	昭和満実 (m)	広葉土厚 (cm)	地 理	文 化
(3)	1983	4	BH13	無	八幡通御所予定地	2.5	-	一津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	2	BH17	無	松本宿小原ゴンゴロ予定地	3.5	-	-	1
5	1983	3	BL-BG14 2L-BH15 2M-BH16 M-16~18 2C18	無	伊藤賀野新宿場	2.0	-	29. 所で六種・舟萬賀大第2次調査： 1983年度	1
6	1983	4	ZF22~23	農	船場新宿予定地	2.0~3.0	0.6	2ヶ所、1.暮前 - 1987年度工事立 合	1
(7)	1983	5	DC~BD15	草	大学芋宿新宿予定地	2.0~3.0	0.9	3ヶ所、一津島岡大第26次調査：2000 年度	1
(8)	1983	6	BD30	無	保育管理センター新宿予定地	2.0~3.0	0.8	一津島岡大第10次調査：1989年度	1
9	1983	7	B416	事	津島宿新宿予定地	0.9	0.9	土作所（1987年度工事立合）	1
10	1983	8	AW05	無	松本宿新宿予定地	3.0	1	土作所	1
12	1985	2	SD80	牧柵	津島宿新宿予定地	3.5	1.2	飛揚など水築器（1986年度工事立 合）	5
13	1985	7	AZ02	教育	前原神子予定地	2.6~3.4	1.2	3ヶ所、1.神人・健太郎土器出土	5
14	1989	3	AV~AW99~01	学	宇都御所新宿予定地	2.0~3.0	1	津島岡大第3次調査：1989年度	5
(17)	1986	3	BF~DG09	事	島内宿跡新宿予定地	2.4、1.2~1.7	1.1	一津島岡大第4次調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AY~AZ01	大正	自然地形と岩斜抹天子予定地	1.6~3.2	0.6~0.8	津島岡大第5次調査：1986年度	6
22	1987	4	AP02 (土塁構造)	少	少人國屋新宿予定地	2.2~2.8	-	鴨文時代・准生時代・近世の遺構遺物	8
(23)	1987	5	AV1	門	船形門跡新宿センター新宿予定地	2.0~3.0	2	津島岡大第6次調査：1988年度	8
24	1987	6	AY09	准	舟屋新宿用新レバータ新宿予定地	3.0~3.5	2.1	1.柱、走行の遺構、4代・中世の柱材 （根拠）、瓦器	8
25	1987	7	BD09	乳量	舟屋新宿用新レバータ新宿予定地	2.5	0.7	歴文時代瓦器、瓦片、下板・洗漱用器	8
29	1988	27	AX04~06, AW04	上	枝吉宿新宿予定地	2.0~3.5	-	津島岡大第6次、7次調査：1988年版	11
30	1988	19	ED28~19	動物	動物実験施設新宿：透視実験施設	2.5	1.1~1.2	・津島岡大第8次調査：1991年度	13
31	1988	20	PC29	歩	望月新宿予定地	2.5	1.2	半井・若井の遺物出土（1988年度工事立 合）	11
33	1989	2	AZ~BA05	改修	津作所新宿用新レバータ	2.5	0.5	歴文時代瓦器、准生時代瓦器・中井二番古 （複数）、瓦器、洗漱用器	14
34	1989	3	AZ17	大正	合併気配施設新宿予定地	4.0	1.6~2.0	准生・若井の木の本村の跡跡、津	14
35	1989	4	RD02	學	学習令宿新宿予定地	2.0~3.2	1	准生時代・近世の町（1988年度工事立 合）	14
36	1989	5	AV~AW13	園	区画新宿予定地	3.0	1.4~1.6	津丸岡大第12次調査：1993年版	14

組合 番号	年次	番号	場所・施設	形質	調査名跡	総面積 (ha)	面積(%)	特 徴	文獻	
126	2001	31	FH14	当	水部接車車両改工事に伴う財産税賦課標定	1.05	0.45~0.75	12ヶ所掘削、中層まで鉄鉱	66	
130	2002	29	FH15	現	社会資源施設改修工事	—	1.6	1.5	3ヶ所、古く白石城まで発掘、突貫工事と土器、瓦がまとめて出土し、近世住民の生活	71
131	2002	34	EC12~15	当	木本彌敷新設・仕事・松木村・質路	1.2~2.5	0.7~1.2	突貫工事と土器、瓦がまとめて出土し、近世住民の生活	71	
132	2002	51	EC13	現	本部駐除所その他工事:雨木排水槽、貯水池	1.37	0.8	川底梁と古代、中層まで鉄鉱	71	
133	2002	54	HB42~3D14	現	本部駐除所その他工事:雨木排水槽、貯水池	0.95~1.0	0.8	2ヶ所で鉄鉱と古代まで鉄鉱、GL=1.3mで黑色化	72	
134	2002	55	BH07~09	既存	教説改修機械室改修工事	1.0~1.26	0.95	4ヶ所、千葉市まで鉄鉱	71	
135	2002	57	FB-EH14~15	当	田代丸跡新設工事改修工事:松木村	1.0~2.0	0.95~1.1	一般地盤上止工まで鉄鉱	71	

(鹿田地区:鹿田造跡)

監査 番号	年次	番号	場所・施設	形質	調査名跡	総面積 (ha)	面積(%)	特 徴	文獻	
3	1983	23	AO~AW22	既存	新井跡複数墓穴改修工事	1.3	—	古墳時代板状土器、分類表と製量、貝集殻	1	
7	1985	6	AW-BE13 BE-EH14	現存	外来詮語地蔵堂改修工事	1.8~1.7	0.7~1.3	中世、女性の縮足、遺物	5	
8	1985	12	AG11~AG24 AP23	現存	高須塚原改修工事:毛氷配鏡・ハンドル・A型鏡	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、手形金容器・ビット	5	
9	1996	9	BE-CH11	既存	笠立湖改修工事改修工事	0.8~1.3	0.8	中安阿含、土器・臼	6	
11	1996	21	CL~CR12、CR~CX13-D~DA14	現存	廻游及び開拓工事	2	0.8~1.0	小糸山古墳	6	
14	1997	8	DC07	既存	寺道塚新設に伴う墓地整理工事	2.5	—	先史時代食糞物・遺構認定	8	
15	1999	46	CE0~37-44 CJ-CR45 CT-28~29	既存	吉尾跡改修工事改修工事:竹林改修	1.2~1.5	0.7~1.0	2ヶ所、中良富を伴証	14	
18	1992	29	RW71	ア	アイソトープセンサーと鉛錠・象牙根	1.4~1.5	0.9	中良津1号	25	
19	1993	61	CT73	ア	テレスコト基盤埋設	1.2	1.0	古代:1点	25	
20	1994	5	UD60~62	既存	護岸改修工事	—	1.5	0.8	近世:扇貝はすべて遺傳度の可能性あり、裏3.3m:ビット9個	33
23	1995	11	DG-EH18	既存	鹿田飯沼跡改修:既存雨落溝改修新設	1.6	1.0	遺伝度上位に系統地質・青灰岩と粘土岩、漁港なし	38	
22	1996	14	CD07~08	既存	鹿田地区基盤整備:貯液タンク改修工事	2.3	1.0	中世2箇所改修、溝3条、溝内から竹林・吉尾の土器と灰瓦	38	
23	1995	17	CD08~CC11	既存	西口地区足の整備:附属物改修工事	1.23	0.85	古名賀船記、中良津地貯水、灰瓦等、二重堤防などで中良全員の1.~2倍程度は残存	38	
24	1995	23	DK56~67	既存	放牧ネット取扱工事	3	0.8	約60cmを32箇所。その内4箇所は土器碎片、砂利出土。某地区改修では、GL=2~3m以上が普遍か。	38	
30	1998	36	DV73、CN78	既存	枝垂新宮に伴う假設式工事	1.2	1.0	中世等まで鉄鉱	53	
33	1999	15	DV65~71	既存	研究改修工事:3箇所低水側、質路	1.2~1.4	0.9	中世等まで鉄鉱	56	
34	1999	16	LS065	既存	研究改修に伴う塗抹地	2.2	1.1	自然5.2m、古墳群、中良津、ビット	56	
35	1999	27	DY42~43 DT43~45	既存	豪勢落成記(電気設備):地中配管	1.25~1.45	0.45~0.5	2ヶ所、手折落生で掘削、局所不明の遺構	56	
36	1999	41	CF21~28 CF~C28~33	既存	海林新設に伴う泥炭溶解	1.7	—	面積18.5、鹿田13区調査3区兩側引削で中良津2箇所選定	56	
37	1999	46	CN16~DE49	既存	調査新設に伴う汚水・質路	2.3	1.2	古墳時代の丹波丘陵、土坑1箇、中良津等	56	
38	1999	47	CM-CX-CP-CR- CT48 CV-DA-DC-BD- DF59	既存	アサクリング跡ネットポール	2.0~2.3	—	11ヶ所、磯崎6~7mに対応、7~10m:2ヶ所近く陥没地。琵島港は河岸	56	
39	1999	48	DH51	既存	西枝新宮に伴う汚水・質路	2	1	西城1.4~7箇所露頭、古墳時代は潮まで駆出か。	56	
41	2000	25	CD41~CN45	既存	海林新設に伴う土坑工事:質路・汚水等	1.6~1.8	—	溝となるむ遺構など複数	61	
42	2000	26	CO01~2 CS45、DV45	既存	電線及び外引の構造工事	1.6	—	7ヶ所、既存土坑1箇、後折合砂質土層・断層内跡質土帶を露出、微高地帯か。	61	
43	2000	29	DL27	既存	西海岸改修切り離し用バーラ取付工事	0.8~1.15	0.7	GL=0.85mで黄土と灰色土	61	
44	2000	47	DG-DJ28~67	既存	豊田田舎町側用川岸整備改修工事	2.1~2.3	1.3~1.5	幅120mの堅磐地盤、古代の瓦跡、河邊を確認	62	
45	2001	37	HK~HA43、CA- 43~55、CA44~ 55~59、CA58~ CA59~CA35	既存	複数既存改修材費算定実験調査に伴う改 修地盤工事	1.65	0.7~0.9	中井県までの堅磐、土壁上器が多数出土した地あたり。	66	
47	2002	10	CH11~CN22	既存	奥川地区ガス配管改修工事	2.0~2.3	0.87	中井橋まで掘削	71	
48	2002	19	BT-DU11	既存	南原町ガス配管改修工事	0.5~1.8	—	2ヶ所、GL=1.22mまで掘削した轟で中良または水井戸跡認定	71	
49	2002	22	CQ41~42	既存	ノルザーザンタール新設工事:土坑	1.5	—	1ヶ所、金谷港まで掘削	71	
50	2002	25	CG41、CO34 CP33、CO38	既存	ニトリギー・セントラル新設工事の施工作業	1.47~1.66	—	4ヶ所、土井港まで掘削	71	

登録番号	年度	音楽	横内座標	所属	調査名稱	掘削深度 (m)	造出土量 (m ³)	種別	文獻
51	2002	ガ	CV36-45	古墳	ヌミルダーセンタ- 楽譜等その他の上草	0.9~2.9	0.9	小丘の窓口・柱穴・構	71
52	2002	36	B7-T6S6-53	遺跡	奈良学研究会発行その他の上草	1.86~2.0	0.8~1.0	△▲○、印量鏡等で発掘	71
53	2002	52	DC057	古	本町祇園会その他の上草	1.25	-	印量鏡	71
54	2002	56	E018	医療	田辺市立総合クリニックドクタ-の上草	1.08	-	田辺市立総合クリニックドクタ-の上草	71

(東山地区)

登録番号	年度	音楽	横内座標	所属	調査名稱	掘削深度 (m)	造出土量 (m ³)	種別	文獻
1	1983	13		教育	附城町立小学校	4.0~5.0	-	シルト層中	1
2	1997	23		教育	附城町立中学校附城高等工科	1.2	0.29	GL 1.1m で北側水田付、西立派	50

(三郷地区：福呂遺跡)

登録番号	年度	音楽	横内座標	所属	調査名稱	掘削深度 (m)	造出土量 (m ³)	種別	文獻
4	1997	18	-	国	実験経済法調査(作付・植生・数粒数調査)歩道	1.0	-	(GL 1.0m で甲被包帯層に裏に打かれて)上4m	50

付表3 塙藏文化財調査研究センター収藏遺物概要(2003年度現在)

測定	場所	横内・延長	測定(1編:30リットル)						内 容 (主要時間・有性植物)	文献	
			起	止	右沿(木質)	縦子(木)	その他	サンプル			
段階	発掘	西園寺第1次斎場 (原木診断)	598	598	5.5	60	0.5	1	28	発生中期～中後、木板樹皮、人面型石像等、ガラス等	
*	*	西園寺第2次斎場(NM-F-CT-3)	118.9	94	0.4	30	0.5	-	4	発生中期～中後、神社・神殿、木橋等	
*	*	西園寺第3次斎場(段構)	231.6	36	0.3	90	0.3	-	5	古代・中世、石器	
*	*	西園寺第4次斎場(内宮)	3.5	2	0.3	-	0.2	-	1	古代、西周製品	
西園寺	*	西園寺第5・6次斎場(空木・桶)	130	82	2.5	20	1.5	-	19	発生中期～中後	
ア	*	西園寺6次斎場	62	59	0.5	1	1.3	-	-	中世、古鋼製品	
西園寺	*	西園寺7次斎場 (墨塗付)	81	66	-	10	-	1	4	強度・底材、灰岩木製品	
西園寺	*	西園寺8次斎場(原木診断)	8	8	-	-	-	-	-	強生・中後	
西園寺	*	西園寺第9次斎場(精耕工具)	120.1	96	0.1	13	-	9	2	強生・道具、木製工具	
西園寺	*	西園寺第10次斎場(前輪)	2	2	-	-	-	-	-	古代・近世	
西園寺	*	西園寺第11次斎場(空木・桶)	74	66	-	4	-	2	2	強生・底材、木製工具	
西園寺	*	西園寺第12次斎場	147	77	1	34	-	-	-	強生・底材、骨	
西園寺	*	西園寺第13次斎場	254	211	5	10	-	-	28	強生・近世	
西園寺	*	西園寺第14次斎場(精耕工具)	66	54	-	3	-	-	9	中世・近世	
西園寺	*	西園寺15次斎場(結合部者研究施設周囲)	4	4	-	-	-	-	-	古鐵器類・中世	
余	*	中津大寺第1次斎場 (NP-1)	5	0.5	0.5	4	-	-	-	強生中期～近代	
農	*	中津大寺第2次斎場 (空木付保険施設・板骨)	17.5	12	1.3	-	-	4	強生中期～近世、閉關	4	
幸川	*	伊丹大寺第3次斎場 (室内保険施設)	67	49	1.0	2	4.5	-	16	神文後期～古鉄器類、古代～近世 石製容器、泥漬塗瓦、岩屋	19
*	*	伊丹大寺第4次斎場 (室内保険施設)	1	1	-	-	-	-	-	強生中期～強生前期、漆器等 食器・食器	6
大正	*	伊丹大寺第5次斎場 (空木付保険施設・板骨)	82	68	3	1	8	-	2	青銅時代～古墳、古代・近世、耳杯・ 牛軛環(銀冠)、銅鏡	27
丁	*	伊丹大寺第6次斎場 (生物付保険施設・板骨)	49	33	1	9	6	-	-	鶴文後期～近世、人馬木駒、アンペ リ、人馬土駒品	30
工	*	伊丹大寺第7次斎場 (保険付保険施設)	31.5	20	0.5	1	-	-	20	鶴文後期～近世	35
幸	*	伊丹大寺第8次斎場 (保険付保険施設)	11.3	10	0.5	-	-	1	-	從文後期～近世	32
丁	*	伊丹大寺第9次斎場 (空木付保険施設・板骨)	50.0	30	2.5	3	-	-	15	鶴文後期～近世	47
金	*	伊丹大寺第10次斎場 (保険付保険施設)	87	78	-	7	-	2	-	強生中期～近世	55
*	*	吉野町大寺11次斎場 (保険付保険施設)	5.5	3	0.5	-	-	2	-	鶴文後期～近世	36
*	*	吉野町大寺12次斎場 (保険付保険施設)	53	24	1	20	-	10	-	鶴文後期～古墳・古廟	41
*	*	吉野町大寺第13次斎場 (保険付保険施設)	2.5	32	0.5	-	-	1	-	古墳～古墳	46
*	*	吉野町大寺14次斎場 (古墳埋立施設・門)	13	12	-	-	-	-	24	鶴文後期～中世、鶴文後期、赤点早期 灰陶、アンペリ、堅巖	22
*	*	吉野町大寺15次斎場 (チャーミンセッポリトリー)	68	44	10	20	-	-	-	-	-

文部	種別	調査名・行政区	指標(1回：前30ノトキ)					指 標 考 (「上課時間・就休時間」)	文部
			総数	1番	2番	3番	その他の		
農業	実施	農園圃場16次葉茎 (被栽培耕種)	0.3	0.3				鶴文後期～近世	44
園	*	津喜太郎16次葉茎 (被栽培耕種)	76	61	3		12	鶴文後期～近世	44
企	*	津喜太郎16次葉茎 (被栽培耕種)	1	1				鶴文後期～近世	53
	*	津喜太郎16次葉茎 (被栽培サブ灌)	31	21	1	4	2	鶴文後期～近世	64
森	*	芦谷大蔵25次葉茎 (被栽培灌)	1	1				鶴文後期～近世	93
工	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培スベーダー)	7	5	2			鶴文中期～近世	66
農	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培ツラギ秋草立)	36	26	2	3	3	鶴文後期～近世、古代聚落村、古墳群	53
文部省	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培)	127	99	1	99	2	鶴文後期～近世、古墳、城、村	56
文部省	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培園)	2.1	1	0.1	1		鶴文後期～近世	63
農	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培桑成り園)	0.3	0.1		0.2		中・近世	61
手	*	木下綱16次葉茎 (被栽培水没)	41	26		5	10	鶴文後期～近世	61
事	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培木本)	15	14	1			鶴文中期～近世	68
工	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培木本)	17	15	2			鶴文後期～近世	71
農	*	津喜太郎25次葉茎 (被栽培木本)	2.1	2	0.1		1	鶴文中期、孫生中期、中世	55
風	*	藤田路第1次葉茎 (被栽培)	9	8				中古～近世	55
日	*	藤田路第1次葉茎 (被栽培研究スリーブ)	2.1	2			0.1	中古～近世	55
医師	調査 導師	鶴田（被取扱）	1	1				第4～山井	5
学生	*	本島氏（男子学生）	1	0.7	0.3			鶴文後期～孫生後期	+
大正	*	（阿佐洋字研究所）	1	1				鶴文後期～孫生後期	6
少	*	出島弓子（木内人延舟）	1	1				鶴文～中世	8
穀	*	辻良久（舟屋賣用スベーダー）	0.3	0.3				中・近世	+
庶民	*	津島氏（→）	0.7	0.7				鶴文～近世	11
工	*	津島氏（被取扱）	.	1				鶴文～近世	11
農業	*	津丸氏（被取扱・若狭延松塗）	0.7	0.7				鶴文～孫生・中・近世	+
事	*	津島氏（御茶園農地）	0.3	0.3				中・近世	+
大正	*	津島氏（合意販賣社）	0.2	0.2				中・近世	10
学生	*	津島氏（女子学園）	0.4	0.2			0.2	中船	9
教育	*	津島氏（寺澤川ニレベータニ）	0.3	0.3				中古～中世	+
同	*	津島氏（園芸館）	0.8	0.8				初唐～平安世	18
学生	*	津島氏（空手道所ダンブ）	0.4	0.4				中古	+
先生	*	津島氏（吉澤唯理子）	0.1	0.1				平安	+
ア	*	豊中（アソシート・総合センター）	1	1				中世～近世	+
事	*	舟辺氏（佐利村立海ぬく）	0.5	0.5				舟辺？～中世	+
直	*	津島氏（馬鹿子敷設校）	0.1	0.1				津文？～近世	33
通	*	津島氏（植物園立目切）	0.1	0.1				中世	53
シ	*	津島氏（システム工学）	0.1	0.1				シテイ	53
金	資金	紀伊坂	2	2				分担財土耕掌	2
ナ	*	94年坂	1	1				中世	2
シ	*	95年底	1	1				舟辺？～中世	3
ナ	*	96年底	0.5	0.5				舟辺？～中世	6
シ	*	97年底	0.5	0.5				舟辺？～中世	8
分布	*	89年度 三崎・本郷	0.3	0.3				舟辺？～中世	14
全	セ	91年度 92年坂	0.3	0.3				舟辺？～中世	21-22
*	*	93年度～99年度	0.8	0.8				舟辺？～中世	30-33
コ	ク	00年度	3	3				舟辺？～中世	38-41
コ	ク	01年度	4.5	2.5	6			舟辺？～中世	50-53
コ	ク	02年度	2	2				舟辺？～中世	56
ク	ク	03年度						舟辺？～中世	62
合	セ	平均	2752.9	1948.3	67.1	455.2	25	15.1	242.7

* たば・津子・キンブの調査は、資料整理が進行によって統計的感覚が変化するため、若い和歌の本数が大きい。
又は注目すべきものがない。

付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小構法目黒遺跡 (AW14区) の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集		1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告II (裏字部構内 BH13ほか) 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2集 (津島四大遺跡第2次調査)		1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1986年度	1987年10月

付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2004年3月まで)

番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡 I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 (鹿田遺跡第1・2次調査)		1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号		1988年10月
10	鹿田遺跡 II 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊 (鹿田遺跡第3・4次調査)		1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6	1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号		1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第3号		1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7	1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号		1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第5号		1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第6号		1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8	1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊 (津島岡大遺跡第3次調査)		1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第7号		1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9	1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号		1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第9号		1993年3月
24	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 (鹿田遺跡第5次調査)		1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10	1992年度	1993年12月
26	岡山大学構内遺跡調査研究センター報 第10号		1993年11月
27	津島岡大遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 (津島岡大遺跡第5次調査)		1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号		1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第12号		1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11	1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第13号		1995年3月
32	津島岡大遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊 (津島岡大遺跡第8次調査)		1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12	1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第14号		1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊 (津島岡大遺跡第6・7次調査)		1995年12月
36	津島岡大遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊 (津島岡大遺跡第11次調査)		1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第15号		1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13	1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号		1996年10月
40	鹿田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊 (鹿田遺跡第6次調査)		1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊 (津島岡大遺跡第13次調査)		1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号		1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査企研究センター報 第18号		1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14	1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年		1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊 (津島岡大遺跡第14次調査)		1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊 (津島岡大遺跡第9次調査)		1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号		1998年3月

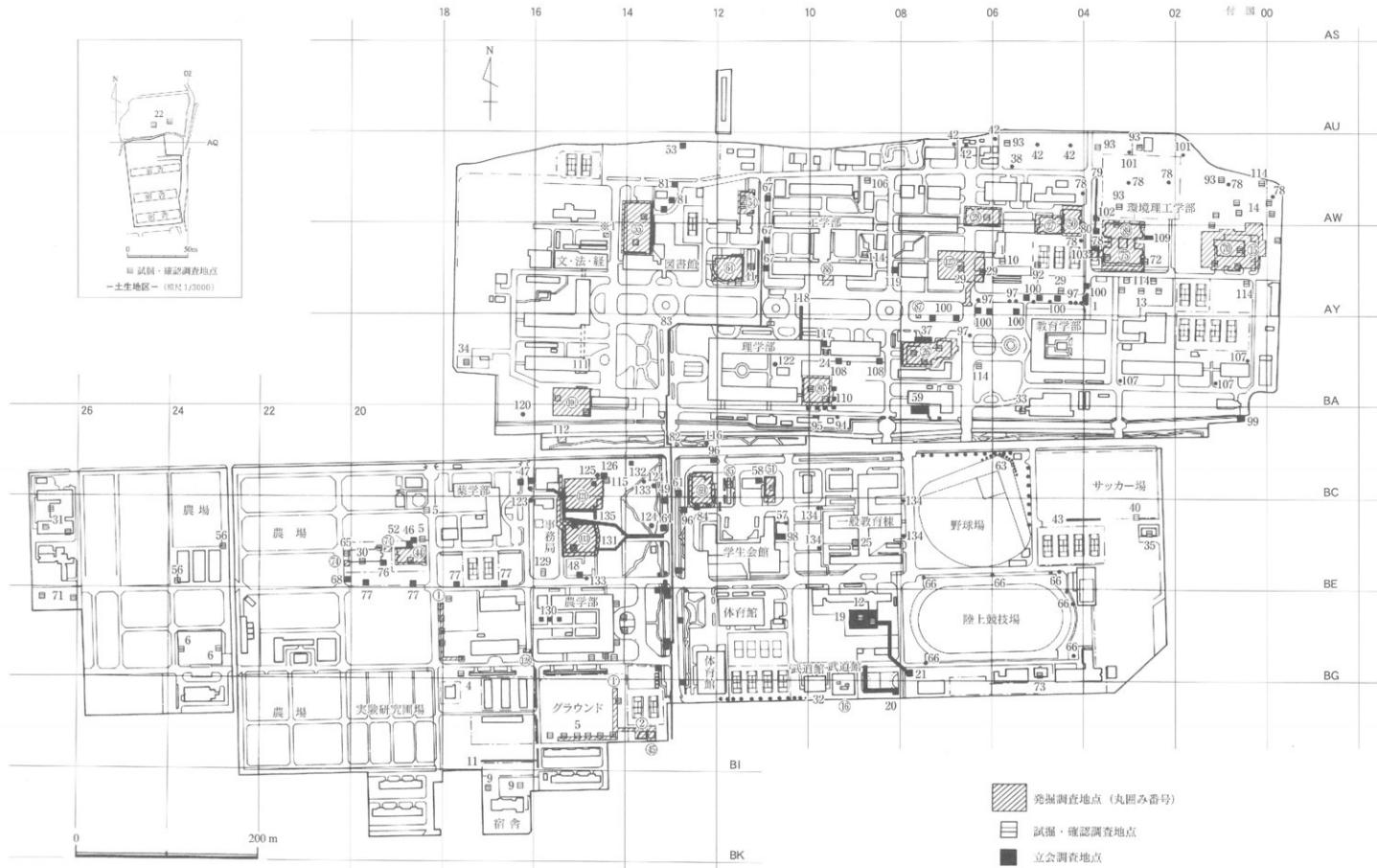
番号	名 称	発行年月日
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡1 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第15巻 (福呂遺跡第1・2次調査)	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評議報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 19 2001年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16巻 (津島岡大遺跡第10・12次調査)	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第17巻 (津島岡大遺跡第19次調査)	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター記要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18巻 (津島岡大遺跡第27次調査)	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター記要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19巻 (津島岡大遺跡第15次調査)	2004年3月

発掘調査報告書は太字

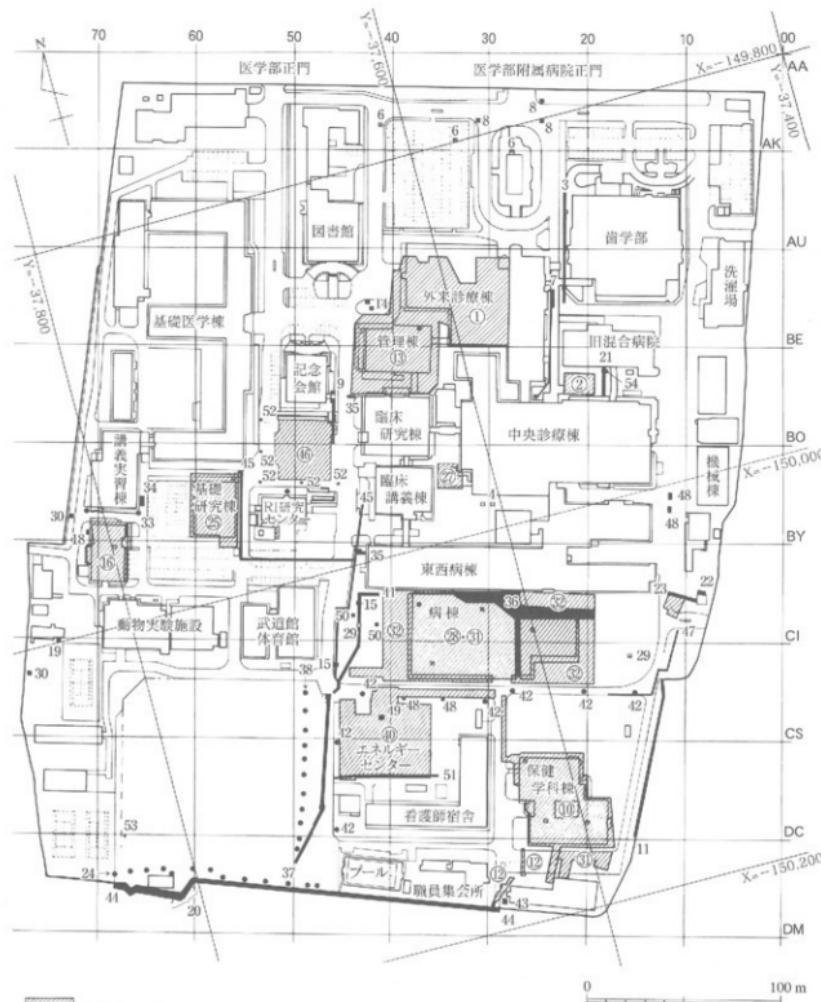
付 図



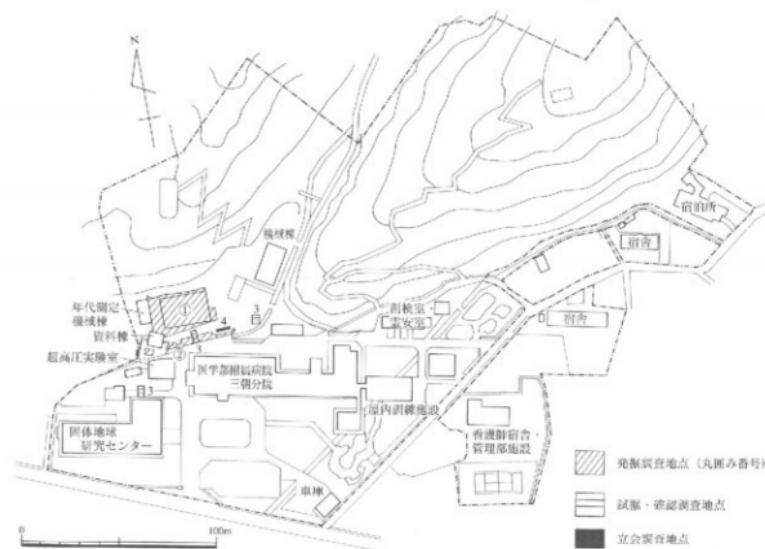
付図1 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)



付図2 2002年度までの調査地点【1】—津島地区一 (縮尺1/4000)



付図3 2002年度までの調査地点【2】—豊田地区—（縮尺1/2500）



付図4 2002年度までの調査地点【3】—三朝地区— (縮尺 1/2500)



付図5 2002年度までの調査地点【4】—東山地区— (縮尺 1/4000)



付図6 2002年度までの調査地点【5】—倉敷地区— (縮尺 1/4000)

Copyright © Archaeological Research Center, Okayama University
Printed in Okayama, Japan

2004年12月24日 印刷
2004年12月24日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2003

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中二丁目1番1号
(086) 251-7290
印刷 西日本法規出版株式会社



BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2003

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Okayama-city, 700-8530 Japan
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>